

沢の浦古墳群

近畿自動車道舞鶴線関係
埋蔵文化財調査報告書



1987.3.

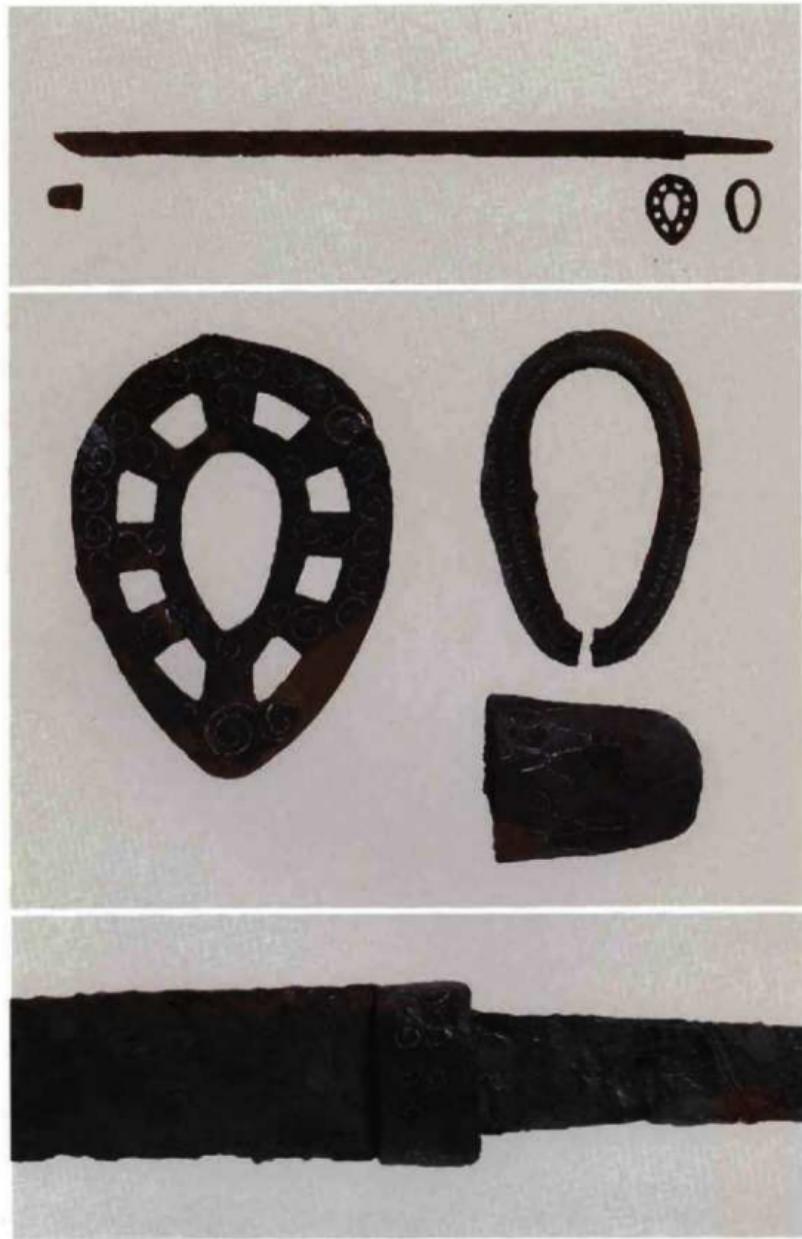
兵庫県教育委員会



2号 墓 石室



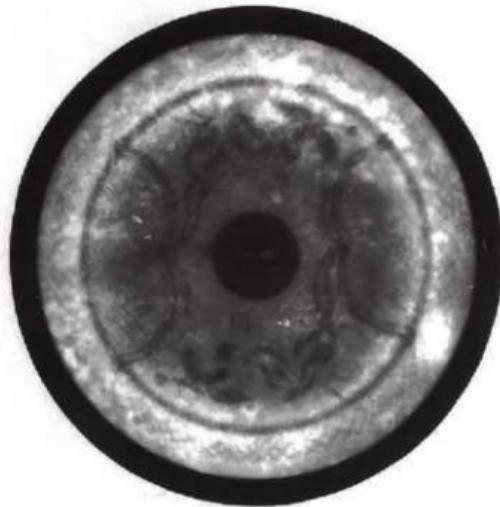
耳 环



銀象嵌大刀



伏龍螺鳥文鏡



同鏡 X 線写真

例　　言

1. 本書は、近畿自動車道舞鶴線建設計画に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、兵庫県多紀郡西紀町上板井に所在する沢の浦古墳群の発掘調査報告書である。
2. 古墳群の名称は、従来沢の浦坪古墳群としていたものを、今回沢の浦古墳群と改めた。
3. 発掘調査は、日本道路公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が主体となって昭和58年度に行った。調査は、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課の池田正男（現播磨町郷土資料館）・村上泰樹・市橋重喜が担当した。
4. 本書に使用した写真的撮影は、遺構については調査員が行い、遺物については森昭氏に依頼した。
5. 本書に使用した図のうち、遺構については調査員と石本晶義・山口慶一・難波達也・西村守・奥野和宏・赤井利也・村上慎司・畠智幸・佐藤美和・泉本さとみが行い、遺物については池田と池野栄子・細川美千子・平井美鈴が行った。
6. 本書に使用した図の製図は、平井・細川・山口が行った。
7. 奈良国立文化財研究所の武田正昭・肥塚隆康両氏には、金属製品の分析をお願いし、保存処理及び銀象嵌の研ぎ出しについては両氏の御指導の下に兵庫県教育委員会の加古千恵子が行った。
8. 武庫川女子大学の安田博幸氏には、赤色顔料の分析をお願いし、玉稿をいただいた。
9. 奈良教育大学の三辻利一氏には、土器の胎土分析をお願いし、玉稿をいただいた。
10. 岡山理科大学の池田次郎氏には、出土人骨について御教示いただいた。
11. 本書の執筆は、第3章第3節3・第4節3・第4章のうち、須恵器については池田、鐵鏹・刀子・鏡・鏡・耳環については細川、その他を市橋が行った。
12. 本書の編集は、市橋が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の環境	2
第1節 遺跡の位置	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の記録	9
第1節 遺跡の立地と原状	9
第2節 調査の概要	12
第3節 1号墳の調査	13
1. 墓丘	13
2. 横穴式石室	17
3. 出土遺物	18
第4節 2号墳の調査	27
1. 墓丘	27
2. 横穴式石室	31
3. 出土遺物	32
第5節 その他の遺物	56
第4章 まとめ	61
付載1. 兵庫県多紀郡西紀町沢の浦2号墳出土の須恵器朱壺にかかる赤色顔料物質の微量定性分析と朱壺内赤色土壤の赤色成分の定量分析	71
付載2. 沢の浦2号墳出土須恵器の胎土分析	75

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図	3
第2図	遺跡周辺地形図	8
第3図	古墳群地形測量図(調査前)	10
第4図	古墳群地形測量図(調査後)	11
第5図	1号墳地山整形及び石室掘り方実測図	14
第6図	1号墳墳丘断面図	15
第7図	1号墳石室基底面実測図	18
第8図	1号墳石室実測図	19
第9図	1号墳遺物出土状況実測図	22
第10図	1号墳出土遺物実測図(1)	23
第11図	1号墳出土遺物実測図(2)	24
第12図	1号墳出土遺物実測図(3)	25
第13図	1号墳出土遺物実測図(4)	26
第14図	2号墳地山整形及び石室掘り方実測図	28
第15図	2号墳墳丘断面図	29
第16図	2号墳石室基底面実測図	32
第17図	2号墳石室実測図	33
第18図	2号墳遺物出土状況実測図(1)	36
第19図	2号墳遺物出土状況実測図(2)	37
第20図	2号墳出土遺物実測図(1)	39
第21図	2号墳出土遺物実測図(2)	41
第22図	2号墳出土遺物実測図(3)	43
第23図	2号墳出土遺物実測図(4)	44
第24図	2号墳出土遺物実測図(5)	45
第25図	2号墳出土遺物実測図(6)	46
第26図	2号墳出土遺物実測図(7)	47
第27図	2号墳出土遺物実測図(8)	48
第28図	2号墳出土遺物実測図(9)	50
第29図	2号墳出土遺物実測図(10)	51
第30図	2号墳出土遺物実測図(11)	53

第31図	2号墳出土遺物実測図(12).....	54
第32図	2号墳出土遺物実測図(13).....	54
第33図	その他の遺物実測図(1).....	58
第34図	その他の遺物実測図(2).....	59
第35図	その他の遺物実測図(3).....	60
第36図	須恵器杯身・杯蓋分類図.....	63
第37図	須恵器杯身・杯蓋法量分布図.....	64

表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表.....	4
第2表	土器觀察表.....	83
第3表	鉄鑿計測表.....	93
第4表	刀子計測表.....	95
第5表	耳環計測表.....	95

図版目次

巻頭図版 1	上. 2号墳石室 下. 耳環
巻頭図版 2	銀象嵌大刀
巻頭図版 3	上. 伏龍螺鳥文鏡 下. 同鏡X線写真
図版 1 造 景	1. 古墳群造景—東から 2. 古墳群造景—北から
図版 2 全 景	1. 古墳群全景—南から 2. 古墳群全景—西から
図版 3 1号墳	1. 1号墳全景（墳丘遺存状況）—西から 2. 1号墳全景（地山整形）—西から
図版 4 1号墳	1. 石室と列石—南東から 2. 墳丘土層断面—北から 3. 墳丘土層断面—南から
図版 5 1号墳	1. 石室と掘り方—南から 2. 石室—南から
図版 6 1号墳	1. 石室右側壁—南東から 2. 石室左側壁—南西から
図版 7 1号墳	1. 石室内遺物出土状況—南から 2. 同上拡大—東から
図版 8 1号墳	1. 石室内遺物出土状況 2. 石室内遺物出土状況
図版 9 2号墳	1. 2号墳全景（墳丘遺存状況）—西から 2. 2号墳全景（地山整形）—西から
図版 10 2号墳	1. 石室と墳丘土層断面—南から 2. 地山整形構土層断面—東から 3. 墳丘土層断面と石室掘り方—東から
図版 11 2号墳	1. 石室と掘り方—南から 2. 石室奥壁—南から

図版 12	2号墳	1. 石室右側壁—北東から 2. 石室左側壁—南西から
図版 13	2号墳	1. 石室内遺物出土状況—南から 2. 同上—南から
図版 14	2号墳	1. 陶棺出土状況（復原後）—東から 2. 陶棺内人骨出土状況—東から
図版 15	2号墳	1. 石室奥部遺物出土状況—南から 2. 同上拡大—南から
図版 16	2号墳	1. 大刀出土状況—西から 2. 銛出土状況—西から 3. 石室内遺物出土状況—東から
図版 17	2号墳	1. 石室内遺物出土状況—東から 2. 石室内遺物出土状況—東から
図版 18	1・2号墳	1. 表土中遺物出土状況（左—須恵器、右—伏龍蝶鳥文鏡） 2. 表土中遺物出土状況（左—瓦器、右—土師器）
図版 19	出土遺物	1号墳出土須恵器
図版 20	出土遺物	1号墳出土須恵器
図版 21	出土遺物	1号墳出土須恵器
図版 22	出土遺物	2号墳出土須恵器
図版 23	出土遺物	2号墳出土須恵器
図版 24	出土遺物	2号墳出土須恵器
図版 25	出土遺物	2号墳出土須恵器
図版 26	出土遺物	2号墳出土須恵器
図版 27	出土遺物	2号墳出土須恵器
図版 28	出土遺物	2号墳出土須恵器
図版 29	出土遺物	1. 2号墳出土須恵器 2. 2号墳出土須恵器
図版 30	出土遺物	1. 2号墳出土須恵器 2. 2号墳出土須恵器
図版 31	出土遺物	陶棺
図版 32	出土遺物	須恵器ヘラ記号
図版 33	出土遺物	土師器（12—1号墳、107～110—2号墳、上—107内面の暗文）

圖 版 34	出土遺物	1号墳出土鐵器
圖 版 35	出土遺物	1. 1号墳出土鐵器 2. 2号墳出土鐵器
圖 版 36	出土遺物	2号墳出土鐵器
圖 版 37	出土遺物	銀象嵌大刀
圖 版 38	出土遺物	銀象嵌大刀
圖 版 39	出土遺物	1. 銀象嵌X線寫真部分拡大 2. 同上
圖 版 40	出土遺物	中世遺物
圖 版 41	出土遺物	1. 中世遺物 2. 丹波鏡臺

第1章　はじめに

近畿自動車道舞鶴線は、大阪府吹田インターチェンジと京都府舞鶴インターチェンジを連結するべく、日本道路公団によって計画された高速自動車道である。兵庫県下では、美嚢郡吉川町から三田市、多紀郡丹南町・西紀町、氷上郡春日町・市島町を通過して北上し、京都府福知山市に接する。現在工事は順調に進み、昭和61年度末には丹南-福知山インターチェンジ間が部分開通する予定である。

昭和53年、近畿自動車道舞鶴線の建設計画が具体化するに至り、日本道路公団から依頼を受けた兵庫県教育委員会では、同年度と56年度の2次にわたって埋蔵文化財分布調査を実施した。分布調査は路線予定地内及びその周辺に及び、数10ヶ所の包蔵地を認めることができた。これらの地点は順次確認調査を行い、その成果をもとに約20ヶ所について昭和61年度までに全面発掘調査を終了した。沢の浦古墳群が所在する多紀郡西紀町内では、本古墳群の他に箱塚古墳群、上板井古墳群、板井・寺ヶ谷遺跡、内場山城跡、西木之部遺跡の調査を行った。この結果、從来遺跡の分布密度が極めて希薄であった西紀町内の遺跡数と内容は飛躍的に増加することとなつた。

本報告の沢の浦古墳群は、多紀郡西紀町上板井字友永に所在し、2基の円墳で構成される古墳群である。本古墳群は、從来遺跡台帳に記載されていない未発見の遺跡であった。今回、近畿自動車道舞鶴線の建設工事に伴い、兵庫県教育委員会が昭和53年度に行った遺跡分布調査の結果、1基の円墳を確認し、その後昭和57年度に現地立会を行った際、さらに円墳1基の存在を認めたものである。そこで兵庫県教育委員会では、日本道路公団の依頼を受けて、昭和58年度に本古墳群の発掘調査を実施した。

発掘調査は、昭和58年11月～昭和59年3月まで約5ヶ月間行った。その間、昭和59年1月末から3月中旬にかけて記録的な豪雪に見舞われ、作業を一時中断せざるを得ない状況になるなど調査は困難を極めたが、関係諸機関の協力を得て無事終了することができた。

発掘調査後の整理作業は、これも日本道路公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が主体となり、兵庫県埋蔵文化財調査事務所において昭和60・61年度に行なった。

なお、発掘調査から本書の刊行に至る間、作業を進めるにあたり、地元をはじめ西紀・丹南町教育委員会、篠山町教育委員会、三田市教育委員会、丹南町文化財審議委員会、西紀町郷土史研究会、篠山郷土史研究会、西紀町・西紀中学校、西紀北小学校、篠山鳳鳴高等学校、兵庫県立歴史博物館等の多くの方々・機関に協力をいただいた。

特に、事業の委託者である日本道路公団大阪建設局三田工事事務所には、全期間を通じて種々便宜を計っていただき、ひとかたならぬお世話になった。深く感謝いたしたい。

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

沢の浦古墳群は、兵庫県北東部と京都府との府県境に近い篠山盆地の北西隅に位置する。篠山盆地は、中国山地東端近くの丹波高地の一角を占める東西約15km、南北約4kmの東西に細長い盆地である。周囲を三嶽・三尾山・三国岳・白髮岳・黒頭峰等、標高600~700m前後の山々に囲まれており、特に北縁は多紀連山と通称される険しい山塊に限られている。したがって盆地内から他地域へ出ようとすれば、河川沿いに下るか、あるいは鐘ヶ坂峠・栗柄峠・天引峠等の峠越えによらねばならない。

しかし一方、河川沿いや峠越えの道は他地域へと続き、篠山盆地は、古来、京都・大阪・播磨方面あるいは山陰地方からの交通路が交錯する山陰道の要衝であった。このように、篠山盆地はその地形的・地理的条件から閉鎖性と開放性の両面を併せもつと言える。

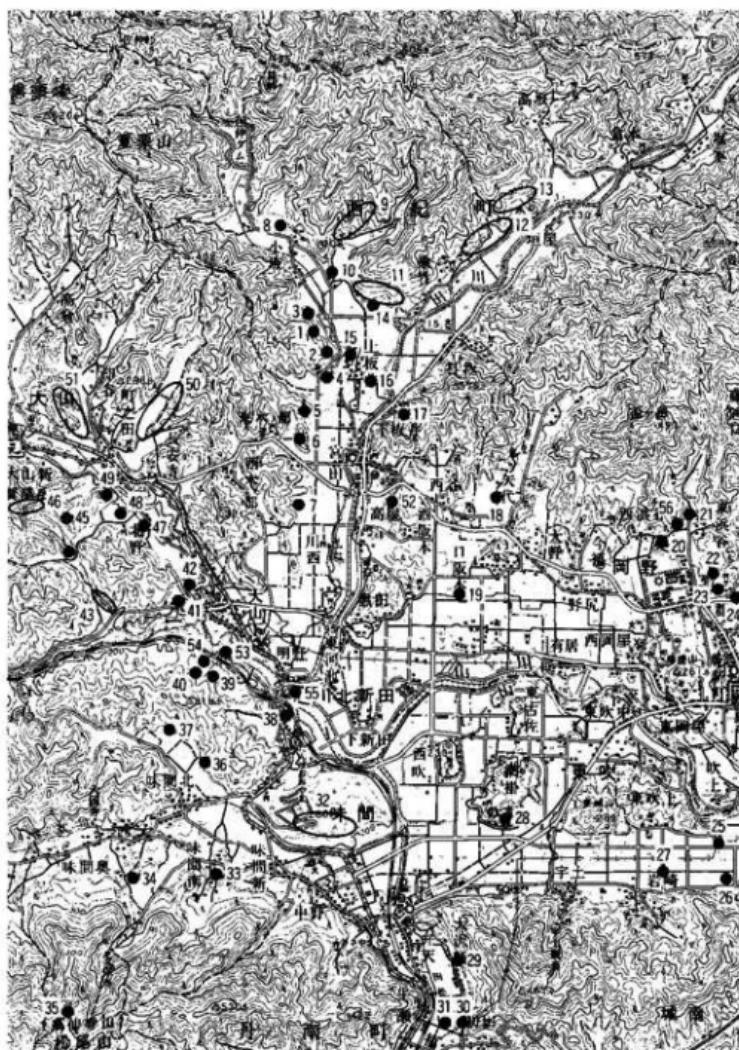
盆地平野部は、標高約200~250mで東から西にゆるやかに傾斜している。盆地の中央部には篠山川が蛇行して流れしており、岡川は川代渓谷を抜け佐治川と合流し、加吉川となってやがて瀬戸内海へと至る。

篠山川には、周囲の山間から流れ出てきた幾本もの中小河川が注ぎ込む。その1つである宮田川は、数峰に源を発して狭い山あいを縫い、小坂川と合流してやや流域を広げ、東西約1km、南北約3kmの小平野を形成している。小平野は、宮田川流域の中では最も可耕地の広い地域であるが、篠山盆地中央部とは下板井から川北にかけての低丘陵によって遮られ、隔絶した小地域となっている。

沢の浦古墳群は、小平野の北端に近く、宮田川と小坂川の合流地点に向かうように黒頭峰（標高約821m）から南東にのびた尾根の北東麓斜面に立地している。本古墳群の裾を縫い小坂川沿いに北上する道は、佐仲峠（標高約440m）を越えて水上郡春日町へ抜け、宮田川に沿ってさかのぼる道は、栗柄峠を経て京都府天田・船井両郡へと至る。すなわち本古墳群は、篠山盆地の北西の入り口にあたる地域に位置していることになる。

第2節 歴史的環境

篠山盆地における遺跡の発掘調査件数は、他地域と同様、開発事業の進行に伴って近年ますます増加の一途をたどっている。特に、昭和40年代に始まる農業基盤整備事業や、昭和57年度以降の近畿自動車道舞鶴線建設事業等の大規模工事は、従来遺跡の分布が希薄であった地域で



第1図 周辺道路分布図

第1表 周辺遺跡地名表

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	沢の浦古墳群	15	板井城跡	29	庄地古墳群	43	山田古墳群
2	上板井古墳群	16	上板井遺跡	30	種角遺跡	44	小丸山古墳群
3	難波古墳群	17	向山古墳	31	初田館跡	45	半鏡塚古墳群
4	板井・寺ヶ谷遺跡	18	岡野北遺跡	32	西山古墳群	46	波賀尾古墳群
5	河内多々权比神社	19	口阪本遺跡	33	味間南遺跡	47	金倉山遺跡
6	内場山城跡	20	八幡山古墳	34	西訪園塚	48	九ノ瀬遺跡
7	西木之部遺跡	21	東浜谷遺跡	35	高仙寺城跡	49	三ツ子塚1号墳
8	小坂古墳群	22	遊谷1号墳	36	三軒廻寺跡	50	姉尻古墳群
9	四王寺谷古墳群	23	居體塚古墳	37	里見山1号墳	51	名残古墳群
10	東山古墳	24	新宮古墳	38	西訪山古墳	52	大芝原1号墳
11	垂竹古墳群	25	谷山遺跡	39	阿弥陀古墳	53	大塊2号墳
12	桃谷古墳群	26	山ノ越遺跡	40	桂谷古墳	54	見駅塚山古墳
13	安養寺古墳群	27	岩崎西・坪遺跡	41	出谷遺跡	55	少将山古墳
14	垂竹遺跡	28	網岡城跡	42	大山遺跡	56	丸山古墳

も重要な発見が相次ぐ契機となった。

その中で注目されるのは、農業基盤整備事業に伴う集落遺跡調査例の増加である。同事業が水田部分で押し進められるにしたがって、従来山麓における古墳の確認に偏りがちであった調査状況が一変し、低地に立地する集落遺跡が数多く確認されてきた。また近畿自動車道舞鶴線建設に伴う発掘調査は、遺跡の面的な調査を余儀なくするとともに、かえって遺跡の構造的な把握を可能にしている。このような発掘調査例の増加によって、地域史を構築するための資料は徐々に蓄積されつつある。

以下では、最近の発掘調査の成果を加えながら、舞鶴山盆地の古墳時代遺跡を中心に、沢の浦古墳群を取り巻く歴史的環境について観察してみたい。

舞鶴山盆地における旧石器時代遺跡は、従来、木葉形尖頭器を出土した藤岡山遺跡（舞鶴町）等、数遺跡が知られるのみであった。しかし近年、板井・寺ヶ谷遺跡（西紀町）で始良火山灰層の上下に文化層が認められ、さらに遺跡南半部では良好な泥炭層が検出された。この調査は旧石器時代の編年研究・自然環境復原に多くの資料を提供し、全国的な注目を集める成果を得た。また同遺跡の南約1.2kmに位置する西木之部遺跡（同）でもナイフ形石器が出土した。

縄文時代遺跡も舞鶴山盆地ではこれまで確認例が少なく、藤岡山遺跡で後期の中津式土器・石錐・蔽石や晩期後半の土器棺、下笠見遺跡（舞鶴町）で晩期前半の土器群、また他の数遺跡で

草創期の有舌尖頭器が採集された程度であった。最近では、板井・寺ヶ谷遺跡で草創期の尖頭器や後期の宮殿式土器・石罐・石匙、西木之部遺跡で石罐や切目石錘等が少量出土している。

弥生時代になると鰐山盆地ではようやく遺跡数が増加する。その大半は遺物の表面採集のみによって発見されたものであるが、近年では発掘調査による遺構の確認事例も増えつつある。

前期にさかのぼる例は、岩崎四ノ坪遺跡（同）で土器・木器が出土しているのみであるが、中・後期になると、盆地の周縁部全域に遺跡の分布が拡がるようになる。中期では、藤岡山遺跡で後半代の方形周溝墓、雲部車塚古墳周堤帯（同）で土壇墓群、出谷遺跡（丹南町）や住吉川岸遺跡（同）で土壤状遺構が検出された他、龍円寺遺跡（同）・庄境1号墳下層（同）等で堅穴住居跡が確認された。後期では、内場山城跡（西紀町）で堅穴住居跡と木棺墓群、細工所遺跡（鰐山町）で堅穴住居跡が検出されている。

これら集落遺跡のはとんどは、中・後期を通じて連続するような大集落遺跡ではない。しかし、弥生時代末期～古墳時代前期になると、前代から続く遺跡の他に、新たに多くの集落遺跡が出現する。前述の西木之部遺跡では庄内式～布留式併行期の堅穴住居跡6軒と大量の土器群が検出され、板井・寺ヶ谷遺跡では同時期の約100基の土壇から良好な資料が得られた。また寺内遺跡（同）で古墳時代前期の隅丸方形住居跡、葭池北遺跡（同）・上板井遺跡（西紀町）・口阪本遺跡（同）では同時期の旧河道から大量の土器・木器が検出された。

西木之部遺跡や口阪本遺跡では、畿内や瀬戸内地方と山陰地方の両要素を持つ土器群が混在しており、種角遺跡（丹南町）や東城山遺跡（鰐山町）で出土したとされる石劍の存在とともに、両地域の文化が交錯する鰐山盆地の特徴をよく表している。

また、弥生時代～古墳時代にかけての集落遺跡は、盆地周縁部に比較的偏在している。このことは、盆地中央を西流する鰐山川の激しい氾濫が低地部の開発にとって大きな支障となり、同時代においては盆地周縁部の中小河川流域から開発が始まったことを容易に推測させる。

ところで、古墳時代前期の集落遺跡は前述したように年々その数が増えつつあるが、同時期の墳墓は現在、前山1号墳（鰐山町）と内場山2号墳（西紀町）の2例を数えるのみである。前者は、丘陵上に築かれた顯著な墳丘をもたない円墳で、埋葬施設は堅穴式石室とその近くに布留式併行期の豪棺が検出された。後者は、溝で区画した尾根先端の墳丘上に組合式木棺墓7基、土壇墓3基、壺棺墓4基が埋葬されたもので、墳丘中央の最も大きい木棺墓から素面頭大刀が一口出土した。墳形は室町時代の山城構築のために削られ不明であるが、墳丘墓の範疇に含めてよいと考えられ、供獻土器から弥生時代終末～古墳時代初頭の時期が与えられる。この両遺跡は、墳丘、外部施設、埋葬施設、副葬品の組合せ等が貧弱で、典型的な畿内型古墳とは対照をなす。特に内場山2号墳は多數埋葬という点で弥生時代の葬制の特徴を色濃く残しており、在地的な要素を強くもつ墳墓と言える。

中期になると、盆地北東部に雲部車塚古墳（鰐山町）が築かれる。同墳は、周濠を有し、全

長約140mの丹波最大規模を誇る前方後円墳で、石室内に長持型石棺を納め、甲冑や武器類を副葬していた。同墳の周辺地域には、一辺約30~35mの方墳である北条古墳や鞍塚古墳等大型古墳が点在し、当地域が古墳時代中期の鷹山盆地において極めて重要な位置を占めていたことは明らかであろう。また、鷹山町會地口から日置にかけての鷹山川南岸地域には、宝地山1号墳や鞍塚古墳といった中期の前方後円墳が比較的集中して築造され、さらに盆地の北縁ほぼ中央部には新宮古墳を主墳とする郡家古墳群がある。同墳は、周濠をもつ直径約56mの円墳で、円筒埴輪が出土しており、雲部車塚古墳よりやや後出の中期後半頃の築造と想定されている。

雲部車塚古墳や新宮古墳等、典型的な畿内の要素の強い大型古墳が盆地中心部に存在する一方、盆地北西隅の宮田川流域では、在地的な要素の強い中小規模の上板井古墳群（西紀町）や内場山1号墳（同）が築かれている。前者は尾根上に築かれた2基の円墳からなる。尾根先端の1号墳は、墳丘裾に葺石を施し、割竹形木棺3基と箱式石棺1基の埋葬主体をもつもので、2基の木棺から鉄製工具類が出土した。尾根基部側の2号墳では組合せ式木棺から内行花文鏡や玉類が出土した。被葬者は、いずれも宮田川流域の比較的狭い地域に政治・経済・軍事的な基盤をもつ在地的な首長層であろう。

以上のように、古墳時代中期には、鷹山盆地内で小地域ごとのまとまりがある程度明確になり、盆地内にいくつかの地域集団が存在した可能性が考えられる。しかし、地域ごとあるいは地域相互の変遷等、現時点で明らかにできない問題が多く残されている。

古墳時代後期になると、中期から的小地域的まとまりを継承しつつ、盆地内に数多くの古墳群が展開する。盆地の中心地域には中期に引き続き有力な古墳（群）が立地し、新宮古墳に近接した鷹山町熊谷には大型横穴式石室墳の石くど古墳、同町會地には前方後円墳を含む洞中古墳群や宝地山5号墳等が存在している。宝地山5号墳は七鉢鏡を出土した前方後円墳で、四神四獸鏡や環鉢等を出土したよせわ1号墳（鷹山町）とともに6世紀初頭頃の築造である。

また、丹南町域にあたる盆地北西部の大山川流域は、小丸山1号墳、半鐘塚古墳等、前方後円墳を含む多数の古墳群が分布しており、盆地内で最も後期古墳群の密度が高い地域として注目される。その中で発掘調査が行われた大滝2号墳は、全長約20mの前方後円墳で、埴輪と木棺直葬の埋葬施設をもち、5世紀後半代の築造とされている。

これらに続く6世紀後半~7世紀にかけての古墳群は、数基以内の古墳で構成されるものが多く、岩井山古墳群（鷹山町）のように10基以上に及ぶような例はきわめて少ない。このことは鷹山盆地の特徴としてよく取り上げられてきた。また同時期には、盆地の出入り口にあたる縁辺地域に、金銅製の單鳳式環頭大刀の柄頭を出土した山田2号墳（丹南町）や、刀装具の鈎に銀象嵌文様を施した大刀を出土した庄塚1号墳（同）が確認されている。これらは小型の円墳ながら軍事・交通の要衝に位置し、装饰大刀を副葬している点で本報告の沢の浦2号墳と共通の特徴を持ち、同墳の被葬者の性格を考える上で重要な内容を持つと言える。

沢の浦古墳群が位置する宮田川流域では、西岸にいくつかの後期古墳群が点在している。中でも因川支流の小坂川が形成する最大幅約0.4km、奥行き約1.3kmの小さな谷の中は、古墳群が比較的集中する地域である。谷の入口にあたる地点は沢の浦古墳群が占め、その奥に箱塚古墳群、東山古墳、四王寺谷古墳群、小坂古墳群等が分布する。これらの多くは小型の横穴式石室をもつ円墳が2~3基集まつたものであるが、箱塚古墳群は5基の円墳からなり、うち3~5号墳が発掘調査された。4号墳は直径約20mで2重の埴輪列をもち、両袖型横穴式石室から装飾付脚付子持壺や多量の玉類等が出土した。同墳はこの谷中では最も有力な古墳と言える。

以上、古墳群については盆地内の分布状況がある程度明確になりつつあるが、一方同時期の集落遺跡では、上述の前期の遺跡の他に、内場山城跡で丘陵上から6世紀末~7世紀初頭の方形堅穴住居跡3棟、また出谷遺跡（丹南町）で7世紀前半の掘立柱建物跡が確認された。これは当地域における堅穴住居跡から掘立柱建物跡への変遷の時期を示すものとして注目される。

奈良・平安時代の遺跡としては、これまで東浜谷遺跡（雲山町）、寺内庵寺（同）、王地瓦窯（同）、龍円寺遺跡（丹南町）等が知られていた。東浜谷遺跡からは「郡」の刻印や「町」の墨書きをもつ須恵器が出土し、付近にある「郡家」の地名と併せて多紀郡衙との関連が注目されている。同遺跡の近辺には復元八葉蓮華文軒丸瓦を出土する寺内庵寺もあり、この一帯は古墳時代中期から奈良・平安時代に至るまで、難山盆地の中核的な役割を果たした地域と言える。

その他、龍円寺遺跡は延喜式記載の山陰道「長柄駅」に比定説がある丹南町野中の地に所在する。同遺跡は、近年の計4次にわたる発掘調査で、掘立柱建物跡群や溝、瓦窯跡等が検出され、復元八葉蓮華文軒丸瓦、重圓文軒丸瓦等が出土し、奈良時代中期~平安時代末まで存続した遺跡と考えられている。また同遺跡の東方約1.2kmにある王地瓦窯跡は、龍円寺遺跡と同系統の瓦を出土し、同遺跡に瓦を供給した生産地とされている。

盆地北西部では、最近、西木之部遺跡や板井・寺ヶ谷遺跡で、奈良時代末~鎌倉時代に至る掘立柱建物跡群が検出され、多量の縄文陶器や墨書き器、鉢、円面鏡等が出土した。両遺跡は、平安時代中期には成立したとされる近衛家領宮田荘の荘域内にあたり、同荘に先行あるいは重複する時期の有力な集落と言える。なお、両遺跡の周辺では、上板井経塚と中世墓群や内場山城跡等の中世遺跡が調査されている。

また、宮田荘に隣接する東寺領大山荘の荘域内にあたる丹南町大山地区でも多くの古代~中世にかけての遺跡が発掘調査されている。その中で、石住・高倉窯跡群の調査は、難山盆地における8世紀後半~9世紀初頭の須恵器生産の一端を明らかにした。

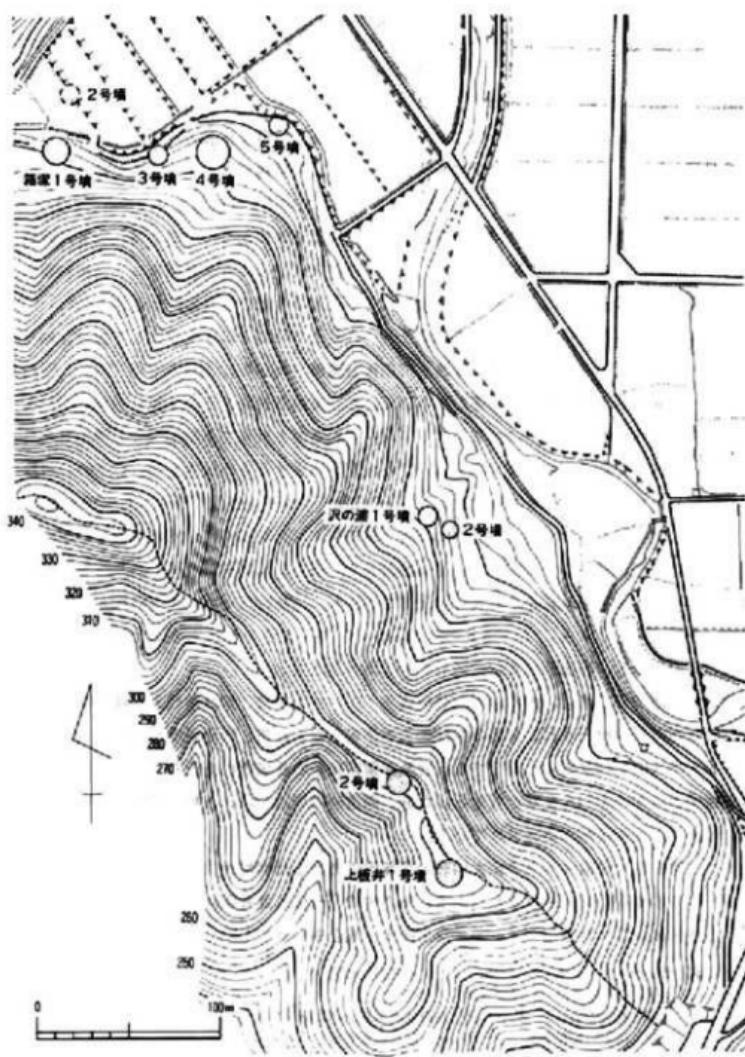
(参考文献) 横本誠一他「日本の古代遺跡」2 兵庫北部 1982

兵庫県教育委員会「庄境2号墳」 1983

兵庫県教育委員会「兵庫県埋蔵文化財調査年報」昭和56~59年度 1983~1987

西紀・丹南町教育委員会「丹波國大山荘現況調査報告書」1~Ⅲ 1985~1987

兵庫県教育委員会「上板井古墳群」 1986



第2図 造跡周辺地形図

第3章 調査の記録

第1節 古墳群の立地と原状

沢の浦古墳群は、雅山盆地の北縁に横たわる多紀連山の1つ、黒頭峰（標高約620.6m）から南東に派生してきた尾根の北東麓に立地する。

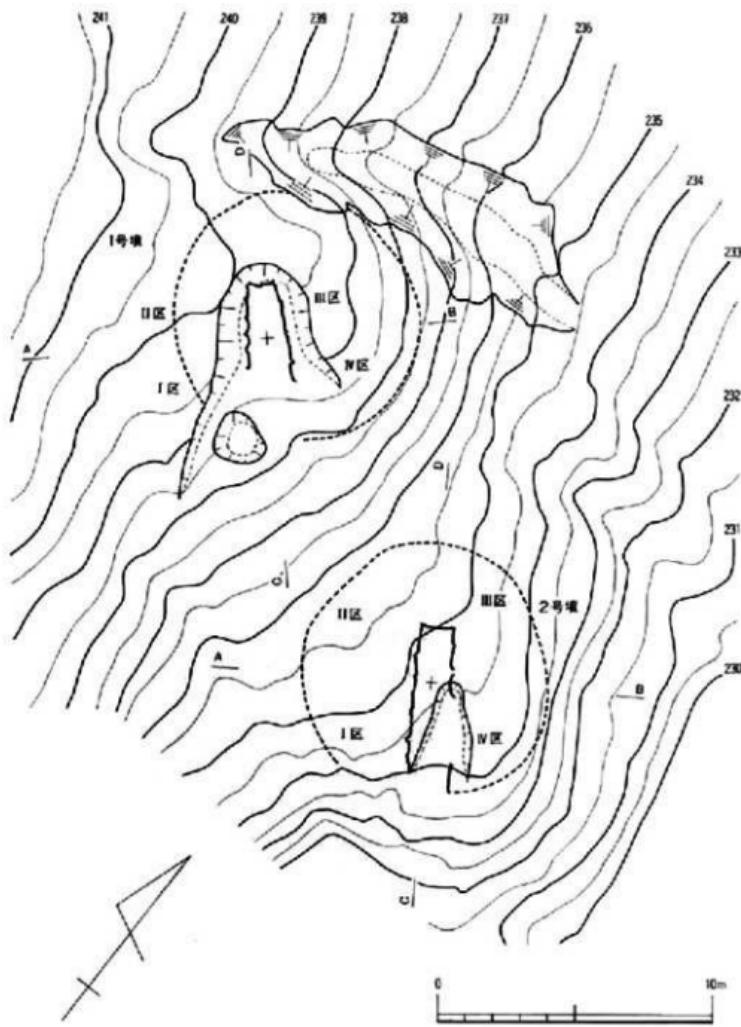
古墳群が築かれている地形を詳細に観察してみると、尾根は北西方面からゆるやかにのびてきて、末端部に至ると急傾斜で下降し、小さな峠を挟んで独立小丘陵と対峙している。さらに尾根からは、幾本もの支尾根が北東方向に派生しているが、古墳群はそのうち1本の支尾根上の緩傾斜面に築造されている。古墳群が立地する基盤層は、黄褐色あるいは赤褐色を呈する岩盤及びそのバイラン土である。

古墳群は2基の円墳からなる。1基は支尾根上のはば中央部にあり、他の1基はそこから南東に若干低くなった支尾根斜面にあって、互いに墳丘裾を接するような状態で構築されている。古墳番号は、高所にあるものから1号墳、2号墳とした。墳丘基底面における標高は、1号墳が約237m、2号墳が約233m、尾根標の水田面との比高差はそれぞれ約18m、約14mを測る。

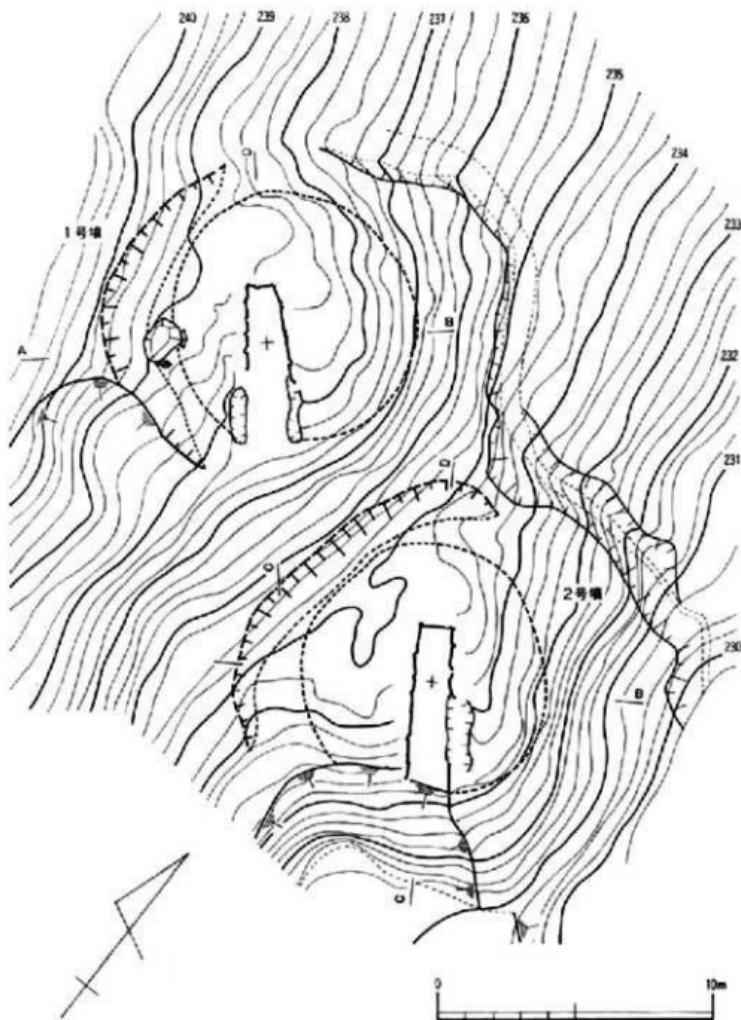
本古墳群が立地する尾根の裾には、佐仲峠に源を発した小坂川が流れ、独立小丘陵の反対側で鼓峠・栗柄峠からの宮田川と合流する。本古墳群からは、北東方向に宮田川に沿って栗柄峠へ向かう道が望め、目を北西に転ずると、小坂川沿いに箱塚古墳群の裾を越えて佐仲峠へ至る谷筋の道が見える。しかし南の小坂川下流方向は、独立小丘陵に視野を遮られている。したがって、本古墳群から眺望できる平野部は、現小坂の集落から現上板井の集落までの、扇形を呈する比較的限られた小範囲である。このことは、後述する本古墳群の被葬者達の有していた政治、経済、軍事的な存立基盤と強く関連すると考えられる。

本古墳群が立地する小尾根上は、発掘調査前には雜木が生い繁った状態であった。雜木を伐採したところ、原状では1・2号墳とも地山整形による周溝部分がほぼ埋没し、墳丘の上方斜面側がほとんど平坦になってしまっていた。墳丘の高まりはほとんど認めることができず、特に墳丘裾部の確認は、発掘調査を行うまでは困難な状態であった。しかし、いずれの古墳も墳丘中央部が大きく陥没しており、横穴式石室の天井石が抜き去られた痕跡であると、からうじて判断できた。

2号墳の石室入口からすぐ南側は、畠地あるいは宅地造成のため、東西約5m、南北約8mの範囲に大きく削平を受けていた。また、その平坦地から2号墳の東側墳丘裾部を通り、1号墳の北側へ上がる小道が、斜面を開削して設けられていた。



第3図 古墳群地形測量図（調査前）



第4図 古墳群地形測量図（調査後）

第2節 調査の概要

次の捕古墳群は、原状では墳丘の高まりがほとんど認められなかつたが、墳丘中央部が大きく陥没していたため、横穴式石室の主軸方向をほぼ推測できた。そこで、発掘調査前の地形測量を行つた後、石室の主軸方向を基準にして墳丘をI～IV区に分け、表土の除去から作業を開始した。

表土は、1・2号墳とも平均約30cmの厚さであった。表土を除去した段階で、地山整形による溝、墳丘盛土、外護列石及び横穴式石室を確認した。

溝は、三日月形を呈し比較的浅いものであったが、石室材抜き取り時に出た土砂ではほとんど埋没しており、溝底面では現表土から深さ約1mに達した。また墳丘盛土の残存状態も良好ではなく、かなりの盛土が流失したと考えられた。

横穴式石室は、天井石がまったく存在しておらず、特に1号墳では石室前半部の石材がすべて抜き取られているなど、遺存状態が極めて劣悪であった。しかし、石室内床面の遺物は比較的良好な遺存状態を示していた。

石室の前庭部は、2号墳では後世の削平によって存在せず、1号墳でも墓道等の施設を何も認めることができなかつた。また墓前祭祀等の痕跡も見当たらなかつた。

石室内の調査を終了した後、墳丘盛土を除去し、墳丘基底面から切り込んだ石室掘り方を検出した。また石室内基底面においても基底石の掘り方を確認した。石室壁材と掘り方との間隔は狭く、また2号墳においては後述するように高速道路の設計変更によって石室を保存したため掘り方を完掘できなかつた。

1号墳と2号墳は互いに墳丘裾を接するように築かれていたが、地山整形溝及び墳丘盛土には重複関係を認めることができなかつた。また墳丘裾を接する1号墳IV区と2号墳のII・III区の土層堆積状況を観察した結果からも2基の古墳の先後関係は判断できなかつた。

遺物は、石室内に多数存在した他、墳丘表土からも出土した。それらのうち、2号墳のII区・III区の地山整形溝内から出土した若干の遺物が、1号墳由來のものか2号墳からのものかは断定困難であった。なお、2号墳の地山整形溝内で数10cm大の石材をかなり検出したが、これらの石材は1号墳側から流入したものと認めることができ、1号墳の石室が破壊された際に転落・流入したものと考えることができた。

また、1・2号両墳の石室内搅乱坑及び表土中からは、中世における石室再利用時のものと考えられる遺物が散乱状態で出土した。しかし遺構は検出できず、さらに時代の後の石室材抜き取り時に搅乱され、完全に破壊されたと考えられた。

第3節 1号墳の調査

1. 墳丘

地山整形（第5図）

本墳は、小尾根後線上の緩斜面に築かれている。そのため、古墳築造に伴う地山整形としては、墳丘の上方斜面側に三日月形の溝を掘削し、さらに溝の内側をほぼ平坦にして墳丘基底面を整える作業を行っている。

溝は三日月形を呈しており、標高約239.9mの尾根後線部分を最上端として尾根筋に直交して掘られていた。溝の範囲は外端で約11m、幅は稜線部分で最も広く約2.7m、深さは両部分の外側で約0.7m、内側で約0.1mを測る。溝の断面形は浅い皿状をなすが、中央部分から南北両側へ向かうにしたがって徐々に浅くなりやがて消失する。溝底面の高さもそれに伴って低くなり、最も高い稜線部分と最も低い両側部分では約1.2mの差をもつ。

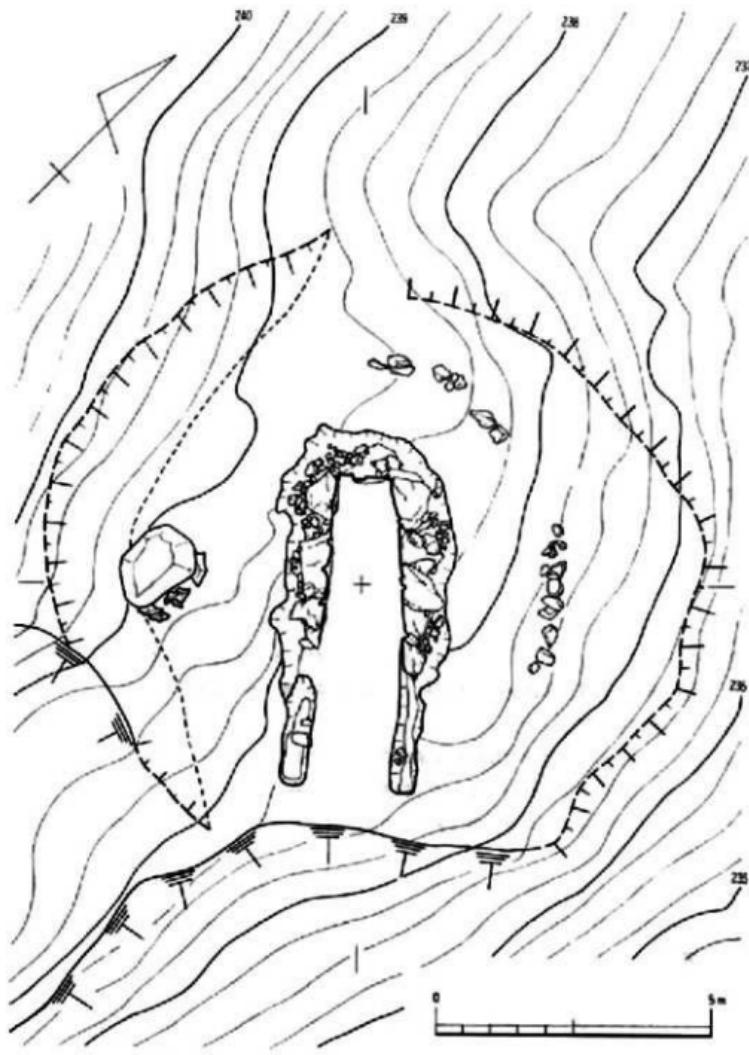
地山整形溝の内側は、ほぼ平坦なテラス状に整地され、墳丘基底面となっていた。テラスの規模は、南北約11m、東西約4.5mで、そのほぼ中央に石室掘り方を掘削していた。溝底面と石室掘り方上端との高さの差はあまり見られない。

墳丘基底面は、石室西側の斜面上方では地山整形によって基盤層まで掘削が及んでおり、石室掘り方は岩盤上から切り込まれていた。しかし、石室東側の斜面下方では墳丘盛土の下層に黒褐色を呈する厚さ約20cmの古墳築造前の旧表土が確認できた。石室掘り方は旧表土上面から直接掘られており、盛土による墳丘基底面の整地は行われていない。古墳築造前に地山整形を行った段階では、墳丘基底面は斜面に沿って西から東へ緩やかに傾斜していたと考えられる。

墳丘（第6図）

墳丘は、地山整形溝の内側の整地面を基底にして盛土を行っている。しかし、盛土の流失が著しく、遺存状態が極めて悪い。盛土は、斜面上方では溝の内側壁面に沿うように行われているが、部分的には盛土裾部が溝底面にあるところも見られる。斜面下方では、基底面の東側上端を裾部としている。

墳丘の平面形は、墳丘基底面の広さ及び盛土の範囲から推測すると、南北約9.1m、東西約8.9mの略椭円形となり、直径約9mの円墳と復原できる。両側の墳丘裾部は石室入口部分と一致する。墳丘の高さは、最も良好に残存している奥壁側で、盛土高約0.7m、石室基底面から約1.4m、墳丘裾部の最下端から約2.4mを測る。墳丘の元来の高さは、石室天井石がまったく遺存していない状況から察して、現状よりもかなり高かったと推測できる。また墳丘の東側下方斜面が急傾斜となっているため、墳丘の見かけの高さもかなりあったと考えられる。



第5図 1号墳地山整形及び石室置り方調査図

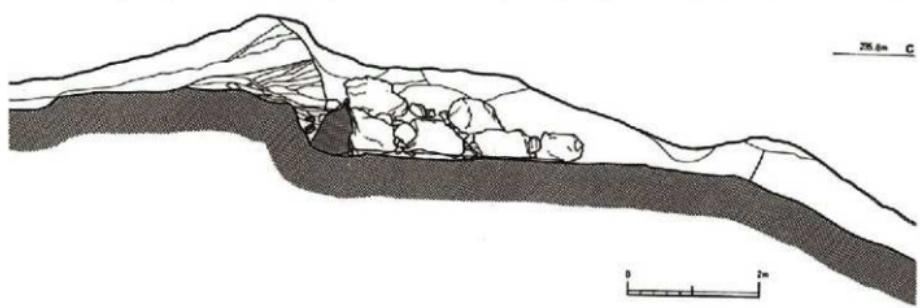
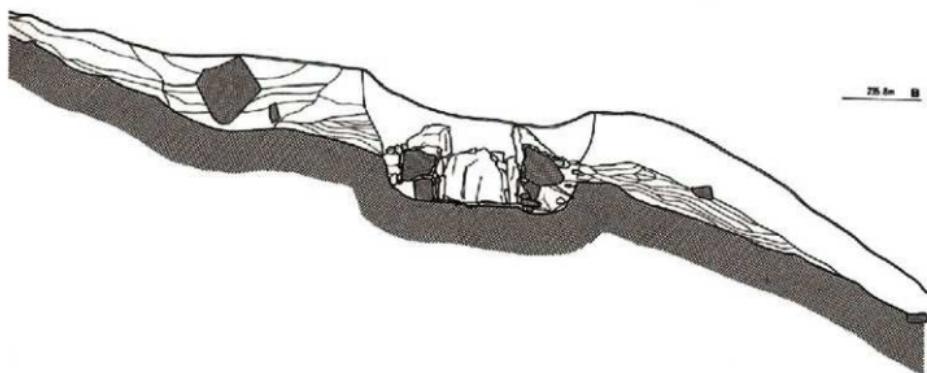


图6② 1号坑壁立面图

盛土は、基本的に黄褐色土と黒褐色土を幾層にも互層にして積み上げている。各層は、土層断面で観察すると厚さ約10cm、長さ約1.0~1.8mの土層を単位とし、それぞれ黄褐色土は古墳の基盤層、黒褐色土は旧表土に由来すると考えられるが、明確な互層の意識は認めがたい。

外護列石（第5図）

外護列石は、墳丘の東及び北側で確認した。列石は1条で、現存長約5.5mを測るが、遺存状態は悪く部分的にしか残っていない。墳丘東側では、石室左側壁面から約2.5m離れて石室とはほぼ平行に人頭大の石を十数個並べているが、石の外面をそろえる意識は認められない。

列石は、墳形に沿った橢円形の縱半分の形をなしており、元来石室入口から続いていたものと推測できる。また列石は、石室壁材の2段目とはほぼ同じ高さにあって、墳丘基底面の直上ではなく、盛土を約0.4m積み上げた段階で据えられている。

2. 横穴式石室

石室（第8図）

本墳の埋葬施設は、南東に開口する無袖型横穴式石室で、主軸をN-45°-Wにとる。天井部はすでに失われており、地山整形構の底面に残存する一辺約1mの大型の石材が天井石の残欠と推定できた。石室の周囲には、石室破壊時に出た土砂が高く積もり、石室内は陥没して壁上面部の崩壊による転石や流土によって埋没していた。

石室前半部は、著しく削平を受けており、左右の側壁とも腰石が完全に抜き去られ、石室基底面が完全に露出するまで破壊されつくしていた。ただ、石室基底面には腰石の擺り方あるいは抜き取り穴が確認でき、腰石の支え石が4個、原位置を保つ状態で遺存していた。一方、石室後半部は側壁上部が崩壊していたのみで、下部は比較的の良好に残っていた。

また、石室前方は2号墳の西側墳丘裾部に向かって急に傾斜しており、前庭部あるいは墓道等の施設は確認できなかった。

石室の規模は、現存部分で奥壁幅約1.0m、石室最大幅約1.5m、右側壁長約3.1m、左側壁長約3.6mを測る。石室の全長は、石室前半部に残存する腰石掘り方から判断すると約5.7mであったと推定できる。石室の高さは、最も良好に残っている左側壁で約1.2mを測る。本来の高さは奥壁と側壁の上部が崩壊しているため不明であるが、石室全体の規模からみて、現状とさほど変わらない高さで天井石を架構したと考えられる。石室の平面形は、石室入口に向かって若干開いた台形状をなしており、左右の側壁線はほぼ直線をなす。

壁体は、奥壁に縦約0.9m、横約1.2mの大ぶりの石を1石立て、側壁には割石を横長に置いて腰石としている。右側壁には5石、左側壁には4石の腰石が遺存していた。腰石の高さは約0.3~0.5mで、その上面が水平方向に目路が通るように並べている。腰石の上部には、右側壁

で3段目、左側壁で2段目の石までが残っている。腰石及び奥壁は垂直に立てられているが、その上部の石からは持ち送りにされて若干内傾する。

奥壁と両側壁の接合は、左右の腰石が奥壁を挟み込むようにしており、下部ではその間際に10cm大の石をかませている。腰石から上部は奥壁を挟み込むことをしておらず、かなり粗雑な構築方法であるが、奥壁と両側壁との隅石が残存していないため接合方法は不明確である。

床面は、石室基底面の上部に、整一な土質の赤褐色土で厚さ約5cmの貼床をしているが、石室前半部では貼床すら残存していない。

なお、石室を構成する石材は、大部分が本古墳群の周辺に産するチャート質の岩石である。

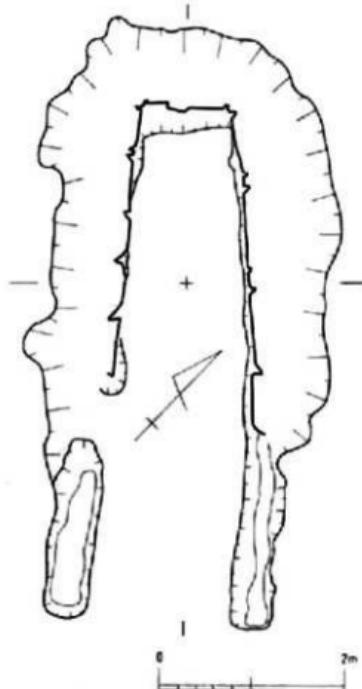
石室掘り方(第5図)

石室の掘り方は、テラス状に整地された面のはば中央にあって、平面形は幅約3m、長さ約5.5mの隅丸長方形をなす。掘り方は、斜面上方側では岩盤上面、斜面下方側では旧表土上面から掘り込んでいる。壁面は極めて急角度で切り込み、深さは最も深い奥壁部で約0.8mを測るが、墳丘基底面の傾斜に沿って次第に浅くなり、石室入口付近で上端と下端が一致する。

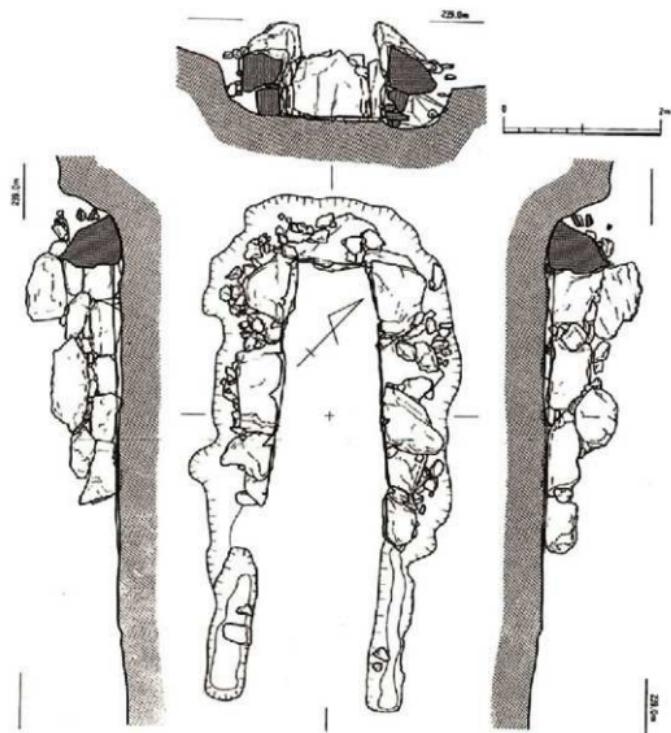
掘り方底面はほぼ平坦であるが、壁面沿いを一部さらに掘り込み、その底面に10~20cm大の石を置いて腰石の安定を図っている。腰石は、掘り方の外側壁面ぎりぎりに据えられており、腰石外面と掘り方壁面との間隙は非常に狭いものである。掘り方内には壁石の裏込めとして10~20cm大の石が詰められ、黄褐色を呈する土とともに固く叩き締められていた。

3. 出土遺物

出土状況(第9図)



第7図 1号墳石室基底面実測図



第6图 1号墓室复原图

1号墳の遺物は、石室内及びN区埴丘墓表土中から出土した。石室内は、前半部が完全に破壊されて残存しておらず、後半部も上部がかなり搅乱を受けていたが、後半部の床面では比較的良好な遺物遺存状況を示していた。

石室後半部の遺物は、床面上にあるものと床面から2~3cm上層にあるものがあり、後者は追葬時の遺物であると考えられたが、追葬面は確認できなかった。

石室内では、右側壁沿いの最も入口に近い部分で、土器群の集積を認めた(1~12)。これらは須恵器杯蓋・杯身・短頸壺の他、土師器壺を含んでおり、そのうち3は、他の土器から若干離れた位置にあったため疑問が残るが、3を除く土器は追葬時における副葬品の集積とみなすことができる。

また奥壁と左側壁が交わる隅から13と14、右側壁の隅から15と16がそれぞれ重ね合わせた状態で出土した。特に前者は、須恵器杯蓋と杯身のセットが床面にはほとんど接して出土し、原位置を保っている可能性が極めて高いと考えられる。石室内からは、この他に須恵器杯身17と短頸壺18が右側壁近くの床面から若干浮いた状態で出土した。

1号墳の石室は、後述するように中世における石室再利用時と、石室材抜き取り時の少なくとも2回にわたり搅乱を受けている。このためかなり上部の搅乱土層中から中世遺物に混じって若干の古墳時代の遺物が出土した。19~23がそれである。

杯身22や壺23はN区埴丘墓表土中からの出土であるが、1号墳のN区と2号墳のII・III区の境界が不明瞭であるため、どちらの古墳に帰属するかは若干の疑問を残す。

石室内からは上記の土器の他、奥壁近くの左側壁寄りから鉄鎌6本(1・3・4・6~8)、また石室残存部の中央付近から鉄刀子4本(11~14)が比較的まとまって出土した。前者は、須恵器15・16の上層にあり、後者は床面にはほとんど接していた。その他の鉄器類は、石室内各所からの散発的な出土である。

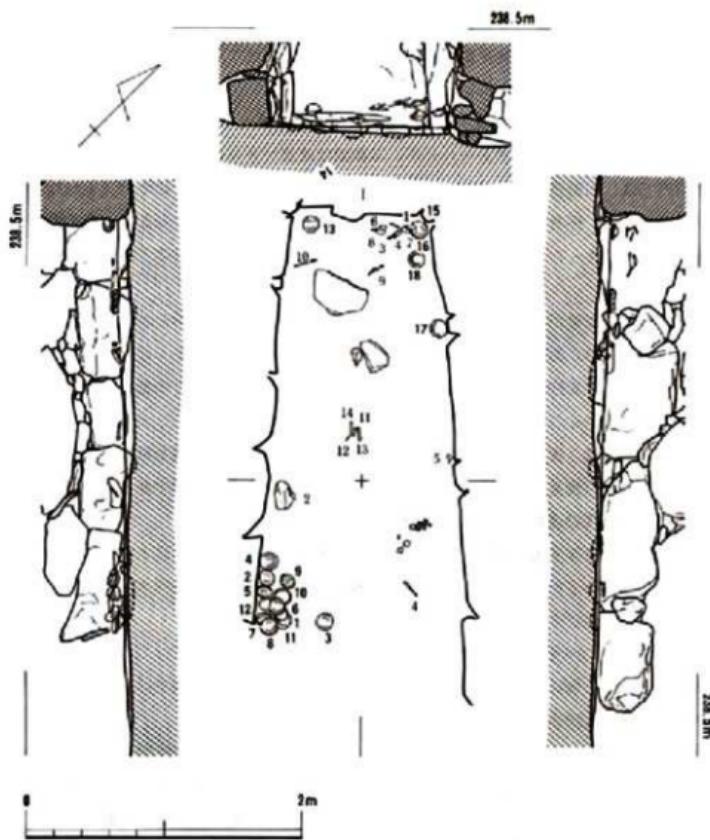
石室の奥壁から約0.6mと1m離れた地点で、平坦な石材を2個検出した。これらの石は底面を床面に接しており、またその上面が比較的の平坦で整一なため、棺台として使用されたものの一端が残存している可能性が強いと考えられる。しかし棺台石としては数が少ないため、棺の方向等は不明確である。

須恵器(第10・11図1~23)

ここでは、須恵器各器種の概要を述べるが、特に杯身・杯蓋については、第4章まとめの分類基準にしたがって説明する。なお、各個体の法量、特徴については別表に記した。

杯身(第10・11図4~8・14~17・20~22)

杯身は、石室内から9点と表土層中から3点、計12点が出土している。これらは、口径は小さく、内傾度の大きい短いたちあがりをもつもので、すべてⅢ類に属する。底部に回転ヘラ削りを施すⅢ-a類には4・15の2点が該当し、残りは回転ヘラ削りを行わないⅢ-b類である。



第9図 1号墳遺物出土状況実測図

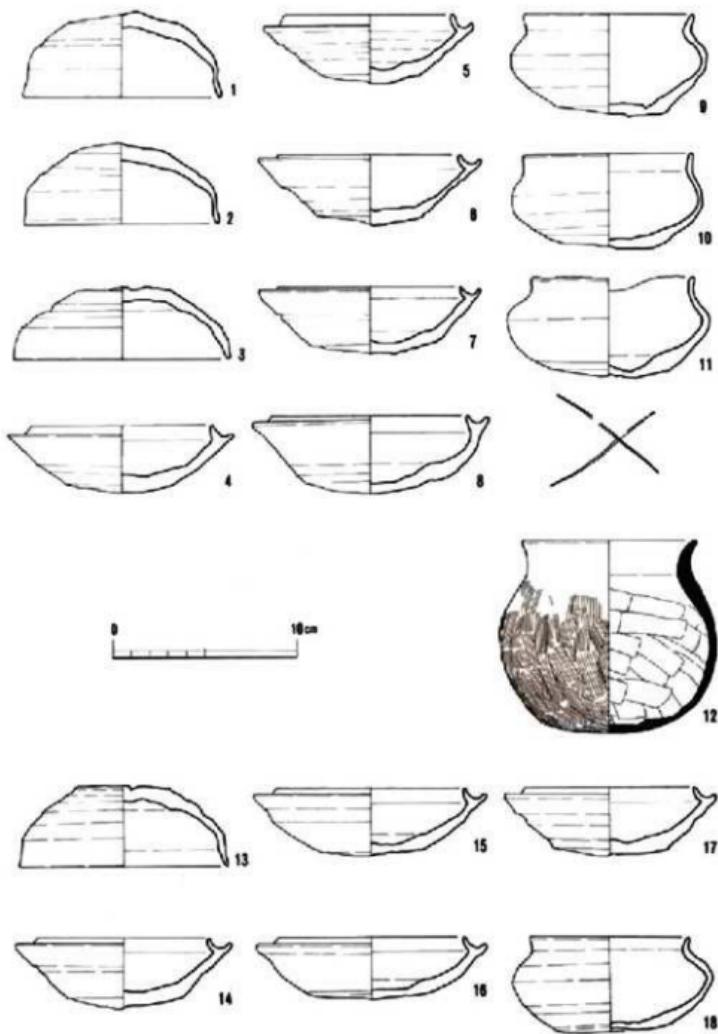
(番号のゴチャック体は土器、明朝体は鉄器)

杯蓋（第10・11図1～3・13・19）

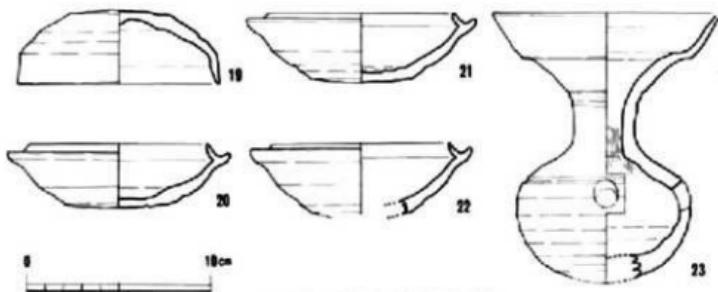
杯蓋は、口径が小さく、天井部と口縁部との境界が不明瞭なもので、すべて口頸に属する。天井部に回転ヘラ削りを施すIII-a類には2が該当する。回転ヘラ削りを施さないIII-b類はIII-a類に比して器高が高く、1・3・13・19の4点が該当する。

甌（第11図23）

球形の体部からやや直立ぎみに立ち上がる口頸部は、2条の沈線を施した屈曲点から大きく外反する。口縁部は斜め上方にラッパ状に開く。体部の肩部に1条の沈線を有し、中央の円孔



第10图 1号墓出土遗物实测图(1)



第11図 1号墳出土遺物実測図(2)

は梢円形に近い。

短頸壺 (第10図9～11・18)

短頸壺は体部中央に最大径をもち、わずかにくびれる頸部から外傾する口縁部をもつ。口縁部は丸く、底部は平坦で、ヘラ切り亂しの後ナデ調整を行う。11は、底部に十字状のヘラ記号と重ね焼きの痕跡がある。4点出土している。

土 筋 器 (第10図12)

12は、わずかに平坦な底部と丸味の強い体部をもつ壺である。頸部は肥厚し、口縁部は近く外反して端部を細くおさめる。体部外面はハケメ、内面は下から上へのヘラ削り調整を施す。

鉄 庫 器

鉄錐 (第12図1～11)

鉄錐は、石室内から11点が出土した。すべて有茎錐である。頸部の長さから、短頸錐と長頸錐に大別でき、錐身部の形態から短頸錐I～V類8点、長頸錐VI・VII類3点、合計7類に細別できる。鉄錐の計測値は、別表に示した。

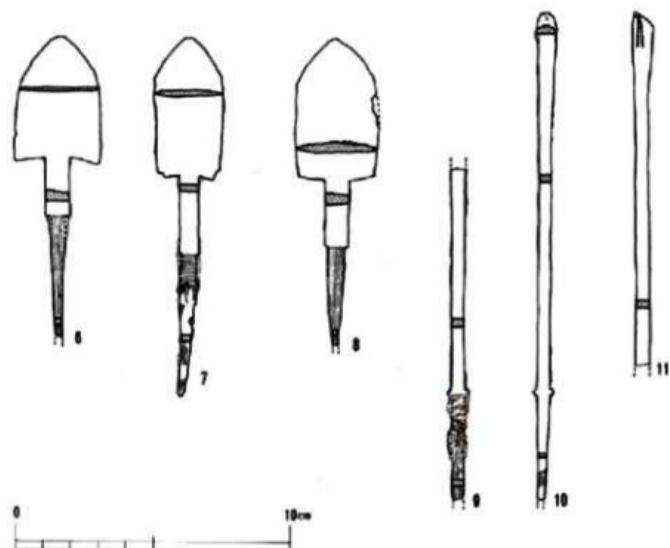
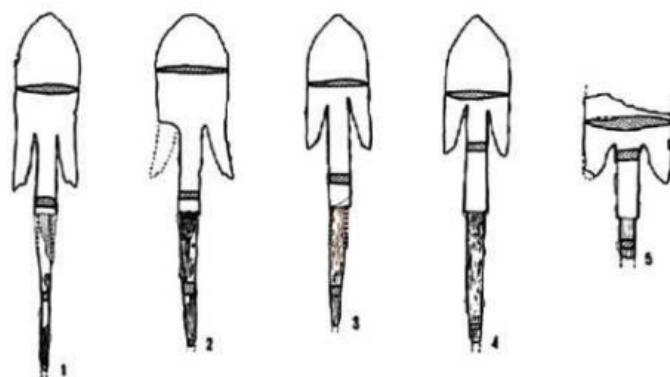
I類(1・2) 錐身部が大形で柳葉状をなし、逆刺は深く、重抉のものである。笠波をもつ。1は、錐身部断面がレンズ状をなす両丸造りである。2は、片方の逆刺を失い、錐化が著しい。錐身部断面が長方形に近く、平造りと思われる。

II類(3～5) 錐身部が柳葉状をなし、1類よりも逆刺の浅いものである。3点とも笠波をもち、両丸造りである。3・4はやや小形で、5は錐身部の約2分の1を欠損するが、3・4よりも大形である。

III類(6) 錐身部が長三角形をなし、浅い逆刺をもつ。笠波をもち、錐身部断面の厚さがほぼ均等で、平造りである。

IV類(8) 錐身部が長三角形をなし、純角の逆刺をもつ。笠波をもち、両丸造りである。

V類(7) 錐身部が長三角形をなす。逆刺は一見重抉のようであるが、内側の逆刺が浅く



第12图 1号填出土物实测图(3)

おさまり、逆刺に段をつくる。^(注)

V類(10) 錐身部が錐頭状をなし、冠被との境目が見られないものである。頭部に棘状突起をもつ錐冠被を有し、錐身部断面はカマボコ型の片丸造りである。

VI類(11) 錐身部は先端部に刃の付く片刃鋼のものである。頭部が途中で欠損している。この他、9は錐身部を欠損するが、錐冠被をもち長頭錐に属するものである。

以上の鉄器のうち、1~10までは基部に木質痕が認められるため、矢柄を装着して埋納されたと考えられる。また、7・9には木質痕に加えて糸巻痕が見られ、矢柄を装着する際に糸を巻いて固定したと推定できる資料である。

刀子(第13図12~17)

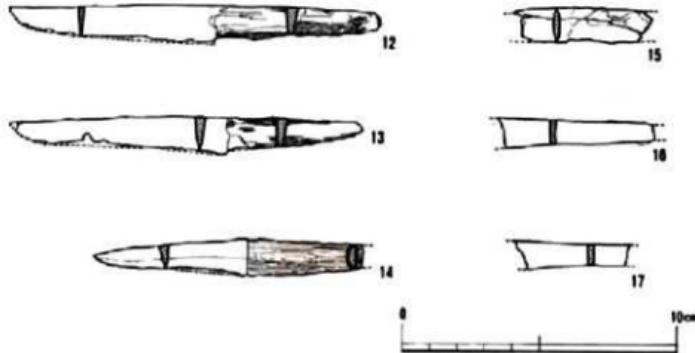
全部で6点出土しているが、全形を知ることのできるのは3点である。その中で片開造り(1類)と両開造り(II類)の2種類に分類することができる。各々の計測値は別表に掲げた。

I類(12・13) 12は刃部先端がわずかに反る。13は刃部先端をわずかに欠損する。断面形は12・13の刃部、基部とも長三角形状をなし、刃部長もほぼ同じで、似通った形態をなす。基部には木質痕が残存している。

II類(14) 刀部は、鞘による膨張のためか1類に比べ重厚である。基部には木質痕が残り、基部断面は長方形をなす。

以上のお他、15は刃部の残片と思われるものであるが、銹化のため薄く非常に脆弱になっている。16・17は、基部の残片と思われるもので、断面が長方形の似た形態をなすものである。

(注)V類の錐身部の逆刺は、特異な形態であり、県内では「庄塙2号墳」からの出土が知られる。『近畿自動車道関係埋蔵文化財調査報告(I) 庄塙2号墳』兵庫県教育委員会 1983.3



第13図 1号墳出土遺物実測図(4)

第4節 2号墳の調査

1. 墳丘

地山整形（第14図）

本墳は、1号墳から南東方向に約14m下方の尾根斜面に築かれている。古墳築造に伴う地山整形は、1号墳と同様、斜面上方側に三日月形の溝を掘削し、その内側をテラス状に整地する作業を行っている。テラスの規模は、南北約12m、東西約4.5mで、そのほぼ中央に石室掘り方を掘る。溝底面と石室掘り方上端との高さの差はあまり見られない。

溝は、三日月形を呈するもので、標高約235.8mの部分を最上端として等高線に沿って掘られていた。溝は、中央部分で最も幅が広く約3.5mを測り、深さは外側で約0.6m、内側で約0.2mである。また、両部分で溝の断面形が浅い皿状をなし、そこから南北両側へ向かうにしたがって徐々に浅くなることや、溝底面の高さがそれに伴って低くなることも、1号墳と同様である。溝底面の最も高所と最も低所の比高差は、約1.5mを測る。

墳丘基底面の地山整形は、石室西側の斜面上方ではおおむね基盤層まで掘削が及んでいたが、石室寄りの部分には古墳築造前の旧表土が残っていた。旧表土は、石室東側の斜面下方でも残存しており、厚さ約30cmを測る。斜面下方では、旧表土下は、明茶褐色のバイラン土が約30cm続いている。その下層は岩盤となる。石室掘り方は、岩盤あるいは旧表土上面から直接掘り込まれ、積土による墳丘基底面の整地は行われていない。

墳丘（第15図）

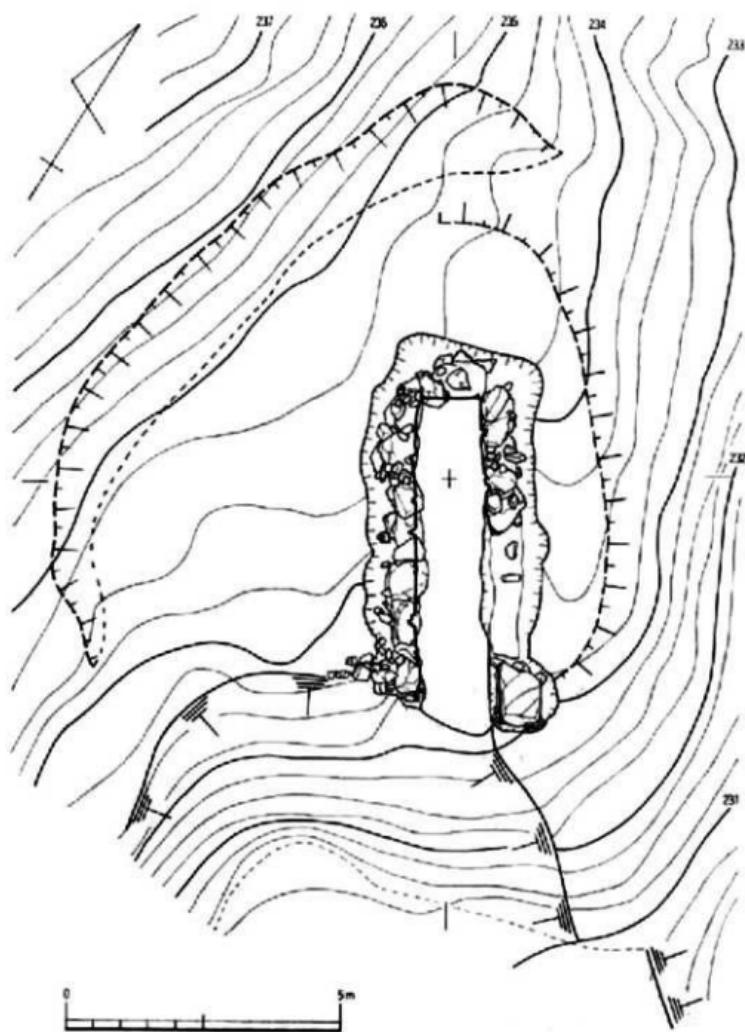
墳丘は、地山整形溝の内側の整地面を基底にして盛土を行っているが、盛土の大部分は流失してしまっていた。盛土が最も良好に残っていたのは奥壁北側で、高さ約0.5m、石室基底面から約1.4m、墳丘盛土端の最下端から約1.5mを測る。

盛土は、1号墳同様、基本的には溝の内側壁面に沿うように盛られており、部分的には盛土の裾部が溝底面にあるところも見られた。また斜面下方では、基底面の東側上端を盛土裾部としている。

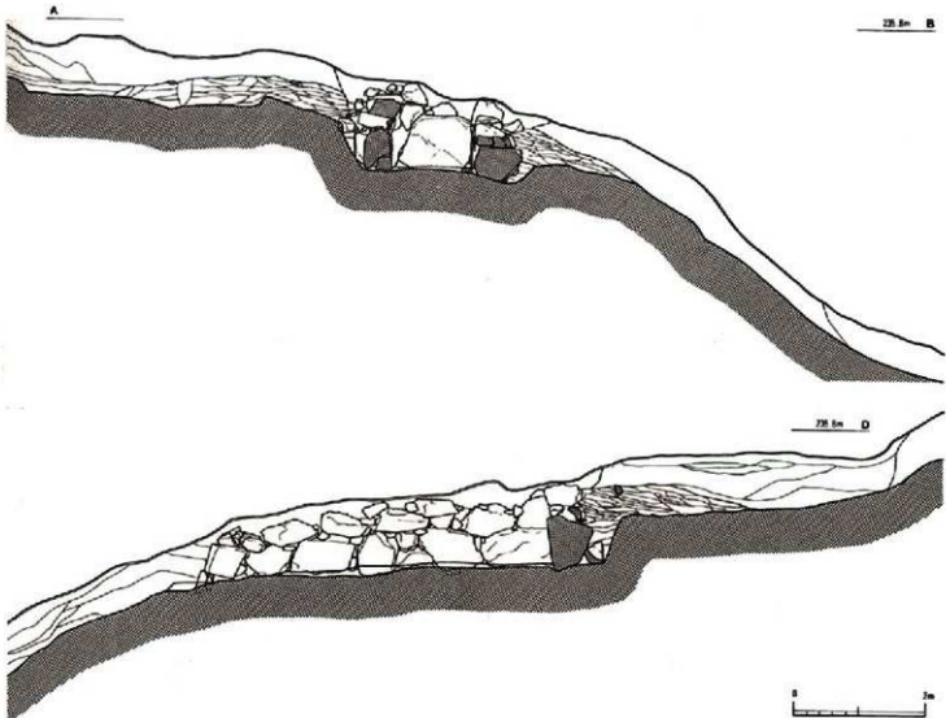
このように、墳丘の遺存状態は極めて悪かったが、墳丘の東側はかなり急斜面で下降しており、現状でも見かけの墳丘の高さがかなり認められることから、築造当初の墳丘高はかなりあったと考えられる。

墳丘の平面形は、墳丘基底面及び盛土の範囲から推測して、南北約9m、東西約9mの略不整橢円形となり、ほぼ、直径約9mの円墳である。南側の墳丘裾部は石室入口部分と一致する。

また、盛土が黄褐色土と黒褐色土の互層であり、前者が基盤層、後者が旧表土由来のもので



第14図 2号墳地山地形及び石室掘り方実測図



第15图 2号坟堆丘剖面图

あることも1号墳と同じである。ただ各層は、土層断面の観察の結果では厚さ約5~10cm、長さ約30~60cmの土層を単位としており、1号墳よりも細かい土層単位である。

外 譲 列 石 (第14図)

本墳の外謄列石は、石室入口から西に向けて1列4石のみ遺存していた。墳丘盛土中に投入された石との判別が困難であったが、この4石のみ列状をなしていたため、列石の残存と認めることができた。1石の大きさは10~20cm大で、各石材の外面は掘っていない。

墳丘のその他の部分については、列状をなす石が残っておらず不明である。しかし、1号墳と同様、元来墳丘の斜面下方側にも列石を運らせていたもの大部分が墳丘とともに流失したと推察できる。

2. 横 穴 式 石 室

石 室 (第17図)

本墳の埋葬施設は、南東に開口する無袖型横穴式石室で、主軸をN-34°-Wにとる。天井石はすでに失われており、石室内は陥没して壁面上部の崩壊による転石や流入石によって埋没していた。右側壁は、上部の櫛材が崩壊していたのみで長側辺はほぼ完存していたが、左側壁は、中央部の櫛材を抜き取られ、その後取り穴に小さく破碎された石材が埋め込まれていた。

また、石室入口からすぐ前方は、後世の畠地あるいは宅地の造成によって大きく削平を受けしており、前庭部・墓道等の施設の存在は確認できなかった。しかし石室最南端の腰石は、左右両側壁とも前面が奥壁側に傾斜する整一な面をしており、これが石室入口を意識したものであり、石室の側辺が完存していることを容易に推測させた。

石室の規模は、奥壁幅約1.1m、入口部分で最大幅約1.6mを測り、右側壁長約5.5m、左側壁長約5.9m、石室全長平均5.7mと、1号墳とはほぼ同規模である。石室の高さは、右側壁では約0.8~1.0m、左側壁では約0.6~1.0m遺存しており、最も良好な石室後半部の右側壁で約1.3mを測る。石室の本来の高さは壁面の上部が崩壊しているため不明であるが、石室全体の規模からみて、現状とさほど変わらない高さで天井石を架構したと考えられる。石室の平面形は、左右の側壁線がほぼ直線をなしており、入口に向かって若干開いた台形状をとる。

壁体は、1号墳と同様、奥壁に1石の大ぶりの石を立て、側壁には割石を横長に置いて腰石としている。腰石の上部は、2段目の石材までが残っていた。奥壁は、縦約0.8m、横約1.2mのほぼ長方形の石材を若干内傾ぎみに置いており、腰石は右側壁に7石、左側壁に後半部の3石と入口部の1石が遺存していた。腰石の高さは約0.5~0.6mで、その上面が水平方向に目路が通るように並べている。腰石は垂直に立てられているが、2段目の石は持ち送りにされて若干内傾している。

奥壁と両側壁の接合方法は、両側壁が奥壁を挟み込むようにしておあり、左側壁側の下部隅には10cm大の石が詰め込まれていた。また右側壁側の上部隅には、奥壁と右側壁の両方に重なる隅石が見られた。

床面は、石室基底面の上部に、整一な土質の赤褐色土で厚さ約10cmの貼床をしているが、石室前半部では後世の擾乱を受けて残存していなかった。なお、石室を構成する石材は、1号墳と同じく大部分がチャート質の岩石である。

石室掘り方(第14図)

石室の掘り方は、1号墳と同様、テラス状に整地された面のはば中央にあって、平面形は、幅約3m、長さ約6.5mの隅丸長方形をなす。掘り方は、奥壁部分では岩盤上面から、また側壁部分では旧表土上面から掘り込んでいる。壁面は急角度で切り込んでおり、深さは最も深い奥壁部で約0.7mを測る。掘り方は墳丘基底面の傾斜にしたがって順次浅くなり、石室入口部分で上端と下端が一致する。

掘り方底面は、ほぼ平坦であるが水平ではなく、奥壁から石室入口に向かって低く傾斜している。底面の壁面沿いには一部腰石を安定させるための掘り込みをしているが、その方法は1号墳とは異なっている。すなわち2号墳では、

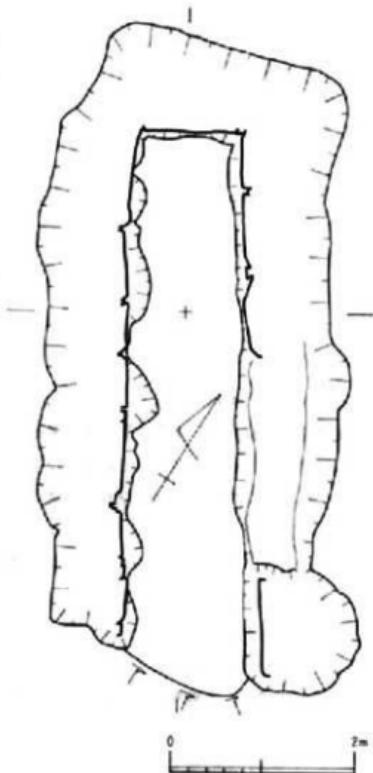
掘り方底面に貼床をした後掘り込みを行っており、貼床上面から掘り込みの上端が検出できた。

また、掘り方の裏込め方法も1号墳と異なり、裏込め石をほとんど用いず、黄褐色土を固く叩き締めているのみであった。

3. 出 土 遺 物

出 土 状 況

2号墳の遺物は、墳丘表土中から若干量の出土をみた他、主に石室内から出土した。石室内



第16図 2号墳石室基底面実測図

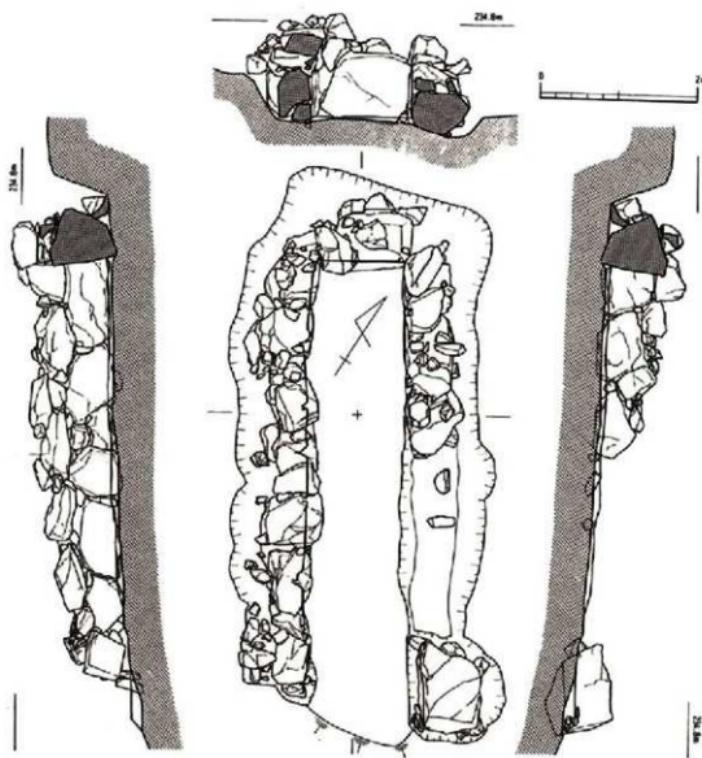


图172 2号墓石室实测图

の中央部分から前半部分にかけては、床面が左側壁材抜き取りとともに著しい搅乱を受けており、須恵器や鉄器等多くの遺物が散乱状態で出土したが、石室入口部分と後半部分の床面は、比較的良好な遺存状況を呈していた。

石室入口部分では、右側壁に接するように、須恵器杯身・杯蓋・短頸壺が集中して出土した（第18図A群53・55～63）。これらは追葬時における副葬品の集積と見られる。また、A群から奥壁寄りに約1mの位置でも須恵器短頸壺97や杯身80・81等の集中が見られた。

石室後半部分では、合計3面の埋葬面を確認した。最も上位の埋葬面は石室内埋土を約1m掘り下げたところにあって、そこでは須恵器の陶棺を検出した。陶棺は、口径34cm・器高93cmの砲弾形を呈する身と、口径43cm・器高21cmの鉢形の蓋からなるもので、ほぼ原形をとどめ身に蓋をかぶせた状態で身の口縁部を石室入口に向け、石室主軸線より右側壁に寄った石室最奥部に横たえられていた。陶棺の周囲には、陶棺に接して約10～20cm大の石材が4個置かれており、陶棺を安定させるためのものと考えられた。

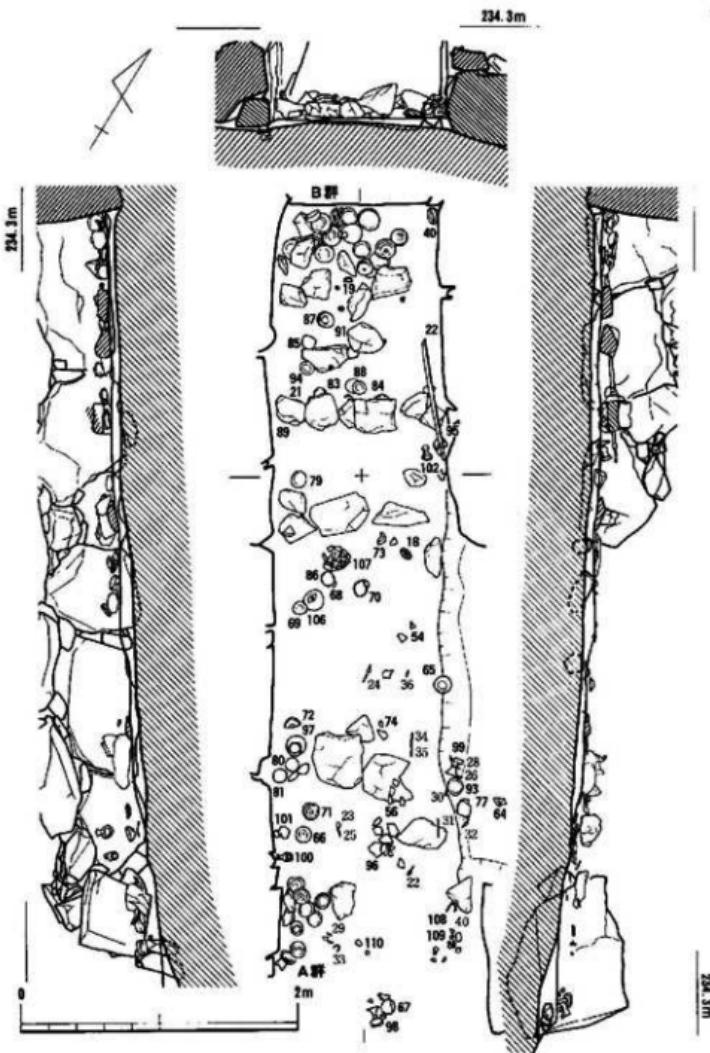
陶棺内部は、土砂が約3分の1ほど流入しており、土砂を除去すると人骨が遺存していた。人骨の遺存状況は極めて悪く、頭蓋骨と足部分等のごく一部を除いては細片となっていたため取り上げに成功しなかった。人骨は屈葬状態の成人骨で、頭部を石室入口側に向け、足先部分から陶棺内に納められていた。

なお、上位埋葬面では陶棺に明確に伴う副葬遺物は確認していない。ただ、支え石の上面で伏せた状態の須恵器杯身88や92を検出した。陶棺は埋葬時の原位置を保っており、陶棺が石室内最終埋葬と考えられるため、陶棺は杯身88・92を攪乱して安置されたものと判断できた。

中位埋葬面は、上位埋葬面から約5cm下層に確認でき、そこから約5cm下層に下位埋葬面である石室床面を検出した。中位埋葬面では、下位埋葬面の遺物を石室奥部に集め、その上部に面を形成しており、須恵器83～85・87・88等の他、大刀、耳環が出土した。また、棺台石の一部と推定できる石材を2～3箇検出した。しかし、これら各遺物の出土位置の高さには若干のばらつきがあり、厳密に同埋葬面に伴う遺物を抽出するのは少々困難である。

大刀は、刀身21とそれに伴う鈎18、柄頭銀金具19、鞘尻金具20の3個の刀装具が出土した。刀身21は、抜き身のまま、左側壁に沿って切先を奥壁に向け、刃部を石室内側に向けて置かれていた。切先は奥壁から約1m離れた位置にあった。鈎18は石室中央部のやや前方、柄頭銀金具19と鞘尻金具20は石室中央部のやや奥壁寄りから出土した。これらの各部品は、それぞれ離れた位置で出土しているので、追葬時に原位置から動かされたものと考えられる。耳環は合計6点が出土したが、それぞれ離れた状態であり、埋葬遺体の頭位は知り得なかった。

下位埋葬面では、石室奥部に多量の遺物が集積されていた。この遺物群（B群）は、ほとんど完形品の須恵器ばかり合計29個体からなり、杯身25・27・29・31・33・35・41～47、杯蓋24・26・28・30・32・34・36～40、柄48～51、平瓶52を含むが、遺物群の中で小単位の遺物のまとま



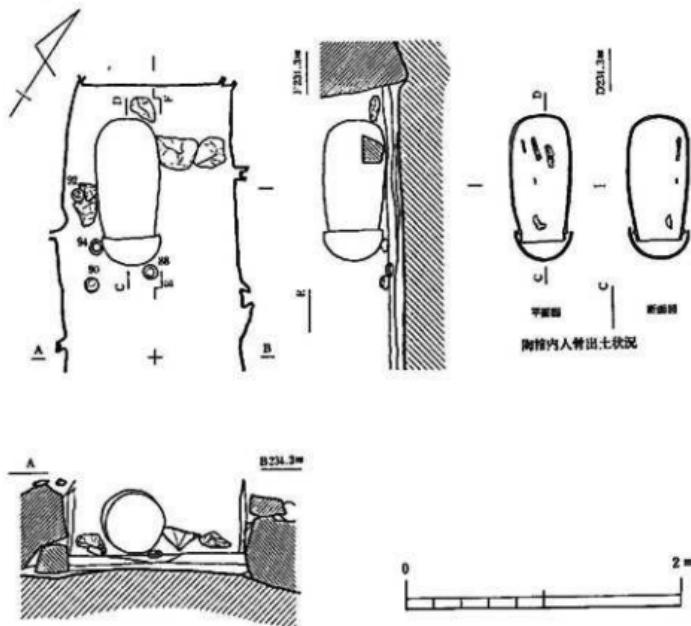
第18図 2号墳遺物出土状況実測図(1)
(番号のゴマック体は土器、明剣体は金属器)

りは抽出できなかった。これらの須恵器は互いに重ね合わせ、あるいは積み上げた状態で集積されており、部分的には各須恵器の間隙あるいは上部に粘土塊を充填していた。以上の検出状況から、この須恵器群は中位埋葬面が形成される際、ほとんど一時に集められたものであろう。

同埋葬面では、上記の遺物群（B群）の他、奥壁と左側壁の隅で須恵器杯蓋40、2列の石材列の間で須恵器碗79や小形甕102が出土した。また、B群から若干石室入口側で数個の石材、及び奥壁から約1.5mと約2.1mの位置でそれぞれ数個からなる2列の石材列を検出した。これらの石材は、底面を石室床面にはほぼ接している上、上面がほぼ平坦なものが多いため、棺台石として用いられたものの一部である可能性が考えられる。

なお、最も石室入口に近い石列の外側で、須恵器杯蓋68・69や平瓶105、土師器碗107が出土した。これらの出土位置は石室後半部分の下位埋葬面とはほぼ同じ高さであるが、石列でさえぎられているため土層関係は明らかにできなかった。また、石室中央部付近の床面が著しい搅乱を受けていたため、石室後半部と前半部の床面の土層関係も明らかでない。

（註）岡山理科大学の池田次郎氏に御教示いただいた。



第19図 2号墳遺物出土状況実測図(2) 上位埋葬面

須 惠 器 (第20~25図24~106)

ここでは、須恵器各器種の概要を述べるが、特に杯身・杯蓋については、第4章まとめの分類基準にしたがって説明する。なお、各個体の法量、特徴等については別表に記した。

杯身 (第20~24図25・27・29・31・33・35・41~47・54~56・65・74~78・82~92)

杯身は、石室内から26点出土している。

I類 内傾度の大きいたちあがりと受部を有する杯身で、杯身の中では大形のものである。底部が丸く、回転ヘラ削りを施すI-a類には、27・31・33・35・45・75の6点が該当する。すべてB群内からの出土である。底部がやや平坦近く、回転ヘラ削りを施さないI-b類には、25・29・56・74の4点が該当する。56の底部には線状のヘラ記号が記されている。56はA群、25・29はB群からの出土である。

II類 II類は、内傾度の大きいたちあがりと受部を有し、底部がやや平坦であるが、I類に比べて口径がやや小さく中形である。II-a類には41・46・47が該当する。3点ともB群からの出土である。47は「×」字のヘラ記号を底部に記している。II-b類に該当する42・43・77の3点のうち42・43はB群からの出土である。

III類 III類は、I・II類よりさらに小形化した杯身で、口径は小さく浅い。底部はやや平坦になる。54・55・65・78の4点がある。54・55・65は石室内、78は表土中からの出土である。55の内面には赤色顔料が付着する。

V類 V類は、受部をもたない楕形の杯身である。底部が丸く、口縁部がわずかに外反するV-a類は、82・83・84・85・87の5点がある。V-b類は底部がほぼ平坦で、V-a類よりも器高が高い、86・88・89が該当する。

VI類 VI類は、V類同様受部をもたない楕形の杯身であるが、V類に比べて体部と底部の境界が明瞭である。底部が平坦で他より器高が高い。90・91・92が該当する。

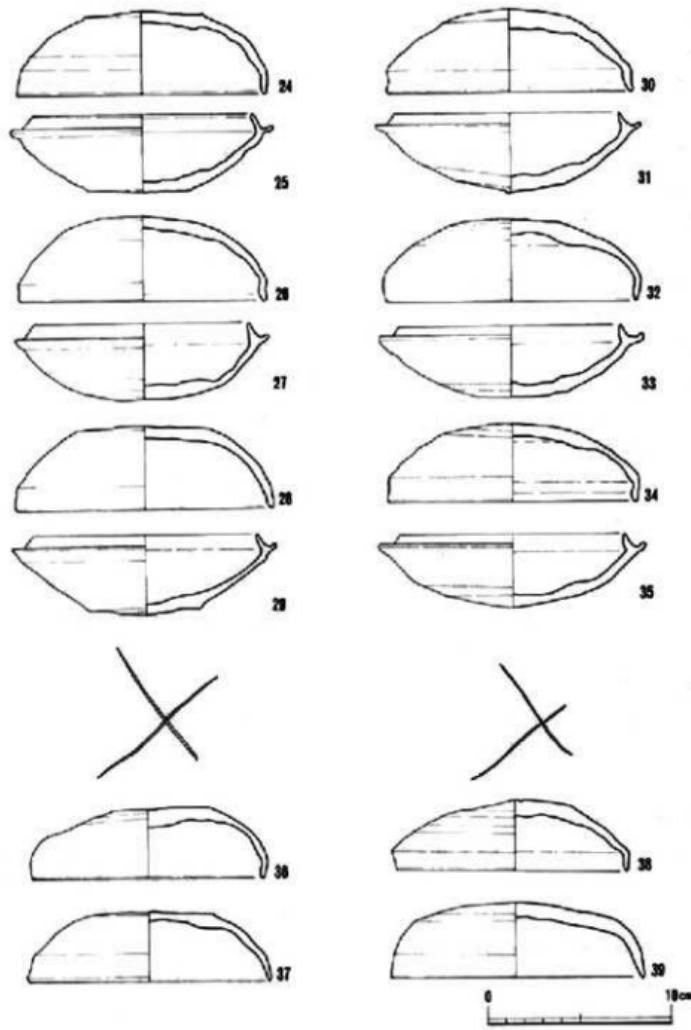
杯蓋 (第20~23図24・26・28・30・32・34・36~40・53・58~60・64・66~73)

杯蓋は、石室内から21点出土している。

I類 I類の天井部はあまりふくらみがなく、口縁端部は内傾する面を有する。天井部に回転ヘラ削りを施すものをI-a類、施さないものをI-b類とした。I-a類には26・30・32・34・39が該当し、I-b類には24・28・37が該当する。すべて石室内B群出土である。

II類 II類の体部のたちあがりは短く、口縁部と天井部を区切る後は不明瞭になる。36・38の2点は天井部に回転ヘラ削りを行うII-a類に属し、石室内B群からの出土である。

III類 III類には天井部と口縁部を区切る凹線や後はみられない。天井部に回転ヘラ削りを行っているIII-a類にはA群出土の53が該当し、天井部に回転ヘラ削りを施さないIII-b類には40・64・66・67・68が該当する。



第26图 2号出土物实测图(1) B群

V類 V類は、小形化し、口縁部と天井部の区別がなくなり、天井部がやや平坦である。69・70が該当する。石室中央部の陶棺の下部から出土している。

V類 V類は、口縁部内面にかえりをもち、天井部に扁平な円形のつまみを有する。天井部には回転ヘラ削りを施す。58・59・60・71・72の5点が該当し、A群から出土している。

V類 V類は、口縁部内面にかえりをもち、天井部に宝珠つまみを有する。天井部は回転ヘラ削りを施す。73の1点のみ石室中央部から出土している。

輪（第21・22・23図48～51・61・62・79～81）

輪は、やや丸い底部あるいはやや平坦な底部から内向ぎみに体部が直立し、底部に回転ヘラ削りを施すものをI類、やや丸い底部から内弯しながら上方にのびる口縁部をもち、底部に回転ヘラ削りを施さないものをII類とする。

I類 I類には61・62・80・81が該当し、80・81の体部の一部に自然輪が付着している。A群から61・62、石室内から80・81が出土している。

II類 II類には48・49・50・51・79の5点が該当する。79を除く4点がB群出土である。

無蓋高杯（第25図98・99）

石室入口近くから98、また左側壁の壁石抜き取り跡から99の各1個体が出土している。2個体とも同じ器形をとるもので、ラッパ状に開いた脚端部から細く締まった脚柱部がつき、さらに丸い杯底部から底部中央の縦を境として、やや外反ぎみにたちあがる口縁部を有するものである。脚端部は下内方へ短く屈曲したのち、端部を丸くおさめる。脚柱部には水平のカキ目が施される。底部中央の縫は鋭くない。杯部と脚部とが接合されるものである。脚柱部には通し孔は穿たれていない。两者共に内外面に自然輪が付着している。

器台（第25図105）

大形の器台の脚部である。表土中から出土した。ラッパ状に開く脚端部から細く締まった脚柱部がつくもので、上部は欠損している。脚端部は下から沈線1条、櫛描文、沈線3条、櫛描文、沈線2条、櫛描文、沈線2条の順で施文している。脚端部は平坦面を有する。

広口壺（第24図95）

95は石室内からの出土である。算盤玉に似た頭部をもち、細く締まった頭部から「く」の字状に大きく開く口縁部を有する。口縁端部は上方に肥厚する。底部は丸く、最大径は頭部中央に位置し、頭部やや上方に2条の沈線をもつ。底部外面には不定方向のヘラ削りを施す。

短頸壺（第22・24図57・93・94・96・97）

短頸壺は大小2種類ある。小形のものは57・93・94が該当し、大形のものは96・97である。97は石室入口近くの右側壁沿いから出土した。体部上方に最大径を有し、ややなで肩の頭部から外反ぎみにのびる口縁部をもつ。端面は丸い。底部は丸く、底部から体部中位までヘラ削り調整を行っている。器内外面共に自然輪がかかっている。93も最大径を体部中央にもつ。口縁

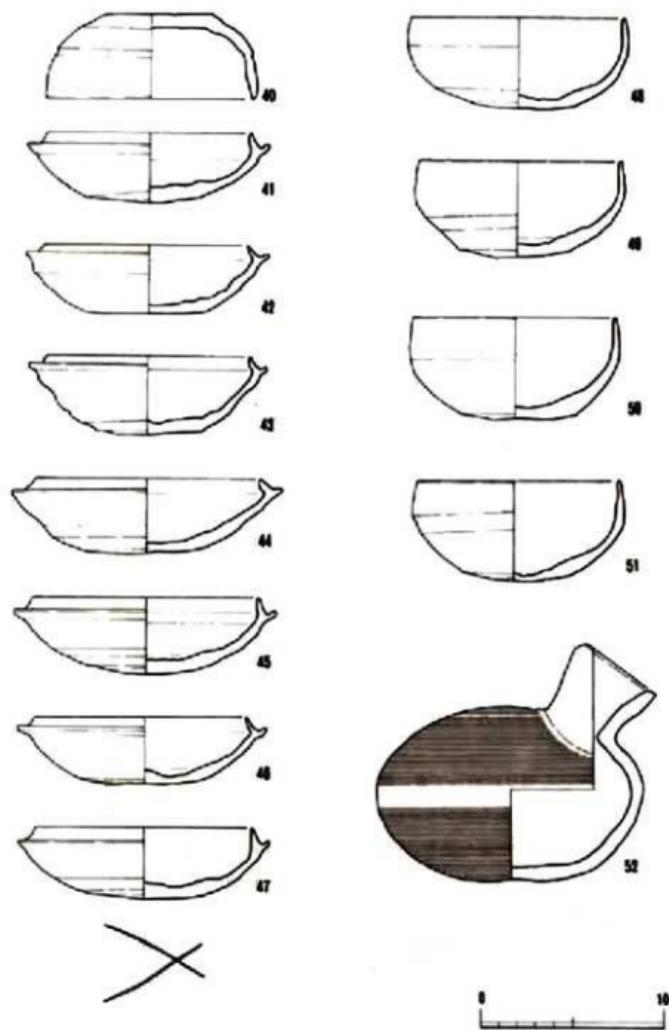


图21 2号填出土遗物实测图(2) B群

部は扁平な体部から短く内傾し、端面は丸い。底部はほぼ平坦である。内面には赤色顔料の混じった土塗が残る。94は、頸部が細く飾り、頸部から「く」の字状に外反する短い口縁部がつくものである。底部はやや平坦に近く、不定方向のヘラ削りが施されている。96は石室入口近くからの出土で、算盤玉の体部から「く」の字状に内彎した後直立する口縁部をもつ。体部下半は不定方向の粗いヘラ削りを施し、体部中央には波状文が描かれ、その下に1条の凹線が巡る。57は石室内A群から出土した。底部がやや丸く算盤玉の胴部から直立する口縁部をもつ。端面は若干凹む。底部はヘラ切り離し後調整を行っていない。体部に重ね焼きの痕跡がある。

壺（第25図104）

壺104は、口径が大きく、頸部から外反しながら開き、口縁部は内彎する。

提瓶（第22図63）

提瓶63は、A群の石室入口近くから出土した。円形の体部からラッパ状の口縁部がつき、頸部中位に1条の凹線が巡っている。口縁端部は丸く、体部は扁平な断面を呈する。器面には回転ヘラ削りを施す。体部の肩には耳にかけて円形の粘土粒を貼り付けている。

平瓶（第21・25図52・106）

平瓶は52・106の2個体があり、共に石室内中央部からの出土である。52は口縁部が斜め上方に接合され、外彎してたちあがる口縁部端面は丸い。体部はやや平坦である。器面全面に右回りのカキ目調整を緻密に施している。106はやや扁平な体部をもち、直立に近く口縁部がたちあがる。口縁部端面は広い。口縁部には2条の凹線と3条の沈線が巡る。体部最大径は上位にあり、底部はほぼ平坦でヘラ削りを行っている。

壺（第25図103）

103は石室内から出土したもので、口縁部のみの破片である。細い頸部から口縁部が大きく「く」の字状に開き、端部は丸い。口縁端部には沈線が施される。器壁が薄い。

小形壺（第25図102）

102は、石室中央部左側壁に沿って壺口縁部104と共に出土した。算盤玉の体部に細く引き締まつた頸部と、外寄ぎみにたちあがり中位で棱を有した後さらに外反する口縁部をもつ。体部の肩に1条、頸部に2条の凹線が巡る。体部中央の円孔はほぼ円形に近い。体部内には円孔を竹管でくり抜いた時の粘土塊が入っている、外面には自然釉が付着している。

小形脚付き長頸壺（第25図100）

100は、石室内のA群近く、小形提瓶101と共に出土した。短くラッパ状に開く脚部をもち最大径を胴部中位にとる。脚端部は逆L字状に屈曲し、短い頸部から上方に向けて外反する口縁部を有する。口縁端部は丸い。沈線が胴部に1条、体部上方に2条巡り、その間に櫛描きの锯歯文を施している。

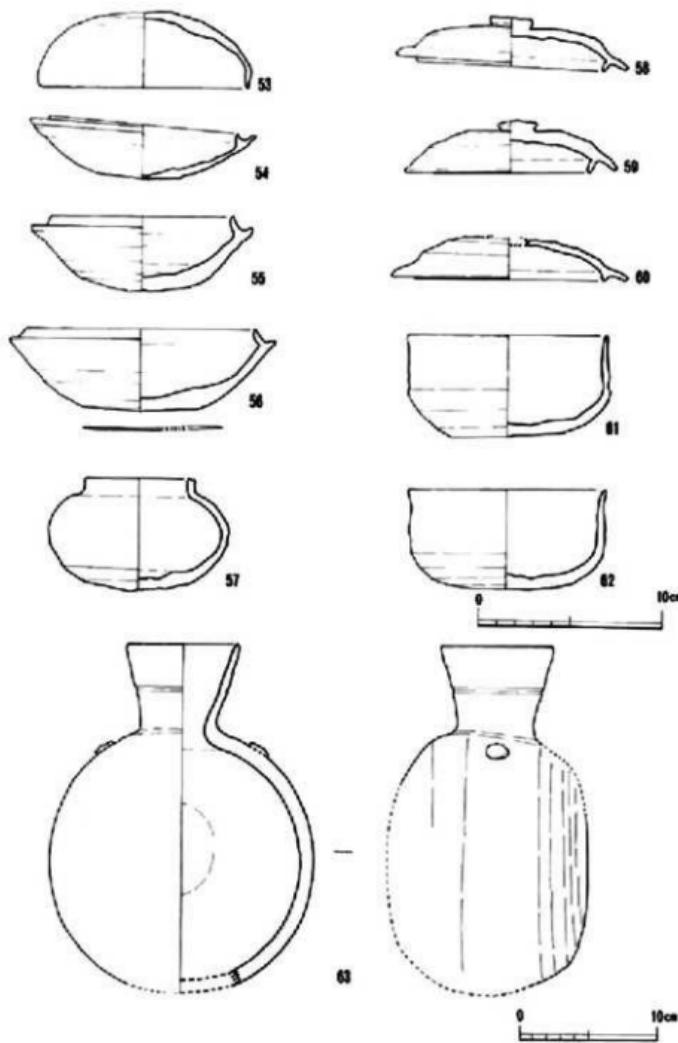
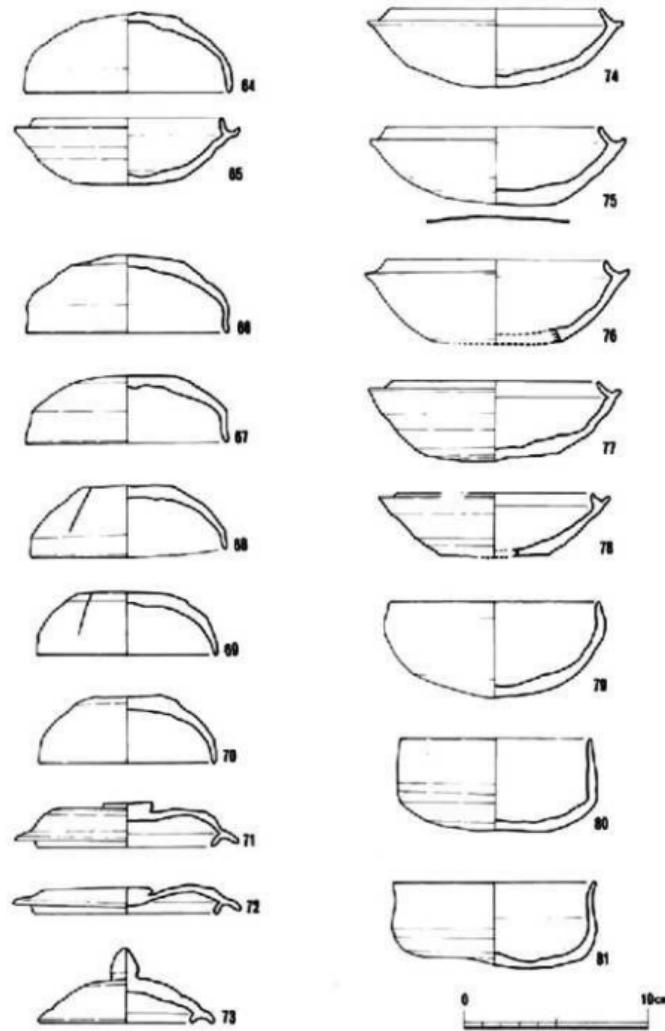
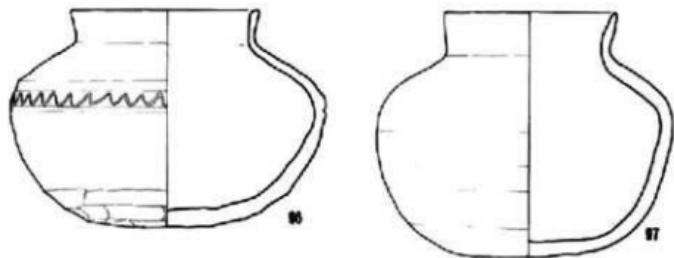
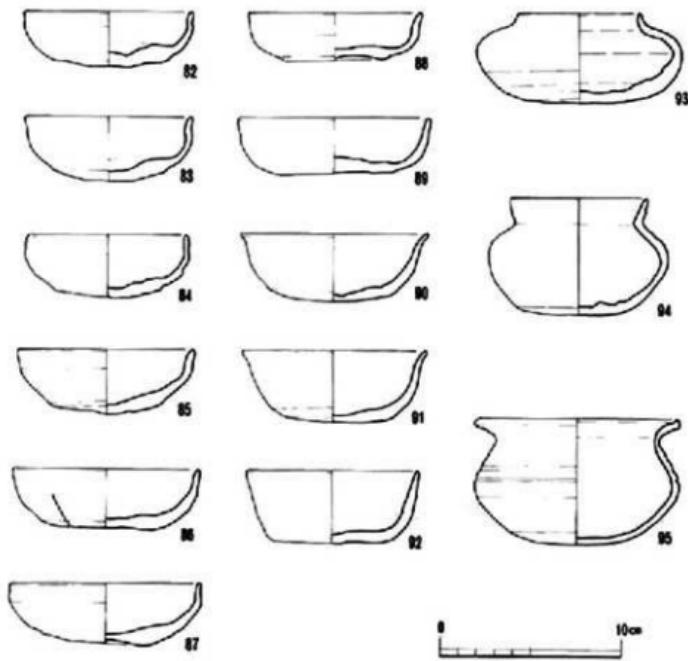


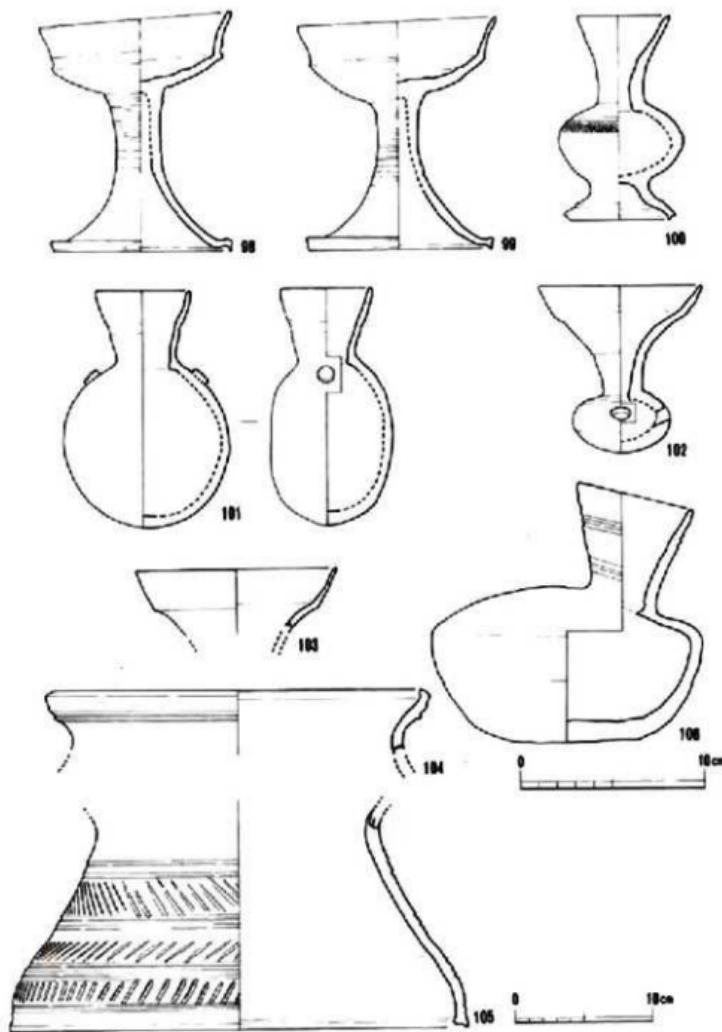
图22图 2号墓出土遗物实测图(3)



第22圖 2號墳出土物實測圖(4)



第24图 2号墓出土文物实测图(5)



第25圖 2號墳出土遺物實測圖(6)

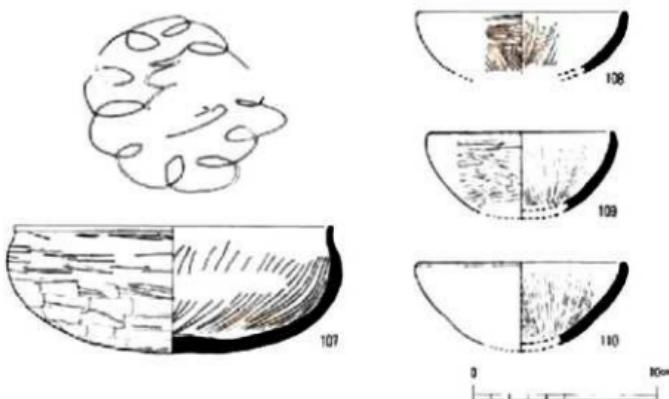


図26-7 2号墳出土遺物実測図(7)

小形提瓶（第25図101）

101は、石室内のA群近く、小形脚付き長頸壺100と共に出土した。円形で偏平な断面を有する体部から、上方にたちあがる口頸部をもつ。口頸部中位には1条の凹線があり、口縁端部は丸い。体部両肩の耳にかえて小さく偏平な円形粘土粒を貼り付けている。

土 師 器（第26図107～110）

本墳からは4点の土師器碗が出土している。

107は、他の3点に比べて大形で浅い器形をなし、口径17.2cm、器高6.9cmを測る。丸底の底部から強く内收する体部がたちあがり、弱く屈曲した後口縁部が短く外反する。外面は、体部中位以下に横方向のヘラ削りを行った後、上半部にヘラ磨きを施している。内面は、底部に螺旋状の暗文、体部に1段の放射状暗文を施す。

108～110は、口径10.0～11.2cm、推定器高4.3～4.4cmの小形の碗である。小さい丸底の底部と若干内湾みの体部をもち、内面には放射状暗文様のヘラ磨き、外面には丁寧なヘラ磨きを施している。

陶 棺 (第27図111・112)

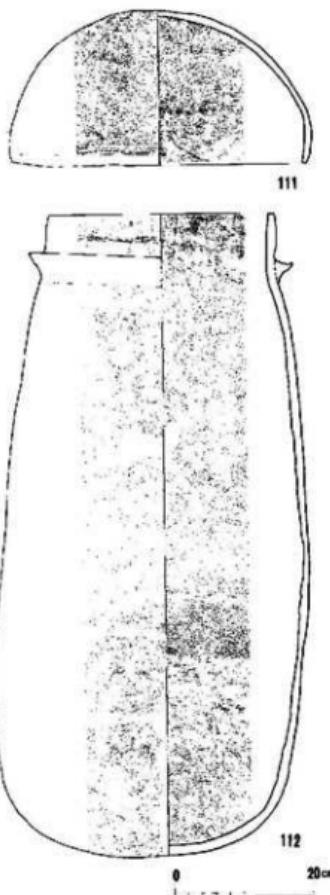
陶棺は、石室内奥壁近くの右側壁寄りに安置されていたもので、蓋111と身112があり、ほぼ完存している。

111は、鉢形を呈する須恵質の蓋で、口径40.0~42.5cm、器高22.0cmを測る。丸味の強い天井部から下降してきた体部は、口縁部に至ってわずかに屈曲して内窵し、口縁端部は内外に面をもつ。

外面には平行叩きを施すが、その後一部をナデ消しており、内面には同心円状の当て具痕が残る。口縁部はヨコナデ調整している。器壁の厚さは約0.8~1.1cmを測り、胎上には精選された粘土を用いているが、全体に淡灰色を呈し焼成は甘い。

112は、砲弾形を呈する須恵質の身である。口径は32.5~33.3cmと蓋に比べて若干小さく、器高は91.9cmを測る。底部は丸底で、最大径を胴部中位より若干下部にもち、頸部でややすばまた後、直口の口縁部となる。口縁端部は若干内傾する平坦面をもち、口縁部の外面直下には断面三角形の鉤を貼り付けている。鉤の幅約2.0~2.6cm、厚さ約3.9cmを測る。

胴部外面は、細かい平行叩きの後縦方向のハケメで粗く調整しているが、器面の磨滅が著しい。胴部内面は、口縁部以下に同心円状の当て具痕が明瞭に残っている。口縁部は内外面に横方向のハケメを施し、端部をヨコナデ調整している。胴部内面の底部から約3分の1と3分の2及び頸部に粘土積み上げの痕跡が認められる。器壁は約0.7~1.5cmと比較的厚く、特に頸部では少し肥厚している。須恵質であるが、淡灰色を呈し焼成は甘い。



第27図 2号墳出土遺物実測図(8)
外観に横方向のハケメを施し、端部をヨコナデ調整している。胴部内面の底部から約3分の1と3分の2及び頸部に粘土積み上げの痕跡が認められる。器壁は約0.7~1.5cmと比較的厚く、特に頸部では少し肥厚している。須恵質であるが、淡灰色を呈し焼成は甘い。

鉄器

大刀（第28・29図18～21）

大刀は、刀身1口と刀装具3点があり、いずれも部分的には鋼化が著しいところも見られるが、遺存状態は比較的良好である。柄頭や切羽等、他の刀装具は出土していない。

刀身21は、全長90.7cmを測る直刀の刀身である。平棟・平造りの頑丈なつくりで、刃部長78.0cm、刀部幅3.0～3.5cm、棟幅7～9mmを測る。鋒部はわずかにふくら切先となり、関は両開形式である。刀身には木質等の遺存は見られない。

茎部は、先端に向かってやや細くなり茎尻が丸味を帯びるもので、断面が逆台形状をなす。基部の長さは約12.7cm、幅1.5～2.6cm、厚さ4～7mmを測り、先端約3分の1には木質が遺存している。基部には2ヶ所に目釘孔があり、目釘が挿入されている。そのうち関側の目釘は両端を欠失しているが、茎尻側の目釘は完存しており、茎表側から打ち込まれている。目釘は頭部が一边約4mmの方形の平頭をなし、長さ2.0cmを測る。

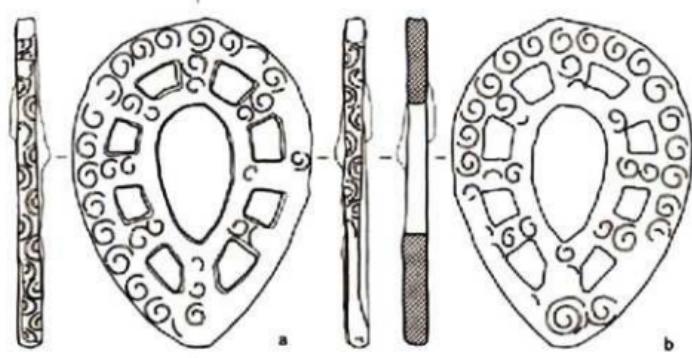
刀身の関部には、鍔が遺存している。鍔は、幅1.8～2.0cmの鉄板を倒卵形に巻き、両端を刀部側で接着したもので、関部から基部にかけて柄口に装着されている。鍔内部には柄木の木質が遺存しており、そのため鍔の肉厚は不明瞭であるが、約1～3mmを測る。

鍔の表面には、2列の溝文からなる銀象嵌文様が施されている。溝文は、現状では茎表側に9個、茎裏側とその隣側に9個、合計18個が残存しているが、2個が欠失しており、本来20個であったと考えられる。溝文1個は、直径約4～6mmで、内方から外方へ時計回りにはね1重に巻かれたものである。象嵌はたがね彫りによる線象嵌とみられ、残りが良いものでは溝文1個が6～8本の単位で形作られている。1単位は、幅約0.5mm、長さ約3mm前後である。

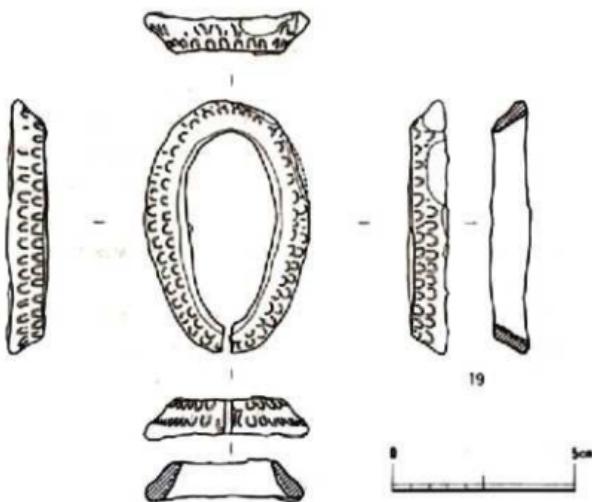
鍔18は、倒卵形を呈する鉄製の鍔で、長径約8.9cm、短径約6.5cm、厚さ約0.7cmを測る。鍔の中央部には柄木を挿入する孔、さらにその周囲には台形状の透孔が8個開けられている。中央孔も倒卵形をなし、長径約3.6cm、短径約2.0cmを測る。中央孔の内面には柄木の木質の遺存は見られない。中央孔及び透孔の平面形は、いずれも第28図a面とb面ではa面の方がわずかに大きい。

鍔の表面にはa・b両面に溝文、側縁部に半円形を呈する重弧文の組合せによる線銀象嵌文様が施されている。溝文は、鍔の下端にやや大きめの2重溝文を避け、外縁に沿って直径約1.1～1.5cmの1重～1重半の溝文を巡らせ、さらに各透孔の間にやや小さめの溝文を2個づつ配している。象嵌の1単位の大きさは、長さ約8mm前後、幅約2mm弱で、象嵌の縁の中央には鉄の地金が細く見えるものが多く、たがねを左右両側からV字形に打ち込んだ結果と考えられる。側縁部の重弧文は、弦部を縦に向け、1個づつ交互に鍔の側縁部を全周している。弧文1個の大きさは、縦約7mm、横約4mmを測る。

柄頭銀金具19は、倒卵形を呈する鉄製の柄頭銀金具である。平面形は、柄口側が長径5.3cm、



18



19

第28图 2号墓出土遗物实测图(9)

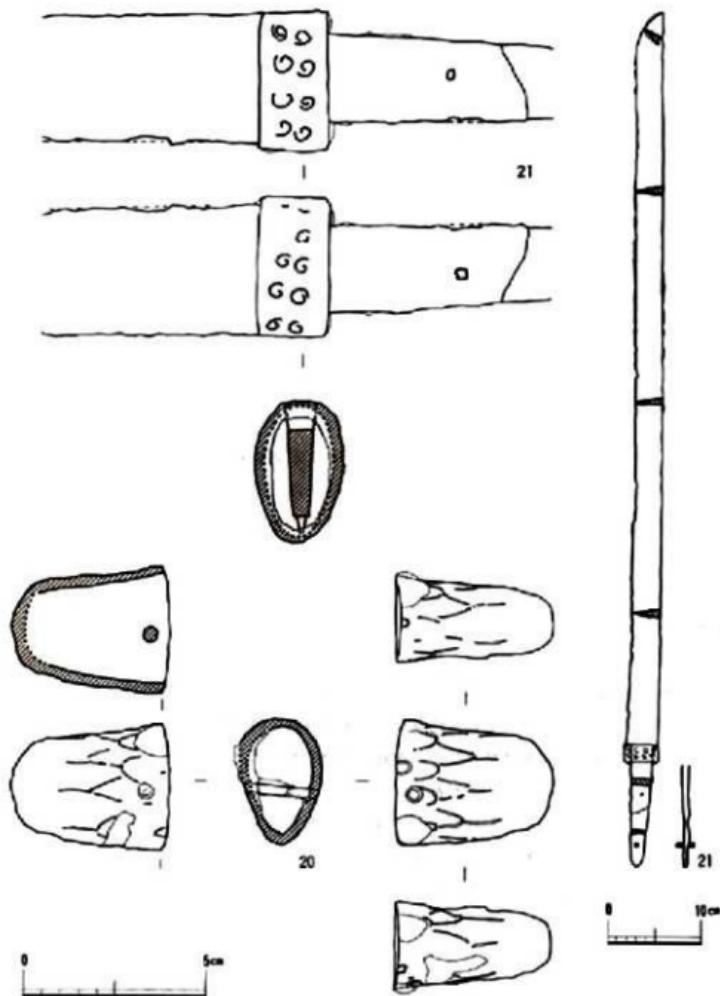


图29图 2号出土遗物实测图(16)

短径 2.5cm、柄頭側が長径 6.8cm、短径 4.5cmを測り、柄頭側に向かって大きく広がる形となっている。柄頭縁金具は、幅約 1.0cmの鉄板を倒卵形に曲げ、両端を刃部側で接着したものであるが、現状では接着部分が約 2mm離れている。柄頭縁金具の内面には木質の遺存が見られる。

柄頭縁金具の外面には、上下 2段に V字あるいは U字形の細線銀象嵌文様を巡らせている。文様 1 個の大きさは、縦約 3mm、横約 3mmで、2 ~ 3 本の単位の組み合わせで形作っている。象嵌 1 本の単位は長さ 2mm前後、幅 1mm弱である。なお下端の接合部分が離れたことにより、象嵌の 1 単位が切断されていることから、象嵌文様の施文は柄頭縁金具の形を作った後に行われたものと考えられる。また、下端部下段の文様の中に 1 単位の左半分しかないものがあり、象嵌は金具の下端部から打ち込み始めたものと推測される。

鞘尻金具 20 は、先端が若干丸味をもつ鞘尻金具で、長さ約 4.3cm、幅約 3.4cm、肉厚約 3mm を測り、縁部が短径約 2.2cm の倒卵形をなす。縁部から約 4mm 鞘尻側には、断面が一辺約 4mm の方形を呈する目釘が打ち込まれている。金具内面と目釘約 2 分の 1 には木質が遺存している。

鞘尻金具の外面には、V字形と直線の組み合わせによる銀象嵌文様が 4 段に施されている。1 段目は、金具の基部側の縁に沿って小さい V字あるいは U字文を巡らし、2 段目は 1 段目の各文様の下端を繋ぐように 9 個の V字文、3 段目はさらに 2 段目の文様の下端から 9 個の V字文を配置し、その下端から直線をのばしている。V字文は鞘尻側になるにしたがって大きくなり、文様 1 個は 2 ~ 3 本の象嵌単位からなる。

鉄鎌（第30図22~35）

鉄鎌は、完形、破片合わせて 14 点余りが出土している。すべて有茎鎌で、1 号墳の鉄鎌と同じく短頭鎌と長頭鎌があり、鎌身部の形態から短頭鎌 I・II類 2 点、長頭鎌 III~V類 12 点余りの合計 5 類に分類することができる。鉄鎌の計画値は別表に掲げた。

I 類 (22) 鎌身部が柳葉状をなし、逆刺が重抜のものである。籠被をもつ。鎌身部の約 3 分の 1 を欠損するが、平造りと思われる。

II 類 (23) 鎌身部が三角形状をなし、浅い逆刺をもつものである。頭部に棘状突起をもつ棘尾被を有する。鎌身部断面がレンズ状の両丸造りである。

III 類 (24~27) 鎌身部が柳葉状をなし、深めの逆刺をもつ小形のものである。26・27 は、鎌身部及び頭部の一部を欠損する。24・25 は、長めの籠被をもつ両丸造りである。

IV 類 (29~30) 鎌身部が長三角形状をなし、浅い逆刺をもつ小形のものである。棘尾被をもち、両丸造りである。29 は、頭部が途中で欠損し、30 は鎌身部の先端部を欠く。

V 類 (31~32・34) 鎌身部が鑿頭状をなし、籠被との境目が見られないものである。鎌身部断面は台形状をなす片切丸造りである。32 は頭部を欠損し、34 は鎌身部先端を欠き、頭部

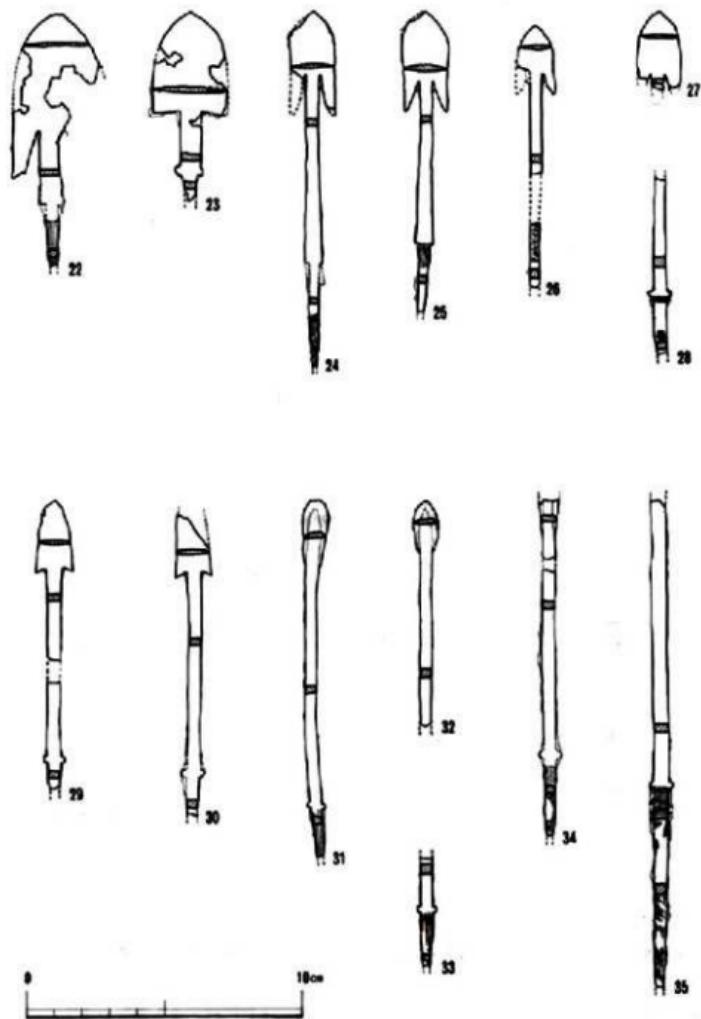
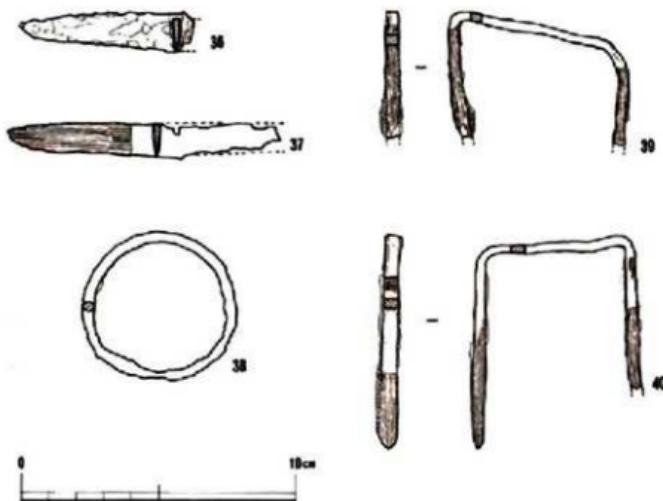
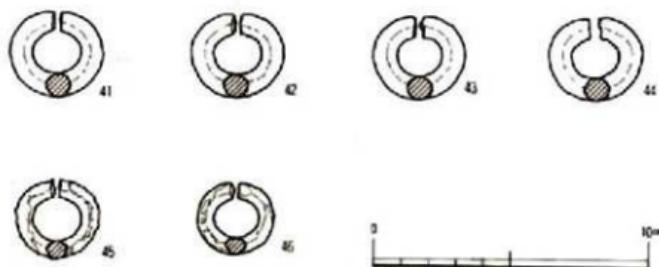


图30图 2号墓出土遗物实测图(1)



第31図 2号墳出土遺物実測図(12)



第32図 2号墳出土遺物実測図(13)

の一部を欠損する。錦絣被をもつものと思われる。

以上の他、28・33・35は、頭部のみが残存するが、錦絣被をもち、長頭縫に属するものと思われる。

また、22・24～26・28・31・33・34・35には木質痕、さらに35には糸巻痕が残るが、これらは矢羽装着の痕跡と考えられる。

刀子（第31図36・37）

石室内から2点の刀子が出土している。

36は、刃部のみ残存しているもので、刃部断面が長三角形状をなす。37は、片開造りと判明するもので、刃部断面が長三角形状、茎部は一部欠損するが断面長三角形状である。36・37とも刃部に木質痕を残しており、鞘の残存と考えられる。なお、37の茎部には木質痕は認められない。

鍔（第31図39・40）

石室内から2点出土し、いずれも「コ」の字状の形態をなす。39はひずみが著しいが、幅約6.6cm、高さ約4.8cm、断面は長方形で 0.3×0.4 cmを測る。40は、39よりやや大きめで、わずかにひずむ。幅約6.3cm、高さ約7.7cm、断面は長方形で 0.5×0.3 cmを測る。39・40とも釘先端部に木質痕が残る。

鐸（第31図38）

38は、鉄製、中央の鋼で、長径5.8cm、短径5.4cm、断面径0.3~0.4cmを測る。地金が部分的に良好に残存しており光沢をもっていたために、当初は銀鋼かとも思われた。開口部は錆着のため不明確であるが、第31図の下部あたりと思われる。象嵌等は見られない。

耳環（第32図41~46）

耳環は6点出土し、6点とも銅を地金とする中実のものである。銅の地金の上面には銀が貼られるが、41・42・45・46には、銀の上面に金が残存し、鍍金の痕跡を残す。また、43・44には、金の残存は認められず、環体外面には銀が残るのみであるが、他の耳環との関係から、鍍金されていた可能性も考えられる。

環形は、いずれもやや横長の円形をなし、環体断面は五角形に近い円形である。開口部は、0.2~0.3cmで6点ともほぼ同じ数値を示す。長径、短径、断面径から、41・42・43・44はほぼ同じ大きさであることがわかる。これら4点は大きさに違いはないが、41・42の環体断面が五角形に近いのに対し、43・44の環体は丸みを帯びるなど、形状に違いが見られる。また、41・42には金が残存するが、43・44には金が残らない。以上のことから、41・42、43・44という本来一对であったと考えられるものが見出せる。

45・46は、他の4点に比べて小形であり、45が46よりやや大きく、これら2点が一对であったとは考えられないものである。2点とも外面の剥離が著しい。

第5節 その他の遺物

出土状況

本古墳群からは、古墳時代に属する遺物の他に、石室再利用時のものと考えられる奈良時代以降の遺物が若干出土している。しかし、そのすべては表土中からの出土で、遺構に伴うものではない。遺構は確認できず、おそらく後世の石室材抜き取りの際に攪乱されてしまったと考えられた。ただ、1・2号両墳の石室後半部床面は、当初の状態を比較的良好に残しており、石室再利用時の活動があり影響を及ぼしていない。ここで報告するのは、多くの時期にまたがる多種多様な遺物群であるが、出土状況を含め一括して説明する。

遺物は、上記したように遺構から出土していないが、出土地点は大きく3～4ヶ所に分けることができ、おおよその原位置を推測することは可能である。

土師器皿113～115・119と瓦器碗121は、1号墳石室床面から約40～60cm上部の攪乱土層中から出土した。特に113と119は非常に接近した距離で検出した。

土師器皿120・122～124及び須恵器片口鉢126、長頸壺128は、1号墳のII～IV区の表土中から出土した。特に120は、1号墳IV区と2号墳II区の墳丘裾部地山整形溝内黒色土層との境界付近からの出土で、どちらの古墳に所属するかは断定困難であった。しかし、溝内には1号墳から流入してきたと推定できる状態の石材を多数検出したため、117も1号墳由来の可能性が高いと考えられる。

1号墳の石室前半部は、石材抜き取りの際に攪乱で石室基底面まで完全に破壊されていたが、石室基底面近くの表土中から丹波焼127が出土した。127は、直径約1～2mの範囲内に破片が散乱した状態であり、その周辺からは人骨片が少量出土した。人骨片は焼けて小片となった火葬骨である。¹³丹波焼127と人骨片とは、その近接した出土位置から極めて密接な関係を有するものと考えられる。したがって、1号墳石室の前半部分に、127を骨壺とした火葬骨の埋葬が行われていたが、後世の攪乱によって破壊されたものと理解し得た。しかし、127が出土した範囲周辺の基盤層上面には、127を埋め込むための掘り方やその抜き取り穴の痕跡は見当たらず、127の設置状況は検証できなかった。

なお、2号墳の墳丘上表土から土師器皿116～118と白磁碗125、またIV区の墳丘裾部から伏鹿螺鳥文鏡130が出土した。

(註) 岡山理科大学の池田次郎氏に御教示いただいた。

出土遺物

土師器（第33図113～120・122～124）

113～115は、口径8.0～8.5cm、器高1.4～1.7cmを測る小皿である。平坦な底部と短い口縁部をもち、底部は指押さえで成形している。

116～120は、口径11.7～14.4cm、器高2.0～3.3cmを測り、やや大形の皿である。116・117は指押さえで成形しており、体部と底部の境界が明瞭でなく、口縁部が外反する。118・119は、丸味の強い底部から直線的な体部が後をもって立ち上がる。底部には指頭圧痕を明瞭に残す。120は、内弯する体部をもつ。

122～124は、底径4.8～7.4cmを測る皿で、底部に糸切り離しの痕跡を残す。全形がうかがえる124では体部が弯曲しながら立ち上がり、口縁部は若干外反する。口径17.0cmを測り、これらの土師器の中では最も大きい口径を有する。

瓦器（第33図121）

内弯する体部と、弱く後をなして立ち上がる口縁部をもつ。底部には断面三角形状の高台を有する。高台径は5.6cmで、14.4cmの口径に比べそれほど小さくない。暗文の有無を含め、内外曲の調整は器面が磨滅しているため不明であるが、体部外面には指頭圧痕が認められる。

白磁（第33図125）

直線的体部と下方に肥厚する口縁部をもつ碗である。

須恵器（第33・34図126・128・129）

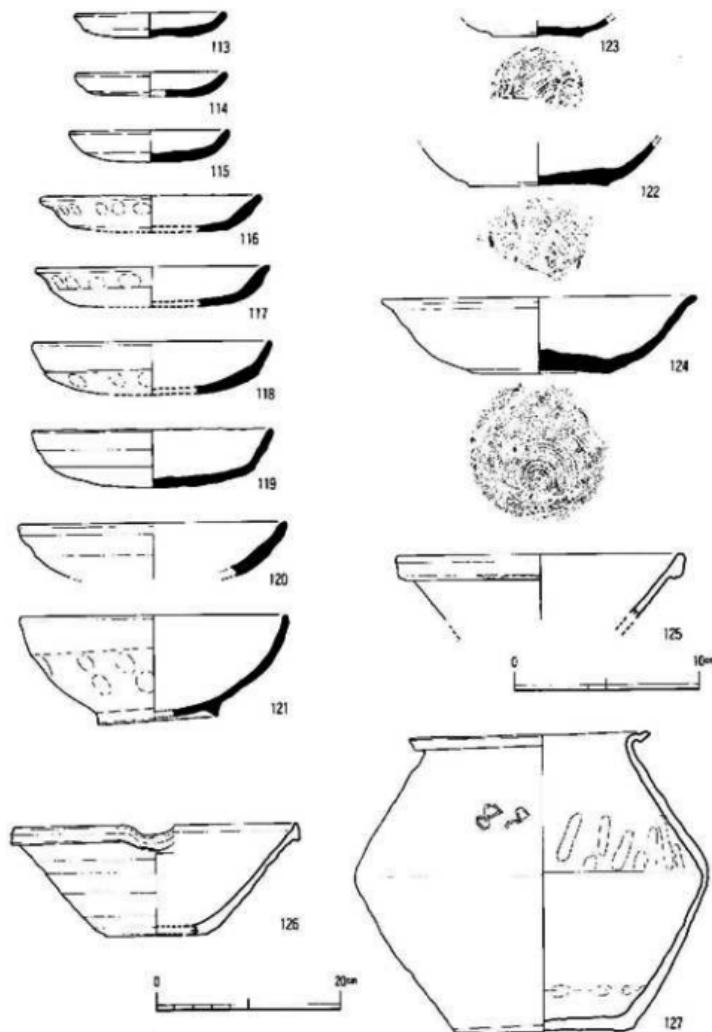
126は、平坦な底部と直線的な体部、及び上下両方に大きく肥厚する口縁端部をもつ片口鉢である。口径に比して底径が比較的大きい。

128は、長く外反する口頭部と肩の張る体部、及び平坦な底部からなる長頸壺である。肩部には2本の沈線間に刺突文を施し、底部は静止ヘラ削りによって調整している。

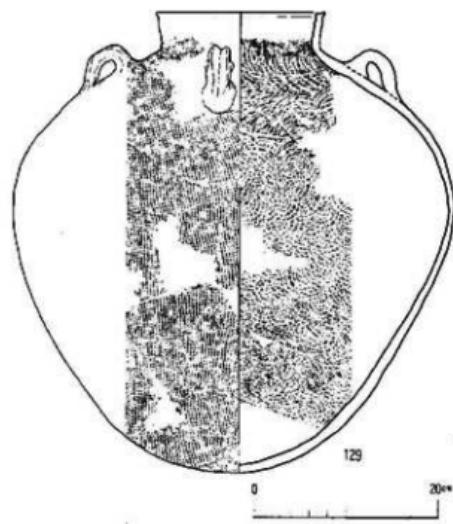
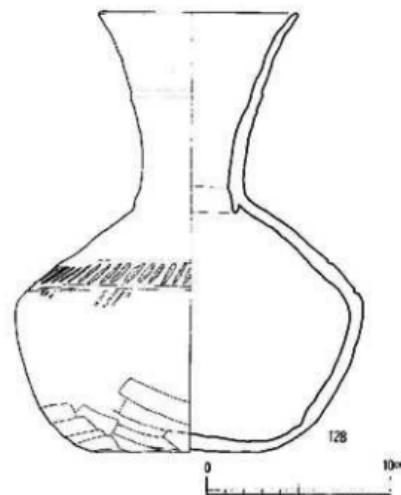
129は、肩部に断面円形の耳を2対貼り付けた四耳壺である。口縁部はわずかに外傾し、端部が内傾する平坦面をなす。肩の張る体部は中位よりや上部に最大径を有し、底部は丸底である。外面に平行叩き、内面には同心円状の当て具痕が残る。器壁は底部から若干上部でやや肥厚が認められる。

丹波燒（第33図127）

127は、算盤玉状の体部を有する丹波燒壺である。体部は中位で腰をもって強く屈曲し、体部の張りに対して器高があまり高くない。口縁部は外方に強く屈曲し、端部を上方につま上げる、いわゆるN字状口縁の退化形態をなす。肩部には「8」字状の窓印が2個認められる。体部外面下半は暗赤色の地肌を残し、上半には淡緑灰色の釉を厚く施している。体部内面には粘土積み上げの痕跡が3箇所明瞭に認められ、その部分には強い指頭圧痕が残っている。



第33図 その他の遺物実測図(1)



第34図 その他の遺物実測図(2)

伏龍螺島文鏡

130は、鏡面径8.8cmを測る青銅製の和鏡である。鏡面、背面ともうすい縁銷におおわれていて、比較的良好な遺存状態を示している。肉厚は約1mmと鏡面径に比してやや厚く、重量は72.7gである。鏡面は、ほぼ平坦で、ほとんど反りをもたない。縁は、直立した厚みのある高い縁で、幅約0.5cm、高さ約0.5cmを測る。鏡背は、縁の内端から約0.75cmの部分に界隈がめぐっており、それによって内区と外区に分けられている。外区には斜格子文が掏出されており、内区には鈕を挟んで対角に、伏龍、島、蝶、3個一組の円環をそれぞれ一対ずつ配している。内区の中央部には、径1.6cmの振菊座鉤をこしらえており、鉤孔の中には纖維質の紐状のものが遺存している。



第35図 その他の遺物実測図(3)

第4章 まとめ

1. 調査結果

古墳群の選地 沢の浦古墳群は、篠山盆地の北西隅に位置し、南東にのびる尾根から北東に派生した小支尾根上に立地する。古墳群は2基の古墳で構成されており、1号墳は支尾根のはば稜線上、2号墳は1号墳から若干降った斜面にあって、それぞれ墳丘裾を接するように築造されている。

古墳群は、小坂川に沿った最大幅約0.4km、奥行き約1.3kmの小さな谷の入口部分に選地している。谷の中は、箱塚古墳群、小坂古墳群、四王寺谷古墳群等、宮田川流域の中では最も後期古墳群が集中している地域である。その地域は、篠山盆地の北西の出入り口にあたる要衝の地であり、宮田川流域の中では最も可耕地の広い地域の一角を占める。しかし、本古墳群から眺望できる平野部は、北西に小坂川沿いの谷、及び北東に宮田川沿いの谷筋という比較的限られた小範囲である。これらのこととは、本古墳群の被葬者達の有していた存立基盤を考える上で重要なことであろう。

1号墳 1号墳は、直徑約9mの円墳である。墳丘の築造は、斜面上方側に三日月形の地山整形溝を掘削し、その内側に墳丘盛土を積み上げて築いている。埋葬施設は、南東方向に開口し、奥壁幅約1.0m、残存長約3.4mを測る小型の無袖型横穴式石室である。石室は、天井石及び石室前半部分の石材が抜き取られ、かなり破壊されていたが、石室後半部分の床面は比較的良好に遺存していた。遺物は、須恵器、土師器の他、少量の鉄器が出土した。特に、石室中央部の右側壁沿いには追葬時における副葬品の集積が見られ、また奥壁沿いには原位置を保つと考えられる須恵器杯身、杯蓋があった。

2号墳 2号墳は、1号墳と同じく直徑約9mの円墳で、墳丘の築成方法も1号墳と同様である。埋葬施設は、南東方向に開口し、奥壁幅約1.1m、石室長約5.7mを測る小型の無袖型横穴式石室である。石室の天井石及び左側壁中央部の石材は抜き取られていたが、床面の遺存状況は比較的良好で、特に石室後半部分で計3面の埋葬面が確認できた。最も下位の埋葬面には原位置を保つ遺物はなかったが、追葬時に副葬品を粘土とともに奥壁寄りに集積し、その上に中位埋葬面を形成していた。中位埋葬面からは、銀象嵌を施した大刀1口と大刀に伴う刀装具3点が出土した。さらに上位の最終埋葬面には、須恵質の砲弾形陶棺が安置されており、棺内から追葬された成人骨を検出した。なお、石室入口部分の右側壁沿いには、追葬時における副葬品の集積が見られた。遺物は以上に須恵器や少量の土師器碗、耳環、鉄製品がある。

2. 須恵器について

沢の浦古墳群出土の須恵器について、杯身・杯蓋・柄の三器種をとりあげ器形、法量、調整技法等により分類を行い、須恵器の所属時期を明らかにしていきたい。

杯身　杯身はⅠ類からⅥ類までの6分類ができる。大別すると、たちあがりを有するⅠ類からⅢ類とたちあがりをもたないⅤ・Ⅵ類に分類し、前者は法量によってⅠ類からⅢ類に、後者は底部の形によってⅤ類からⅥ類に分類をした。そして、底部に回転ヘラ削りを施すものをa類、ヘラ切りのまま未調整、あるいはナデを施すものをb類とした。ただ、Ⅳ類は該当する杯身がないが、杯蓋Ⅳ類との併出関係から杯身Ⅳ類を設定した。

Ⅰ類の杯身は、内傾度の強いたちあがりをもち、口縁端部と受部先端との間隔が大きい。受部から底部にかけて丸みをおびている。Ⅰb類の底部は平底に近い。法量はa類が口径11.6～12.4cm、器高4.0～4.3cm、b類が口径11.0～12.4cm、器高4.2～4.5cm、出土個数はⅠa類5点、Ⅰb類4点を数える。杯蓋Ⅰ類に伴う。

Ⅱ類の杯身は、Ⅰ類に比べ器形は小さくなる。口縁端部と受部先端との間隔は小さい。回転ヘラ削りの範囲は狭い。法量はa類が口径11.0～11.5cm、器高3.6～4.1cm、b類が口径11.0～11.2cm、器高3.8～4.3cm、出土個数はⅡa類3点、Ⅱb類3点を数える。杯蓋Ⅱ類に伴う。

Ⅲ類の杯身は、たちあがりは短く、器形はⅡ類に比べてさらに小さく、浅い。口縁端部と受部先端との間隔はわずかとなる。器形は受部から底部にかけて直線的に成形され、底部は平底もしくはそれに近いものである。底部のヘラ削りは粗く、回転ナデが施される。法量はa類が口径9.8～10.0cm、器高3.6～4.0cm、b類が口径10.2～10.3cm、器高2.9～3.6cm、出土個数はⅢa類2点、Ⅲb類12点を数える。杯蓋Ⅲ類に伴う。

Ⅳ類の杯身は、底部が丸く、口縁部はわずかに外反するが、器高が高いa類と、底部がほぼ平坦でa類より器高の低いb類とに分けた。法量はa類が口径8.9～10.3cm、器高3.0～3.5cm、b類が口径9.5～10.5cm、器高2.4～3.2cm、出土個数はⅣa類5点、Ⅳb類3点である。

Ⅴ類の杯身は、底部が平坦で、他の類に比べ器高が高く、底部はヘラ切りである。法量は口径9.6～10.3cm、器高3.1～4.0cm、出土個数は3点である。

Ⅰ類からⅢ類までの変化の傾向として、たちあがりの矮小化と法量の縮小化があげられる。杯身の大きさの変化を口径、器高の平均値で示すと、Ⅰ類（口径12.1cm、器高4.2cm）、Ⅱ類（口径11.2cm、器高4.0cm）、Ⅲ類（口径9.8cm、器高3.7cm）であり、小形化の傾向は明らかである。また、底部の回転ヘラ削りはⅠ類・Ⅱ類において主に行われるが、Ⅲ類になると減少してヘラ切り未調整が用いられる傾向にある。

杯蓋　杯蓋は、Ⅰ類からⅣ類まで6分類ができる。その中でも、天井部と口縁部を分ける紐部を有するⅠ類～Ⅳ類と、天井部につまみをもち、縁部内面にかえりを有するⅤ・Ⅵ類とに大別できる。前者は、法量・器形によってⅠ～Ⅳ類に分類し、後者は内面のかえりの突出度に

よってⅣ・Ⅴ類に分類した。さらに、天井部に回転ヘラ削り、あるいは静止ヘラ削りを施すものをa類、ヘラ切り未調整のものをb類とした。

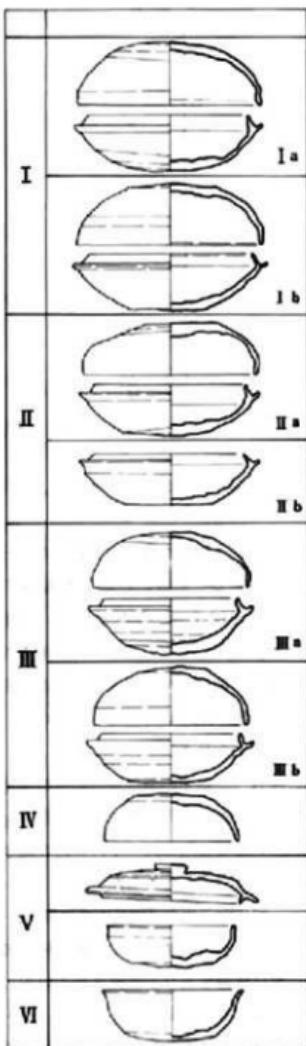
I類の杯蓋は、天井部と口縁部を分ける屈曲部分に不明瞭な凹線をもつ。a類は天井部が丸く、b類はやや平坦に近い。法量はa類が口径13.2~14.0cm、器高4.1~4.6cm、b類が口径13.5~13.9cm、器高3.8~4.5cm、出土個数はI a類5点、I b類2点を数える。

II類の杯蓋は、I類に比べ器形は小さくなり、天井部と口縁部との屈曲部分がさらに不明瞭になっている。II a類の杯蓋はヘラ削りの範囲がI a類に比べ狭くなる。法量は口径12.7cm、器高3.5~3.7cm、出土個数はII a類のみ2点である。

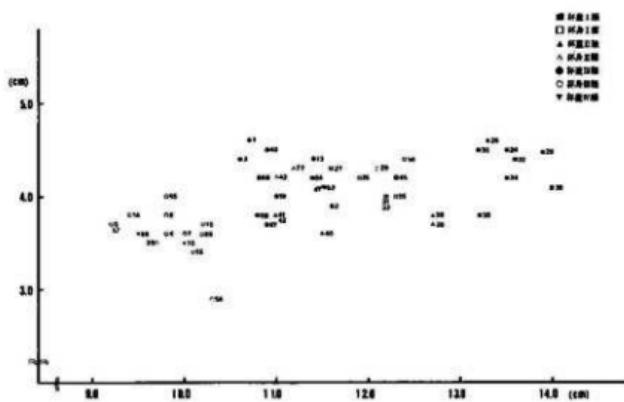
III類の杯蓋は、II類に比べさらに小形化し、口縁部と天井部とを分ける凹線や横線がなく、器形からでは杯身か杯蓋なのか判断に苦しむところである。しかしこれをIII類の杯蓋とした理由は、III類の杯身18と杯蓋17の一対が沢の浦1号墳の石室奥壁に接し原位置を保った状態で出土したことや、また同墳出土のIII類の杯身・杯蓋の個数がほぼ同数であることによる。法量はa類が口径10.9~11.6cm、器高3.7~4.2cm、b類が口径10.6~11.4cm、器高4.0~4.6cm、出土個数はIII a類4点、III b類4点を数える。

IV類の杯蓋は、III類よりもさらに器形が小形となり、天井部がやや平坦である。法量は口径9.5~10.0cm、器高3.5~3.6cm、出土個数はIV b類のみ2点である。

V類は、偏平なつまみとかえりが口縁部よりも下に突き出るものである。天井部の調整は粗くヘラ削りを施す。



第36図 潟原器杯身・杯蓋分類図



第37図 須恵器杯身・杯蓋法量分布図

VI類は、宝珠つまみを有し、天井部にはヘラ削りを施すものである。器形から壺類の蓋と考えられる。

またI類～IV類までの杯蓋の変化は、口縁部と天井部との屈曲部分の退化減少と小形化があげられる。杯蓋の口径と器高の平均値を示すと、I類（口径13.5cm、器高4.3cm）、II類（口径12.7cm、器高3.8cm）、III類（口径11.0cm、器高4.1cm）、IV類（口径10.8cm、器高3.6cm）を測り、小形化は明らかである。

椀 楓は、やや平坦な底部から直立するI類と、丸い底部から内凹してたちあがるII類がある。楓II類には対応する蓋がなく、口径、焼成等の特徴から楓I類に杯蓋V類が対応するものと考えられる。

年代 以上の須恵器各類の所属時期については、本文中で詳述したように、石室内における出土状況からその相対的な年代差を明らかにすることはできない。そのため、すでに発表されている田辺昭三氏・中村浩氏の編年と比較して、各類の相対的前後関係あるいは絶対年代を以下により明らかにしたい。

田辺昭三氏の『陶邑古窯跡群Ⅰ』の編年によると、TK43型式からTK209型式まで、「蓋・杯は矮小化の傾向をたどり、杯底部は偏平になり、たちあがりは短く、ますます内傾化する。蓋は稜線を失う」と記されている。陶邑における蓋杯の小形化の傾向は沢の浦古墳群出土の須恵器においても言えることで、I・II類は陶邑のII期の後半に所属するものであろう。さらに杯身における受部が水平、またはやや上向きに外方へのびる状態や、杯蓋の天井部と口縁部との境界がなくなりつつあることからTK209型式に属するものであろう。

そして、中村浩氏の編年における「回転鎧切り調整」は、陶邑においてはII型式5段階において出現し、蓋杯の天井部と口縁部との間にあった後が全くその痕跡を残さずに消えるのはII型式4段階の特徴としてあげられている。I・II類は杯身・杯蓋の小形化が進む中、まだ器形に須恵器の本來的な形を残している点、そして杯身の底部、杯蓋の天井部のヘラ切り未調整という調整技法から判断してII型式5段階に位置するものと考えられる。

III類は、器形の著しい小形化、杯蓋の天井部が丸みをもつこと、ヘラ切り未調整等の点からII型式6段階に位置づけられる。

V・VI類について、田辺氏の編年によると、III期の宝珠つまみ付蓋の初現に代表される須恵器の形態と組み合わせがもっとも大きく変化した時期に相当する。その大きな変化は杯蓋には宝珠つまみと口縁部の内側にかえりがつく、いわゆる杯と蓋とが逆になった器形が一般化するものであり、VI類に分類した杯蓋はその好例である。特に口縁部内面のかえりが、口縁端部よりも下方へ突出する点からTK217型式の範疇に位置するものであろう。

また、V・VI類は、中村氏の編年ではII型式1段階に相当する。

I・II・III類は、田辺氏の編年によるとTK209型式内に編年されるものと考えられる。その中でもTK209型式の初期ではなく若干遅るものと考えられ、中村氏のII型式5段階の範疇で把えられるものであろう。絶対年代で示すと6世紀末～7世紀初頭に求められる。

(参考文献) 田辺昭三『須恵器大成』1981

中村 浩『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯 1978

3. 古墳群の時期

前項では、從米の陶邑古窯跡群における編年研究の成果を念頭に置いて、沢の浦古墳群出土の須恵器杯身・杯蓋をそれぞれⅠ～Ⅵ類に分類した。杯身と杯蓋のセット関係はⅠ・Ⅱ・Ⅲ類しか明確でないが、時期についてはおむね6世紀末～7世紀中頃までと考えることができる。

本古墳群からは、杯身・杯蓋以外にも須恵器提瓶・平瓶・瓶・高杯等、多くの器種が出土しており、その器種構成が示す年代観は杯身・杯蓋のそれとはほぼ一致していると考えられる。また、2号墳から出土した土師器碗107(第26図)については、調整技法や法量、あるいは径高指數が40を測る深い器形からみて、飛鳥・藤原宮跡における時期区分第1期の杯^ⅣCに相当し、7世紀初頭に位置付けることができる。このことは他の遺物が示す時期と矛盾していない。

以上を基に、ここでは本古墳群の築造時期あるいは各埋葬面の時期について述べてみたい。

1号墳から出土した須恵器杯身・杯蓋のうち、分類可能なものはすべてⅢ類に属する。Ⅲ類は田辺編年によるTK 209型式の新しい段階あるいはTK 217型式の古い段階に相当すると考えられるが、腰が残存していること等、古い様相も呈している。したがって、1号墳は7世紀初頭～前半にかけて築造され、きわめて短期間のうちに埋葬が終了したと考えられる。

2号墳では、石室後半部に合計3面の埋葬面が確認できた。最上位の埋葬面には須恵質の砲弾形胸棺が原位置を保った状態で安置されており、石室内の余剰空間を考慮すると、胸棺が石室後半部における最終埋葬であると判断し得た。胸棺に明確に伴う副葬遺物は確認できなかつたが、胸棺は須恵器杯身Ⅴ・Ⅵ類88・92(第24図)を攪乱した状態で出土した。Ⅴ・Ⅵ類は本墳出土の杯身のうち最も新しい様相をもつものであり、田辺編年によるTK 217型式～TK 46型式に相当すると考えられる。したがって胸棺はそれ自体では所属時期の決め手を欠くが、杯身Ⅴ・Ⅵ類の示す7世紀中頃あるいはそれより若干降った時期を与えることができよう。

また2号墳では最下位埋葬面の副葬遺物を奥壁寄りに片付け(B群)、その上に中位埋葬面を形成していた。B群中からは総数29点の須恵器が出土し(第20・21図)、杯身1類7点・Ⅱ類5点、杯蓋1類8点・Ⅱ類2点・Ⅲ類1点を含む。このうち最古相を呈する1類は、田辺編年によるTK 209型式に相当し6世紀末～7世紀初頭に属するものである。したがってこの時期に本墳は築造され、Ⅲ類までの継続期間中に中位埋葬面が形成されたと考えられる。

中位埋葬面では、大刀の刀身及び刀装具が出土した。しかしこれらは追葬時に原位置を動かされており、最下位埋葬面のものが中位埋葬面に置かれたものか、中位埋葬面のものがさらに後の追葬によって原位置を動かされたものか、判断不可能である。いずれにしても大刀の年代は、上位埋葬面に伴う杯身・杯蓋Ⅴ・Ⅵ類の示す下限である7世紀中頃までに降ることなく、杯身・杯蓋Ⅰ～Ⅲ類の示す6世紀末～7世紀初頭に属するものと考えられよう。

以上、沢の浦古墳群では2号墳が6世紀末～7世紀初頭、1号墳が7世紀初頭～前半に築造され、さらに2号墳では7世紀中頃あるいはそれ以降まで埋葬が行われたと考えられる。

4. 被葬者の性格

ここでは沢の浦古墳群から出土した特徴的な遺物と被葬者の性格について若干触れてみたい。

銀象嵌大刀 2号墳から出土した大刀は、6世紀末～7世紀初頭に属し、刀身の他に柄頭縁金具、鈕、鞘尻金具といった刀装具がある。大刀の柄頭は失われているが、その形式については倒卵形八窓の形式をとる鈕が頭椎大刀によく見られるものであることや、柄頭縁金具が頭椎大刀に特有のものであることから頭椎大刀と判断し得る。柄頭の材質については、大刀全体の装飾からみて金銅製とは考え難く、鉄製あるいは木製を含む植物質製であったろうと推測できるが、そのいずれであるかについては、柄頭縁金具の内側に遺存する木質が柄頭自体であるか木芯であるかを特定し得ないため明らかでない。ただ、石室内埋土をすべてふるいにかけたにもかかわらず鉄製柄頭の残片と思われるような遺物は出土しなかったし、また、柄頭縁金具内側に接着しているのは木質のみであるところからも、木製柄頭であった可能性が高いと考えられる。

鞘尻金具については、小刀用の円頭柄頭であるとの指摘がある。³³しかし本墳からはこれ以外に別の大刀の残片は出土していないし、小刀用の円頭柄頭を鞘尻金具に装着する例が7世紀代に見られることから、本例も鞘尻金具として用いたものと思われる。そのため今回は鞘尻金具として報告した。なお鞘尻金具の内側に遺存する木質から鞘は木製であったことが分かる。

以上の諸点から、本例は木製の柄頭と鞘をもつ頭椎大刀であり、刀身が平造りの頑丈なものであることを合せ、充分実用に耐えるものであると言えよう。その年代は、從来頭椎大刀が6世紀末から7世紀中葉に盛行するとされていることと矛盾しない。

刀装具に施された銀象嵌文様は、溝文、半円文、羽状文の組み合せであり、銀象嵌文様の退化、簡便化が進んだ6世紀後半から7世紀前半にかけての一般的な様相を呈している。そのうち、鞘尻金具に施された高い山形文と直線文を組み合せた羽状文は、中部地方以西に分布するとされ、³⁴本墳の周辺地域では金具自体の類品とともに兵庫県日高町掛穪古墳や京都府久美浜町湯舟坂2号墳に類似が見られる。

ところで頭椎大刀をはじめとする装飾大刀あるいは象嵌大刀の確認例は、X線撮影の機会の増加や保存処理技術の進歩に伴って近年増しており、研究も盛んに行われている。その中で、装飾大刀は中央政権が軍事権の象徴として地方豪族に賜与したとする説や、中央政権による地方支配の末端に組み込まれていたことを示すとする説³⁵、大刀の製作には渡来系工人の関与があったとする説³⁶等が有力なようである。新納泉氏は、装飾付大刀を出土する古墳を首長墓型と群集墳型に類型化し、その被葬者の階層をそれぞれ各地域における軍事組織の頂点を占めた地方豪族と上層農民であると考えている。³⁷その見解に従えば、沢の浦2号墳は墳形や規模、埋葬施設等から明らかに後者に属すると言えよう。

沢の浦古墳群が位置する篠山盆地では、丹南町山田に所在する山田2号墳から出土した单鳳

式環頭柄頭がよく知られており、同じ山田古墳群に属する1号墳からも金銅装の装飾大刀が出土している。¹¹最近では丹南町大沢新の庄境1号墳から渦文の銀象嵌を施した鉄の出土がある。¹²これらはいずれも6世紀後半から7世紀前半にかけての横穴式石室をもつ小円墳で、特に庄境1号墳の時期は沢の前2号墳の大刀の年代とはほぼ一致している。注目されるのは、これら装飾大刀を出土する古墳が靠山盆地の中央部ではなく出入口にあたる場所を選地していることである。各古墳周辺の可耕地はさほど広くはないが、山田古墳群は篠山川、庄境1号墳は武庫川がそれぞれ盆地から流れ出す交通、軍事の要衝と言える地点を占めている。この点は、兵庫県下で最近装飾大刀が確認された三田市高川古墳群や龍野市中井古墳群、日高町鶴壁古墳等にも共通して見られる現象で、装飾大刀を所有した被葬者達の性格と強く関連した特徴と言えよう。

砲弾形陶棺 2号墳の最終埋葬面には須恵質の砲弾形陶棺が安置されていた。棺内からは成人骨が検出されたが陶棺に伴う副葬遺物はなく、時期は埋葬面との関係からおおむね7世紀中頃ないしそれ以降とすることができた。したがって陶棺は本墳の主たる埋葬ではなく、石室開削後の再利用である可能性も残されている。陶棺の身は口縁部直下に鉗をめぐらした羽釜形土器の大形品で、蓋には鉢形土器を使用しており、ともに棺専用に焼かれたものである。本例の産地については、周辺地域で当該時期の須恵器窯跡が確認されていないこともあり、三辻利一氏に依頼し胎土分析を行っていただいた（本書付載2）が、丹波から陶邑古窯跡群までを含む地域の中で産地を特定できなかった。しかし類似例は近畿地方に散発的に見られ、同形態のものが滋賀県守山市寺山古墳や同県竜谷にある。また最近では陶邑古窯跡群原山古墓群4号墓で類似形態のものが出土しており、陶器千塚29号墳でも似たものが埋葬用に用いられている。いずれにしても、本例が近畿地方との強い結びつきを示す資料である可能性は高いと言えよう。

山田良三氏は、近畿地方における網長丸底甕を用いた合口甕棺墓の例を挙げ、古墳終末期の古墳系にも火葬墓系にも属しない渡来系の庶民的埋葬墓で、成人骨の改葬あるいは小児埋葬であるとし、さらに古墳出土例は築造時期より新しく、古墳との直接関係は薄いと述べている。本例は、成人骨の専用棺である点や渡来系埋葬墓とする点は別として、出土状態、所属時期とも基本的に山田氏の見解と矛盾しない。

周辺の古墳群 沢の浦古墳群は、宮田川支流の小坂川に沿った最大幅約0.4km、奥行約1.3kmの小さな谷の西側入口部分に位置する。本古墳群から谷奥に向かう山裾には、箱塚古墳群、東山古墳、四王寺谷古墳群、小坂古墳群等が点在している。これらは、発掘調査が行われたものが少なく詳細不明であるが、その多くは無袖型横穴式石室をもつ小円墳2～3基で形成されており、沢の浦古墳群との石室形態の類似からみてほぼ同時期の古墳群である。箱塚古墳群については5基の円墳で構成されていたが、うち1基が既に消滅しており、残る4基のうち3・4・5号墳の発掘調査を兵庫県教育委員会が実施した。¹³調査の結果、3号墳は無袖型横穴式石室をもつ直徑約10mの円墳で6世紀末～7世紀初頭、4号墳は両袖型横穴式石室

をもつ直徑約20mの円墳で6世紀後半～7世紀初頭、5号墳は無袖型横穴式石室をもつ直徑約10mの円墳で6世紀末～7世紀前半に属することが判明した。特に4号墳は規模も大きく、2重の埴輪列をもち、装飾付脚付子持壺や多数の玉類を出土するなど、突出した内容を有する。

これらの古墳群は、同じ谷筋に200～300mおきに築造されている。これらを大きく1つの古墳群と見え、各古墳群をそれぞれ支群とみることも可能である。その中では、箱塚古墳群が基數、規模とも最大で、特に同4号墳は最も築造時期が古く、その被葬者は各古墳群のまとまりの中で最大勢力を誇ったと推定される。しかし、沢の浦2号墳が築かれる6世紀末～7世紀初頭には箱塚3・5号墳が築造されるものの、箱塚4号墳の埋葬は終息に向かっていたと考えられる。沢の浦2号墳の被葬者は同時期においては、装飾大刀を所有していることからみて、他の古墳群より後位に立っていたと推定できよう。

また、この谷筋で沢の浦古墳群に先行する時期の古墳群は、本古墳群背後の尾根上に5世紀前半の上板井古墳群²²が存在し、また本古墳群から谷を隔てた低い尾根上に木棺直葬墳数基からなる乗竹古墳群が確認されている。これらを含む小地域的なまとまりの中で、6世紀後半以降の古墳群に前代から連続する存地的な要素を認めるか、あるいは断絶するものとして新興勢力の進出によるものと見なすかは、沢の浦2号墳の装飾大刀を有する被葬者の性格とも関わる重要な命題であるが、ここでは明確な解答を提出し得ず、今後の検討にゆだねたい。

河内多々奴比神社 本古墳群の被葬者の性格を考える上で注目されるのは、本古墳群の南約700mの西紀町下板井に位置する河内多々奴比神社である。同神社は、宮田川流域平野に面した東向き山麓に鎮座しており、從来、延喜式神名帳の式内社多紀郡九座の一つであるとされてきた²³。さらに同神社は、軍事、祭祀を職掌とする古代氏族権威氏と関連すると見なされている。

しかし、ここで注意しなければならないのは、下板井にあるこの神社が、はたして延喜式内社の「河内多々奴比神社」であるかということである。18世紀後半に福知山藩士吉山茂正・正路父子と篠山藩士永戸半兵衛貞著によって書かれた地誌『丹波志』は、それまで多紀郡中に所在不明であった河内多々奴比神社を下板井の当神社に比定する説を初めて打ち出した。その根拠は、当地域を『倭名類聚録』の河内郷に、丹南町大山地城を神田郷に比定し、かつ延喜式内社の神田神社を大山上に鎮座する現在の神田神社に比定する見解の中で、所在不明の河内多々奴比神社について疑問を残しながらも下板井の神社としたのである。

現在の西紀町が、南・北両河内村と本郷村の合併によって成立する以前は、たしかに当地域は南河内村に属していたのであるが、下板井にある当神社を式内社の河内多々奴比神社とするのは『丹波志』以来であって、『丹波志』が以後に強い影響を及ぼしたと考えられる。

しかしこれは大山高平氏は『大山村史』において丹南町大山地城を神田郷に、そして現在大山上にある神田神社を式内社の神田神社にあてる『丹波志』の説を否定し、大山地城を河内郷に比定している。ただ大山氏は河内多々奴比神社の所在については触れていないが、南北両河内が河

内郷に含まれる可能性も示唆しており、また神田郷を大山地域に求める意見も最近提出されているようである。

以上のことから、沢の浦古墳群や現在の河内多々叔比神社を含む当地域が櫛縫氏の強い影響下にあるとするならば、沢の浦2号墳の被葬者を軍事的色彩の強い部民の長と見ることもあながち不可能ではないであろう。ただし、当神社を延喜式内社の河内多々叔比神社とし、かつ櫛縫氏と結び付けることは是非については慎重な姿勢が必要と言える。

しかしこれとも、沢の浦古墳群の被葬者達の性格について、篠山盆地の北西の出入り口にあたる要衝を押さえ、畿内の中央政権と密接な関係をもち、畿内の軍事組織の末端に組み込まれ地方支配の一端を担わされた小規模集団の長クラスと考えることは、誤ったことではないであろう。

- 註1. 奈良國立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告』 1962
註2. 田辺昭三『須恵器大成』 1981
註3. 西山要一『古墳時代の象底』『考古学雑誌』第72巻第1号 1986
註4. 洞沢光・馬自順一『頭椎大刀試論』『福島考古』18号 1977
註5. 西山要一前掲書
註6. 西山要一前掲書
註7. 奥村清一郎・新納 泉他『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会 1983
註8. 町田 章『環濠の系譜』『研究論集III』奈良國立文化財研究所学報第28冊 1976
新谷武夫「環状構造研究序説」『考古論集—慶祝松崎壽和先生六十歳記念論文集』1977
註9. 町田 章前掲書
註10. 西山要一前掲書
註11. 新納 泉『装飾竹大刀と古墳時代後期の兵制』『考古学研究』119 1983
註12. 横本誠一他『日本の古代遺跡2 兵庫北部』 1982
註13. 渡辺 畏・別府洋二他『庄撫1号墳』兵庫県教育委員会 1987
註14. 1986年兵庫県教育委員会が発掘調査を実施
註15. 井守徳男・渡辺 畏他『中井古墳群・中井鶴池墓跡』兵庫県教育委員会 1987
註16. 梅原未治『近江国野州郡守山町立古墳調査報告』『考古学雑誌』第7巻第11号
註17. 烏田貞彦『近江国東太郡安養寺発見の筒形上器』『考古学雑誌』第14巻第12号
註18. 中村 浩他『陶邑川』大阪府文化財調査報告書第29号 大阪文化財センター 1977
註19. 白神典之他『四ヶ池遺跡・陶器千家29号墳』界市教育委員会 1984
註20. 山田良三『土師器合口壺棺墓について』『櫻原考古学研究所論集』第四 1979
註21. 文化庁文化財保護局『全国遺跡地図』28 兵庫県 1982
註22. 『裕保古墳群現地説明会資料』兵庫県教育委員会 1985
註23. 町田正男・市橋重喜他『上板井古墳群』兵庫県教育委員会 1986
註24. 『兵庫県神社誌』上巻 兵庫県神職会 1987
註25. 真木孝次郎「大和政権の進出」『兵庫県史』第1巻367頁 兵庫県史編集専門委員会 1974
太田 穂『姓氏家系大辞典』第2巻3532頁 1963
志賀 隆『式内社の研究』第4巻70・71頁 1981
註26. 永戸半兵衛著『丹波志』上 杉本清一編26~28頁 1973
註27. 大山喬平『律令制の大山』宮川 満編『大山村史』本文編53~59頁 1964
註28. 大山喬平他『丹波国人山莊現況調査報告1~III』 西紀・丹南町教育委員会 1985~1987

第4章付載1.は
公開していません

付載 2. 沢の浦 2 号墳出土須恵器の胎土分析

奈良教育大学 三辻 利一

6世紀後半と推定される沢の浦 2 号墳出土須恵器の胎土分析により、産地を推定した結果について報告する。分析結果は同時期に採集していたとみられる沢の浦 2 号墳周辺の窯、あるいは、兵庫県内の他の窯から出土した須恵器胎土に対応させた。これは運搬力が非力であった古代社会であることを考慮に入れると、須恵器の需要・供給関係においては近距離優先の原理を導入してもよいと考えたからである。

土器片資料は表面を研磨して灰釉等を除去したのち、試料を均質化するため、100~200メッシュ程度に粉碎した。粉末試料は約15トンの圧力を加えてプレスし、直径20mm、厚さ3mmの鋸剝に成形して蛍光X線分析用試料とした。エネルギー分散型蛍光X線分析法でK、Ca、Fe、Rb、Srの5元素を定量した。標準試料には岩石標準試料 J G - 1 を使用した。分析値は J - 1 による標準化値で表示された。

分析値は表 1 にまとめられている。全分析値をみて Fe 因子に有効な地域差は認められなかつたので、データ解析には使用しなかった。Fe 因子は特定の地域以外は有効因子にならない場

試料番号	土器 No.	器種	分類	K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	45	杯身	I a	0.516	0.183	2.92	0.596	0.354
2	56	*	I b	0.539	0.195	2.84	0.653	0.367
3	47	*	II a	0.440	0.198	2.12	0.440	0.341
4	54	*	III	0.379	0.115	2.05	0.471	0.206
5	82	*	V a	0.610	0.370	2.43	0.710	0.463
6	16	*	V	0.561	0.118	2.96	0.504	0.243
7	30	杯蓋	I a	0.522	0.195	2.76	0.534	0.344
8	24	*	I b	0.556	0.127	1.94	0.613	0.337
9	38	*	II	0.506	0.197	2.61	0.583	0.315
10	68	*	III	0.358	0.173	1.73	0.404	0.350
11	81	筒	I	0.452	0.165	2.78	0.532	0.247
12	49	*	II	0.507	0.249	2.51	0.605	0.396
13	97	広口壺		0.686	0.201	2.61	0.711	0.371
14	98	高杯		0.565	0.120	1.98	0.655	0.274
15	39	杯蓋		0.541	0.164	1.85	0.600	0.343
16	112	陶棺		0.453	0.140	2.28	0.630	0.330

表 1 沢の浦 2 号墳出土須恵器の分析値

合が多い。残る4因子のうち、Rb、Srを両軸にとったRb-Sr分布図がとくになに有効な地域差を示す場合が多い。Rb-Sr分布図を中心にして、K、Ca分布図などの図面上において窯出土須恵器との対応を試みた結果から説明する。

はじめに、沢の浦2号墳出土須恵器と同じ兵庫県下の丸山窯、鬼神谷窯、中井鴨池窯、鶴谷池窯の須恵器と対比してみた。図1にはRb-Sr分布図を示す。この図には丸山窯出土須恵器の分析データに基いて丸山領域をとてある。そうすると、丸山領域の端に分布するものが2～3点あるが、沢の浦2号墳の須恵器の大半は丸山領域外に分布し、丸山窯は有力な産地ではないことがわかる。また、図1には鴨谷池窯の須恵器もプロットとしてあるが、Rb、Sr量ともやや少なく、沢の浦2号墳の大半のものは対応しない。したがって、鴨谷池窯も产地として不適格である。図2にはK因子を対比してある。鬼神谷窯の須恵器にはK量が多いのが特徴である。沢の浦2号墳の須恵器の中で鬼神谷窯に対応するものは1点もなく、鬼神谷窯も产地としては不適当で

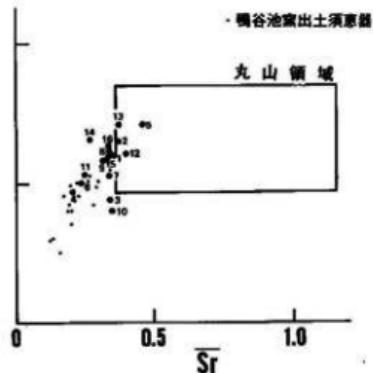


図1 沢の浦2号墳出土須恵器のRb-Sr分布図

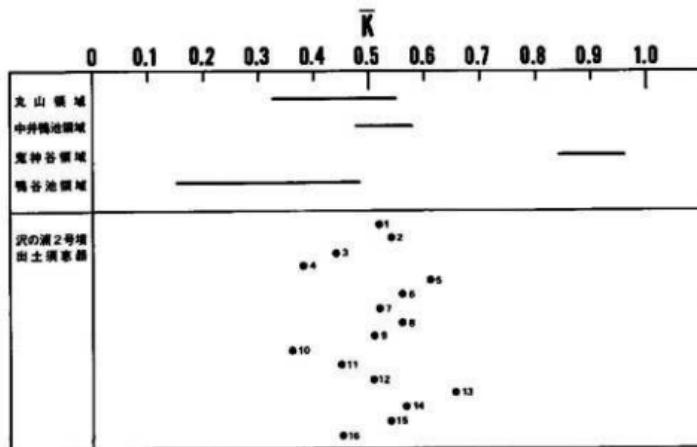


図2 沢の浦2号墳出土須恵器のK量

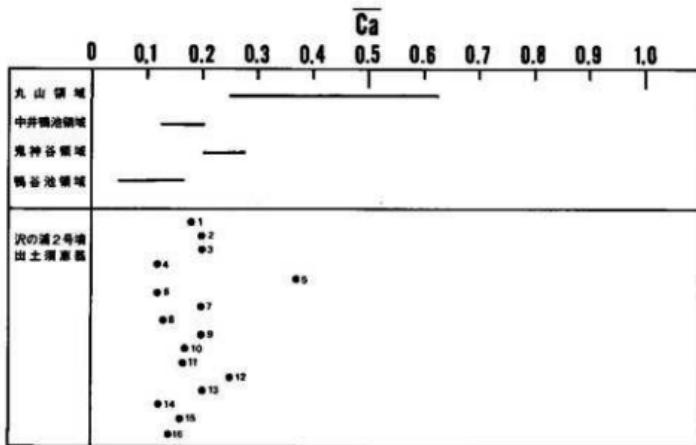


図3 沢の浦2号墳出土須恵器のCa量

ある。図3にはCa因子を対比してある。図1～3をみて、中井鶴池窯の須恵器のみが、どの因子でも対応する可能性をもつ。しかし、考古学側からみた場合、沢の浦2号墳出土須恵器の産地として、中井鶴池窯は時期的に少しずれるようであり、この窯も有力な産地とはなり得ない。

そこで、時期的にも沢の浦2号墳に対応するばかりか、距離的にも近い、水上郡市島町の南1号窯と三田市の青野ダム周辺にある窯群の須恵器との対比を試みた。

図4には南1号窯の須恵器のRb-Sr分布図を示す。これらの点を全部包含するようにして南領域をとった。図5にはAW-67、AK-80、AE-86、AN-88-1、AN-88-2、AN-91(1)、AN-91(2)、AK-119(1)、AE-124(1)、AE-124(2)などの青野ダム周辺の窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図を示してある。また、これらを殆んど包含するようにして三田領域をとった。そうすると、南領域は三田領域内にすっぽりと入ってしまうことがわかる。つまり、Rb-Sr分布図ではこれらの窯の須恵器は見分けがつかないことを示す。図6、7にはそれぞれ、K、Ca因子を対比してあるが、結局、南1号窯、青野ダム周辺の窯群出土須恵器は全く同質の胎土をもち、胎土分析では相互識別不可能であることがわかった。そこで、これらを一括して三田領域とし、沢の浦2号墳出土須恵器を対比させることにした。図8には沢の浦2号墳出土須恵器をRb-Sr分布図上で三田領域に対比してある。No.5、10を除く他のすべての点は三田領域内に分布した。図6のK因子でも全ての点は三田領域に対応した。しかし、図7のCa因

子ではNo.4、6、8、14以外は三田領域の境界付近に分布し、三田窯跡群産ではない可能性もあることを示した。この場合、前述したように、兵庫県内の他の窯の須恵器には対応しないことがわかっているので、5～6世紀代における近畿地方の須恵器生産の中心地である大阪陶邑群須恵器と対比した。ところが、三田産と大阪陶邑群の須恵器胎土は似ているので、定性的な作団法よりも、定量的な判別分析法を適用した方がよい。

そこで、まず、判別分析による大阪陶邑群と三田群の須恵器の相互識別から説明する。

両群のすべての試料について、三田群および大阪陶邑群の重心からのマハラノビスの汎距離

(D_m 、 $D_{m'}$) を計算し $D_m - D_{m'}$ 分布図を作成したのが図9である。三田群の須恵器は、当然、三田群の重心からの距離(D_m) が近く、大阪陶邑群の重心からの距離($D_{m'}$) が遠い領域に分布する。図面上では境界線を挟んで右下側に分布し、逆に、大阪陶邑群の須恵器は左上側に分布する。しかし、両群の須恵器胎土は類似しているので、境界線を越えて相手側の領域に分布するものが何点かみられる。つまり、三田群の須恵器でも大阪陶邑産と誤判別したり、逆に、大阪陶邑群の須恵器でも二田産と誤判別する確率があることを示す。しかし、三田群に帰属する条件は $D_m < 10$ 、また、大阪陶邑群に帰属する条件は $D_{m'} < 10$ としてよいこともわかる。 $D^2 < 10$ という条件はどこ窯跡出土須恵器についても成り立つ経験的帰属条件である。この条件は仮説検定の考え方についたがって検定を行うと、5%の危険率で帰属するという条件を十分満たしている。むしろ、5%危険率で帰属させる場合に比べて、 $D^2 < 10$ という帰属条件は厳し過ぎる帰属条件とも云える。このようなことから、筆者は $D^2 < 10$ という経験的帰属条件を須恵器の产地推定の場合に適用することにしている。このような考え方で、沢の浦2号墳出土須恵器の产地を推定した結果を図10に示してある。三田領域に帰属したのはNo.4、8、14の3点で

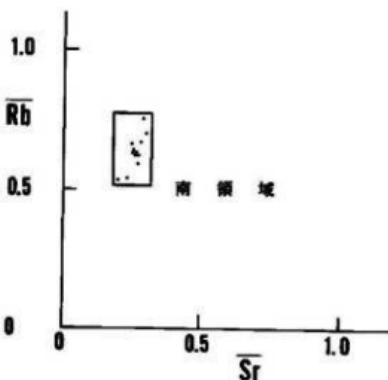


図4 南1号窯出土須恵器のRb-Sr分布図

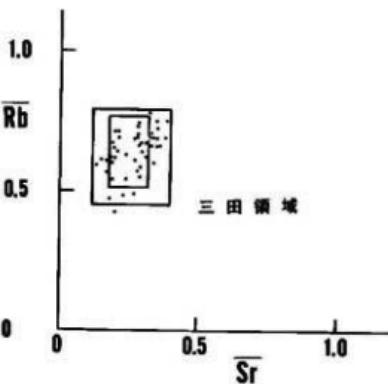


図5 三田窯跡群出土須恵器のRb-Sr分布図

あり、大阪陶邑群に帰属したのはNo. 1、3、6、7、9、12の6点であった。No. 2、10、11、15の4点は境界線近傍に分布し、2群のどちらかに帰属させることは困難であった。また、No.13は距離からいと三田群に近いが、 $D \sqrt{A} < 10$ を満足しなかったので産地推定する

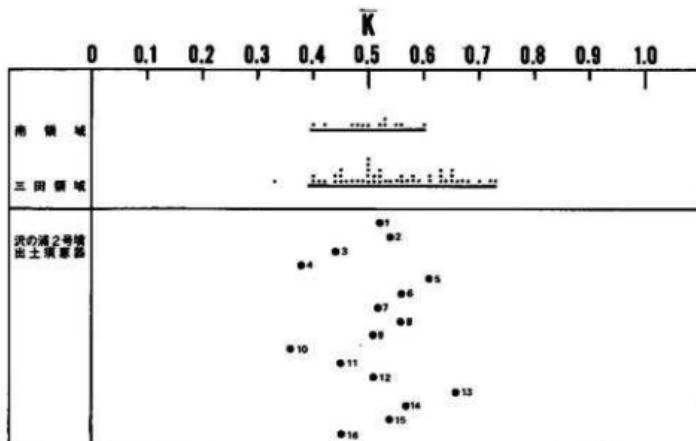


図6 沢の浦2号墳出土須恵器のK量

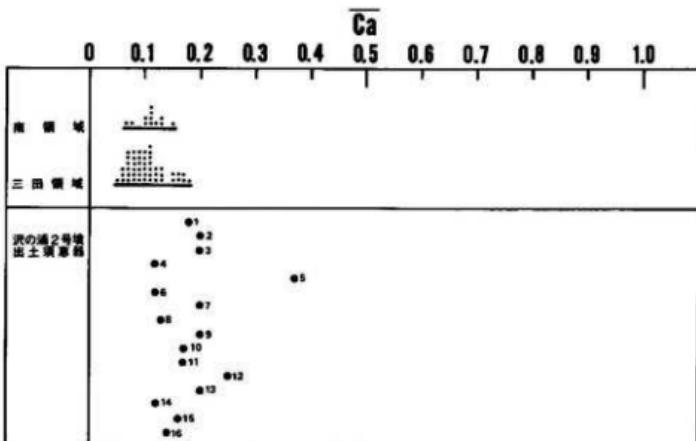


図7 沢の浦2号墳出土須恵器のCa量

ことを保留した。No. 5 のみは三田群、大阪陶邑群の両母集団からかなり離れており、どちらにも帰属しない須恵器とみられる。このことは図 8 の Rb—Sr 分布図や図 7 の Ca 分布図からも理解されよう。

以上のように、予想に反して、沢の浦 2 号墳の 15 点の須恵器は地元、三田窯産よりも大阪陶邑群に帰属するものの方が多いと推定された。ただ、この両群の須恵器胎土の化学特性は類似しており、相互に誤判別の可能性がある程度あることがわかっているので、上記の結果をそのまま裏呑みするのも危険であると思われる。

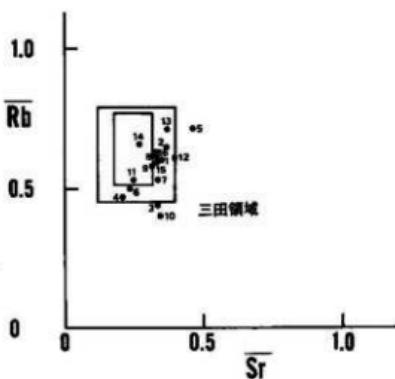


図 8 沢の浦 2 号墳出土須恵器の Rb-Sr 分布図

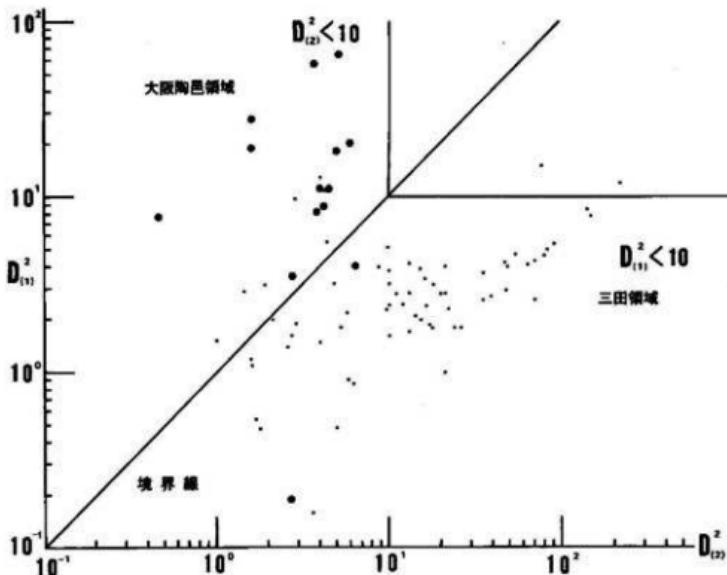


図 9 大阪陶邑と三田窯跡群の須恵器の相互識別

沢の浦2号墳出土須恵器の中には地元、三田周辺の窯で生産された須恵器と、大阪陶邑産の可能性のある須恵器が混在していたことを結論としておく。

なお、陶棺は全因子で三田窯跡群の須恵器の胎土に対応した。したがって、地元を優先して地元産の陶棺と推定される。ただし、須恵器と同様三田窯跡群の須恵器胎土は大阪陶邑産の須恵器胎土と類似していることは注意すべきである。図10では、 $D_{(1)}^2 < 10$ 、 $D_{(2)}^2 < 10$ という領域に分布し、地元産か大阪陶邑産かの判断はできなかった。

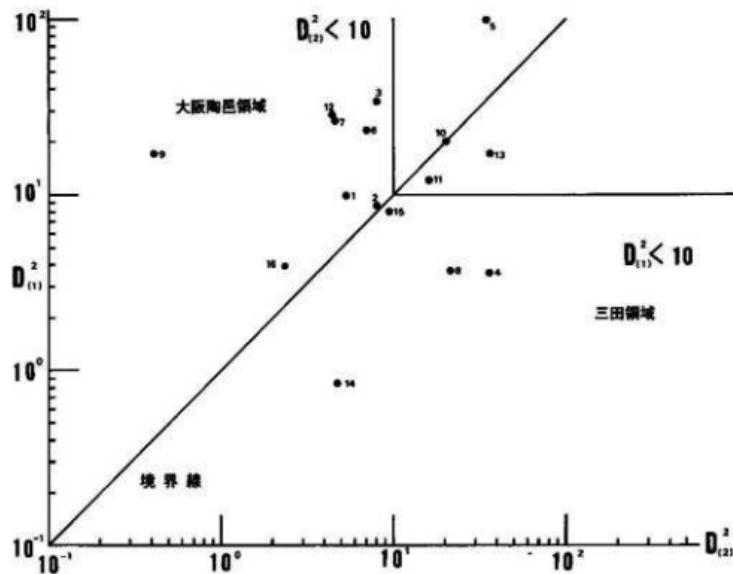


図10 沢の浦2号墳出土須恵器の産地推定

第2表 土器観察表

単位はセンチメートル
法量は上が口径、下が器高
()は、残存・復原長

1号墳

No.	器種	分類	出土地区	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
1	須恵器 杯 盖	III b	石室内 A群	10.7 4.6	天井部やや丸く、口 縁部は下に扭曲する。	天井部外面へラ切り 未調整。	オリーブ 灰色	
2	"	III b	石室内 A群	10.6 4.4	天井部やや丸く、口 縁部は下に扭曲する。	天井部外面へラ切り 未調整。	緑灰色	
3	"	III a	石室内 A群	11.6 3.9	天井部やや平坦で、 口縁部は強く扭曲す る。	天井部外面回転へラ 切り中心部未調整。 天井部内面ナデ。	明青灰色 ~青灰色	口縁部外面 にオリーブ 灰色自然物。
4	"	III a	石室内 A群	9.8 3.6	たちあがりは内傾し、 体部は直線的。底部 は平坦。	体部外面1/2以下回 転へラ削り。内底部 ナデ。	灰白色 ~灰色	
5	"	III b	石室内 A群	9.2 3.7	たちあがりは内傾し、 受部内両気味。体部 直線的で、底部平坦。	外底部へラ切り未調 整。	緑灰色 ~明青灰色	体部外面に 増綠灰色自 然物。
6	"	III b	石室内 A群	9.8 3.8	たちあがりは頗く内 傾。受部内両気味。 体部直線的、底部平 坦。	外底部へラ切り未調 整。 内底部ナデ。	灰白色	外全体に オリーブ灰 色自然物。
7	"	III b	石室内 A群	10.0 3.6	たちあがりは内傾し、 受部内両気味。体部 直線的、底部丸い。	外底部へラ切り未調 整。 内底部ナデ。	灰白色	施皮若干不 良。
8	"	III b	石室内 A群	10.5 ~11.0 4.2	たちあがりは内傾し、 受部内両気味。体部 直線的、底部平坦。	外底部へラ切り後、 へラ状工具によるナ デ。 内底部ナデ。	灰白色 ~赤灰色	外面に自然 物。 重ね焼き痕 有。 施皮若干不 良。
9	"	短腹壺	石室内 A群	9.0 5.5	口縁部若干外傾し、 体部丸く、底部平坦。	外底部粗いナデ。 内底部不整ナデ。	灰白色	一部にオリ ーブ灰色自然 物。
10	"	短腹壺	石室内 A群	9.0 5.2	口縁部若干外傾し、 体部丸く、底部平坦。	外底部へラ切り後、 粗いナデ。	灰色	外面に灰 白色自然物。
11	"	短腹壺	石室内 A群	7.7 ~9.9 5.5	口縁部わずかに外傾 し、ひずみ大きい。 体部丸をもち、底 部は平坦。	外底部へラ切り未調 整。	青灰色	外底感に「X」 字へラ記号と重 ね焼き痕有 り。
12	土師器 甕		石室内 A群	9.4 10.4	腹部肥厚し、口縁部 頗く外反。体・底部 丸い。	体部外面ハケメ。 体部内面へラ削り。	淡黄褐色 ~黃褐色	内面に黒斑 有り。
13	須恵器 杯 盖	III b	石室内	11.4 4.4	天井部は平坦で、口 縁部は下方に扭曲す る。	天井部外面へラ切り 未調整。	青灰色 ~明青灰色	口縁部外面 増綠灰色自 然物。14と セット。
14	"	III b	石室内	9.4 3.8	たちあがりは頗く内 傾し、受部は内両気 味。体部直線的、底 部平坦。	外底部へラ切り未調 整。 内底部ナデ。	明青灰色 ~青灰色	受部内面に 灰白色自然 物。14と セット。

No	器種	分類	出土地区	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
15	須恵器 杯身	III a	石室内	10.2 3.7	たちあがりは短く内 傾し、受部は内凹気 味。体部直線的、底 部平坦。	外面部1/2以下回転へ ラ削り。内底部ナデ。	青灰色～ 明青灰色	外面に紫灰 色自然釉。
16	" 杯身	III b	石室内	10.1 3.4	たちあがりは直線的 に内傾し、受部内凹 気味。体部直線的、底 部平坦。	外底部ヘラ切り後、 弱いナデ。内底部ナ デ。	明青灰色 ～青灰色	
17	" 杯身	III b	石室内	9.2 3.7	たちあがりは短く内 傾し、受部は内凹気 味。体部直線的、底 部平坦。	外底部ヘラ切り未調 整。	オリーブ 灰色～淡 黄色	
18	" 短頸壺		石室内	8.5 5.3	口盤部は短く外傾し、 体部丸く、底部平坦。	外底部粗いナデ。 内底部不整ナデ。	灰白色	口盤部外面 銀灰色自然 釉。
19	" 杯蓋	III b	N 区 表土中	11.0 4.0	天井部はば平坦で、 口盤部下方に屈曲す る。	天井部外面はヘラ切 り後ナデ、内面ナデ。	浅黄色～ 青灰色	口盤部3/4 欠。
20	" 杯身	III a	N 区 表土中	9.7 3.5	たちあがりは直線的 に内傾し、受部内凹 気味。体部直線的、底 部平坦。	体部外面1/2回転へ ラ削り。内底部ナデ。	灰白色～ 青灰色	受部に脂オ リーブ灰 色自然釉。
21	" 杯身		N 区 表土中	(10.0) 3.8	たちあがりは短く内 傾し、受部は内凹気 味。体部直線的、底 部平坦。	外底部ヘラ切り未調 整。内底部不整ナデ。	浅黄色	1/4残。
22	" 杯身		N 区 表土中	(9.6) (3.8)	たちあがりは短く内 傾し、受部は内凹気 味。体部直線的、底 部平坦。	外底部ヘラ削り。 内底部不整ナデ。	浅黄色	1/10残。
23	" 壺		N 区 表土中	(12.3) (14.3)	頸部は外凸気味にの び、口盤部は外傾。 頸部に2条、体部に 1条沈縫。	頸部内面に絞り目。 体部外面2/3以下回 転ヘラ削り。	暗青灰色	口頸部に浅 黄色自然釉。 1/3残。

2号墳

24	須恵器 杯蓋	I b	石室内 B群	13.5 4.5	天井部、体部や丸 味もつ。	天井部外面ヘラ切り 未調整。内底部ナデ。	灰白色	25とセット。
25	" 杯身	I b	石室内 B群	11.9 4.2	たちあがりは直線的 に内傾し、頸部は鋸 い。体部丸味をもつ る。	外底部ヘラ切り未調 整。内底部ナデ。	灰白色	24とセット。 焼成やや不 良。
26	" 杯蓋	I a	石室内 B群	13.3 4.6	天井部、体部丸味を もつ。	天井部外面回転ヘラ 削り。	橙色～淡 黄色	27とセット。 焼成不良。
27	" 杯身	I a	石室内 B群	11.6 4.3	たちあがりは内傾し、 底部鋸い。受部近く のび、底部丸味をも つ。	外底部回転ヘラ削り。 内底部ナデ。	橙色～淡 黄褐色	28とセット。 焼成不良。
28	" 杯蓋	I b	石室内 B群	13.9 4.5	天井部はば平坦。 体部丸味をもつ。	天井部外面ヘラ切り 未調整。内底部ナデ。	灰白色	29とセット。 焼成やや不 良。

No	器種	分類	出土地区	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
29	須恵器 杯身	I b	石室内 B群	12.1 4.3	たちあがりは内傾し、 端部鋸い。受部近く、 体部直線的、底部平 坦。	外底部へラ切り後ナ デ。内底部ナデ。	明褐色 ～緑灰色	28とセット。
30	“ 杯蓋	I a	石室内 B群	13.2 4.5	天井部・体部丸味を もつ。口縁部は下に 屈曲する。	天井部外周回転ヘラ 削り。	褐色～深 黄褐色	31とセット。 焼成やや不 良。
31	“ 杯身	I a	石室内 B群	12.2 4.0	たちあがり短く外傾 し、端部鋸い。受部 内角丸味。体・底部 丸味をもつ。	外底部回転ヘラ削り。	褐色	30とセット。 焼成やや不 良。 受部1/5欠。
32	“ 杯蓋	I a	石室内 B群	13.6 4.4	天井部丸味をもつ。 口縁部は下に屈曲す る。	天井部外周回転ヘラ 削り。内底部ナデ。	灰白色	33とセット。 焼成やや不 良。
33	“ 杯身	I a	石室内 B群	12.2 4.0	たちあがりは内傾し、 端部鋸い。受部内角 丸味。体・底部丸味 をもつ。	外底部回転ヘラ削り。 内底部ナデ。	灰白色～明 顯灰色	32とセット。
34	“ 杯蓋	I a	石室内 B群	13.5 4.2	天井部丸味をもつ。 口縁部は下に屈曲す る。	天井部外周回転ヘラ 削り。	灰白色	35とセット。 胎土に砂粒多。
35	“ 杯身	I a	石室内 B群	12.3 4.0	たちあがりは内傾し、 端部鋸い。受部内角 丸味。体・底部丸味 をもつ。	外底部回転ヘラ削り。 内底部ナデ。	灰白色	34とセット。 焼成やや不 良。
36	“ 杯蓋	II a	石室内 B群	12.7 3.7	天井部は平坦。体部 丸味をもち、口縁部 わずかに内傾する。	天井部外周回転ヘラ 削り。	青灰色～灰 色	「X」字ヘ ラ記号。
37	“ 杯蓋	I b	石室内 B群	13.2 3.8	天井部は平坦。	天井部外周ヘラ切り 未調整。内底部ナデ。	灰白色	
38	“ 杯蓋	II a	石室内 B群	12.7 3.8	天井部丸味をもち、 口縁部は下方に屈曲 する。口縁部ひずむ。	天井部外周回転ヘラ 削り。	青灰色	外側面オリー ブ灰色自然 物。「X」 字ヘラ記号。
39	“ 杯蓋	I a	石室内 B群	14.0 4.1	天井部平坦。体部丸 味をもち、口縁部は 下方に屈曲する。	天井部外周静止ヘラ 削り。	灰白色～灰 色	焼成不良。 口縁部1/8 欠。
40	“ 杯蓋	III b	石室内 B群	10.9 4.5	天井部は平坦。体部 丸く、口縁部下方に 屈曲。	天井部外周ヘラ切り 未調整。内底部ナデ。	灰白色	41とセット。 焼成やや不 良。
41	“ 杯身	II a	石室内 B群	11.0 3.8	たちあがりは内傾し、 端部やや鋸い。受部 内角丸味。体・底部 丸味。	体部外周受部以下回 転ヘラ削り。	暗褐色 ～灰白色	外側一部オリー ブ灰色自然 物。
42	“ 杯身	II b	石室内 B群	11.0 3.8	たちあがりは内傾し、 端部鋸い。受部は内 角。体部は直線的、 底部は平坦。	外底部ヘラ切り後ナ デ。内底部ナデ。	青灰色	
43	“ 杯身	II a	石室内 B群	11.0 4.2	たちあがりは内傾し、 端部鋸い。受部は内 角。体部は直線的、 底部は平坦。	外側体部1/4以下回 転ヘラ削り。	青灰色	

No	器種	分類	出土地区	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
44	直底器 杯身		石室内 B群	12.0 4.1	たちあがりは内傾し、 端部やや鋸い。体部 は直線的。底部は平 坦。	外底部、器面剥離の ため不明。	灰白色	焼成不良。 たちあがり 1/3次。
45	“ 杯身	I a	石室内 B群	12.3 4.2	たちあがりは内傾し、 端部やや鋸い。受部 内有氣味。体・底部 丸い。	体部外面1/2以下回 転ヘラ用り。内底部 ナデ。	橙～褐黃 色	焼成やや不 良。
46	“ 杯身	II b	石室内 B群	11.5 3.6	たちあがりは内傾し、 端部やや鋸い。体部 丸味をもつ。底部は 平坦。	外底部ヘラ切り未調 整。体部外面下半回 転ヘラ用り。	青灰色	
47	“ 杯身	II a	石室内 B群	11.5 4.1	たちあがりは内傾し、 端部やや鋸い。受部 内有氣味。体・底部 丸い。	外底部回転ヘラ削り。 内底部ナデ。	灰白色～ 明青灰色	「X」字ヘ ラ記号。外 青黒色自 然釉。
48	“ 碗	I	石室内 B群	11.5 4.9	体・底部丸味をもつ。 口縁部わずかに内傾。	外底部ヘラ切り未調 整。体部外面回転ヘ ラ削り。	青灰色	
49	“ 碗	II	石室内 B群	10.8 5.1	体・底部丸味をもつ。 口縁部わずかに内傾。	外底部ヘラ切り未調 整。	青灰色	
50	“ 碗	II	石室内 B群	10.9 5.3	体・底部丸味をもつ。 口縁部わずかに内傾。	外底部ヘラ切り未調 整。	青灰色～ 明青灰色	
51	“ 碗	II	石室内 B群	11.6 5.4	体・底部丸味をもつ。 口縁部わずかに内傾。	外底部ヘラ切り未調 整。体部外面1/2回 転ヘラ用り。	青灰色	
52	“ 瓶		石室内 B群	4.3 12.6	口部は外傾し。体 部は丸味をもち、中 位で最大径を有す。 底部平坦。	体部外面カキ目調整。	暗青灰色	
53	“ 杯蓋	III a	石室内 A群	11.5 4.1	天井部・体部丸味を もつ。口縁部やや屈 曲して垂下する。ひ ずむ。	天井部外面回転ヘラ 削り。内底部ナデ。	灰白色	53とセット。 暗オーラー 灰色自然釉。
54	“ 杯身	III b	石室内	10.3 2.9	たちあがりは短く内 傾。受部は内側突起。 体部直線的。底部は ほぼ平坦。ひずむ。	外底部ヘラ切り未調 整。	明青灰色	53とセット。 重ね焼き痕 有。オリーブ 灰色自然釉。
55	“ 杯身	III a	石室內 A群	9.8 4.0	たちあがりは内傾し。 受部は内側氣味。体 部直線的。底部は平 坦。	外底部ヘラ削り。	オリーブ 灰色	内部に暗赤 色の赤色陶 料を含む土 充満。
56	“ 杯身	I b	石室內 A群	12.4 4.4	たちあがりは内傾し。 端部やや鋸い。受部 内有氣味。体部内凹。 底部は平坦。	外底部ヘラ切り未調 整。内底部ナデ。	にじい黄 褐色。	「一」字ヘ ラ記号。燒 成不良。
57	“ 短脚壺		石室內 A群	6.1 6.1	口縁部は直口、兩部 は平坦。体・底部丸 味をもち、体部中位 に最大径。	外底部ヘラ切り後、 弱いナデ。	青灰色	体部外曲に 重ね焼き痕。

No	器種	分類	出土地	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
58	頬思器蓋	V	石室内 A群	10.0 2.7	天井部は低くほぼ平坦。口縁部に段を有し、低いかえりと扁平なつまみをもつ。	天井部外面回転ヘラ削り。	灰白色～暗オリーブ灰色	ひづみ著しい。
59	杯 蓋	V	石室内 A群	8.4 2.8	天井部は低くほぼ平坦。体部は丸味をもち、低いかえりと扁平なつまみを有する。	天井部外面回転ヘラ削り。	灰色	外面に重ね焼き痕。一部青黒色自然斑。
60	杯 蓋	V	石室内 A群	10.3 (2.3)	天井部は低くほぼ平坦。口縁部に段を有し、低いかえりをもつ。つまみ削落。	天井部外面回転ヘラ削り。	にぶい黄褐色～明緑灰色	焼成不良。断面肥厚著しい。
61	“鉢	I	石室内 A群	11.2 5.5	体部は丸く、中位で縁をなし、口縁部をわずかに外反。底部はほぼ平坦。	体部外面下半回転ヘラ削り。	暗青灰色	
62	“鉢	I	石室内 A群	10.7 5.3	体部は丸く、中位で縁をなし、口縁部をわずかに外反。底部はほぼ平坦。	外底部回転ヘラ削り。	明青灰色～灰色	
63	“鉢		石室内 A群	7.9 24.4	口縁部は外傾し、中位で深い沈線2条有す。肩部に1対の円形把手。	体部外面回転ヘラ削り。	にぶい黄褐色～淡黄色	焼成不良。
64	杯 蓋	III b	石付抜 き取り 穴	11.4 4.2	天井部はほぼ平坦。口縁部は下方に弱く屈曲する。	天井部外面ヘラ切り未調整。	青灰色～灰白色	内外面に墨跡有り。体部に指紋有り。
65	杯 身	III b	石室内	10.2 3.6	たちあがりは内傾し、受槽部は内側気味。体部直線的、底部はほぼ平坦。	外底部ヘラ切り未調整。内底部横方向のナデ。	明緑灰色	
66	杯 蓋	III b	石室内	10.9 4.2	天井部や丸味をもち、口縁部は丸く屈曲して若干下方に外反する。	天井部外面ヘラ切り未調整。内底部ナデ。	灰白色	
67	杯 蓋	III a	石室内	10.9 3.7	天井部や丸味をもち、口縁部は下方に屈曲して若干外反する。	天井部外面細かい静止ヘラ削り。	灰白色	
68	杯 蓋	III b	石室内	10.8 3.8	天井部は平底。体部直線的、口縁部は下方に屈曲して若干外反する。	天井部外面ヘラ切り後弱いナデ。	青灰色	少しひびけ、体部外面「」字ヘラ記号。
69	杯 蓋	N	石室内	10.0 3.5	天井部はほぼ平坦。体部丸味をもち、口縁部はほとんど屈曲しない。	天井部外面ヘラ切り未調整。内底部横方向のナデ。	明青灰色	体部外面「」字ヘラ記号。
70	杯 蓋	N	石室内	9.5 3.6	天井部はほぼ平坦。口縁部はわずかに屈曲する。	天井部外面ヘラ切り後弱いナデ。内底部ナデ。	灰白色～明青灰色	
71	杯 蓋	V	石室内	9.5 2.4	天井部はほぼ平坦。口縁部に段を有し、扁平なつまみと低いかえりをもつ。	天井部外面回転ヘラ削り。	灰白色～青灰色	少しひびけ。

No	器種	分類	出土地区	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
72	須恵器 杯	V	石室内	9.8 1.4	天井部は中央部が瘤み、底平なつまみと翫いかえりをもつ。	天井部外表面回転ヘラ削り。	灰色	ひずみ著しい。
73	“	V	石室内	9.6 4.0	天井部はば平坦で、宝珠つまみを有し、翫いかえりをもつ。	天井部外表面回転ヘラ削り。	オリーブ褐色～灰白色	外面に重ね焼き模。オリーブ褐色自然釉。
74	“	I b	石室内		たちあがりは内傾し、受部は短く、体部直線的、底部やや丸味をもつ。	外底部ヘラ切り後、ナデ。	淡黄色	焼成不良。 1/2残。
75	“	I a	石室内	(11.8) 4.5	たちあがりは内傾し、受部は短く、体部直線的、底部はば平坦。	体部外表面下平以下回転ヘラ削り。内底部ナデ。	明黄褐色～暗赤褐色	かえり2/3欠。砂粒多く含。元来赤焼け。 「一」ヘラ記号。
76	“	II b	石室内	(11.8) (4.5)	たちあがりは低く内傾し、受部は短く、体部は直線的。	器面剥離のため不明。	にぶい青褐色	焼成不良。 1/8残。
77	“	II b	石室内 埋土	11.2 4.3	たちあがりは低く内傾し、体部直線的、底部は若干丸味をもつ。	外底部ヘラ切り未調整。内底部ナデ。	灰白色	焼成不良。 内外面に褐色自然釉。
78	“	III b	日区 墓土中	(10.6) (3.4)	たちあがりは低く内傾し、受部内凹気味。体部直線的、底部平坦。	外底部ヘラ切り未調整。体部外表面下平回転ヘラ削り。	灰白色	1/10残。
79	“	II	石室内	11.5 5.2	体・底部丸味をもち、口縁部は屈曲して上方にたらあがる。	外底部回転ヘラ削り。内底部ナデ。	浅黄褐色	磨成著しい。
80	“	I	石室内	10.2 5.0	体・底部若干丸味をもち、体部中位で後をもって屈曲し、口縁部はわずかに外反する。	外底部ヘラ削り。内底部ナデ。	青灰色～灰色	外面一部黒色自然釉。
81	“	I	石室内	10.9 4.6	体・底部若干丸味をもち、体部中位で後をもって屈曲し、口縁部はわずかに外反する。	外底部ヘラ削り。内底部ナデ。	明青灰褐色～灰色	外面一部暗灰色自然釉。
82	“	V a	石室内	9.2 3.0	口縁部は屈曲してわずかに外反し、体・底部やや丸味をもつ。	外底部ヘラ切り後、ナデ。	灰色～青灰色	少しひずむ。
83	“	V a	石室内	9.2 3.5	口縁部は屈曲してわずかに外反し、体・底部やや丸味をもつ。	外底部ヘラ切り後、ナデ。	灰色	少しひずむ。 外面に砂粒多く残る。
84	“	V a	石室内	9.3 3.4	口縁部は屈曲して上方にまっすぐのび、体・底部やや丸味をもつ。	外底部ヘラ切り後、ナデ。	青灰色	少しひずむ。 内面一部暗青灰色自然釉。
85	“	V a	石室内	9.7 3.5	口縁部の屈曲は弱く、底部やや丸味をもつ。	外底部ヘラ切り未調整。	青灰色	少しひずむ。

No	器種	分類	出土地区	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
86	須恵器 杯身	V b	石室内	10.2 3.2	体部丸味をもち、底 部は平坦。	外底部へラ切り未調 整。	明青灰褐色 ～青灰褐色	体部外面 「」字へ リ記号。
87	“ 杯身	V a	石室内	10.3 3.1	口縁部は軽く屈曲し てたもあがり、体部 若干丸味をもち、底 部は平坦。	外底部へラ切り後ナ デ。体部外面照版へラ削 り。	灰色	少しひずむ。
88	“ 杯身	V b	石室内	9.5 2.4	体部丸味をもち、中 位で直上にたらあが り、口縁部若干外反。 底部平坦。	外底部へラ切り後ナ デ。	青灰褐色～ オリーブ 灰色	少しひずむ。
89	“ 杯身	V b	石室内	10.5 3.0	口縁部若干外反し、 体部丸味をもち、底 部平坦。	外底部へラ切り後ナ デ。	黄灰褐色	外底部と体 部内曲に重 ね焼き模 ひすみ。
90	“ 杯身	VI	石室内	10.2 3.8	体部丸味をもって外 傾し、口縁部若干外 反する。底部は平坦。	外底部へラ切り後不 定方向のナデ。 内底部ナデ。	灰白色	微砂粒多く 含む。
91	“ 杯身	VI	石室内	9.9 3.9	体部は丸味をもって 外傾し、口縁部若干 外反する。底部は平 坦。	外底部へラ切り未調 整。体部外面下半の み回転へラ削り。 内底部ナデ。	灰白色	焼成やや不 良。
92	“ 杯身	VI	石室内	9.6 4.0	体部は直線的に外傾 し、底部は平坦。	外底部へラ切り未調 整。	灰白色～ 明青灰褐色	外側一部黃 褐色自然釉。燒 成やや不良。
93	“ 短頸壺		石室内	6.6 4.9	口縁部は粗く内傾し、 底平な体部を有す。 底部はほぼ平坦。	体部外面1/3以下回 転へラ削り。	青灰褐色	砂粒多く含 む。内部に暗赤 色の赤色顔 料。
94	“ 短頸壺		石室内	7.6 6.4	口縁部はまっすぐ外 傾し、体部は丸味をも ち、上位2/3に最 大径を有す。 底部はほぼ平坦。	外底部不定方向の静 止へラ削り。 内底部ナデ。	灰色	
95	“ 壺		石室内	11.0 6.9	口縁部は外傾し壺部 を上方につまみ上げ る。 体部は中位で最大径 を有し、肩部に2条 の沈窓を施す。底部 は丸い。	外底部不定方向の静 止へラ削り。 内底部ナデ。	青灰褐色	1/2残。
96	“ 短頸壺		石室内 埋土	(10.2) (10.1)	口縁部はわざかに外 反し、壺部は直をな す。 肩部が張り、ヘラ捺 波状文と沈窓1条を 施す。	外底部不定方向の静 止へラ削り。 内底部不定ナデ。	灰青色	焼成不良 1/2残。
97	“ 短頸壺		石室内	9.4 13.4	口縁部はやや外傾し、 肩部が張る。 底部は丸味をもつ。	体部外面2/3以下回 転へラ削り。	暗オリーブ 色～灰 白色	一部暗オリーブ 色自然釉。重ね焼き模 有。

No.	器種	分類	出土地区	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
98	須恵器 高杯		石室内	9.5 13.0	口縁部は細く外反し、 杯底部との境に段をもつ。杯底部は丸い。 脚端部を垂直に扭曲。	杯部外面下半回転へ うねり。 脚部カキ目調整。	オリーブ 黒色	全面オリーブ黒色自然 釉。2/3残。
99	" 高杯		石室内	11.4 12.5	口縁部は細く外反し、 杯底部との境に段をもつ。杯底部は丸い。 脚端部を垂直に扭曲。	杯部外面下半回転へ うねり。 脚部カキ目調整。	オリーブ 黒色	全面自然釉。 杯部と脚部 の境に重ね 焼き有。
100	" 脚付 貝殻器		石室内	4.9 11.0	口縁部は長く外傾し、 体部は丸く1/2に膨 大形、3条の沈線間 に繊維状文。高台 部は「ハ」の字形。		灰白色	
101	" 提瓶		石室内	5.0 12.7	口縁部は直線的に外 傾し、中位に沈線1 条有。	体部外面回転へうね り。底部に指壓痕。	灰白色	一部青黒色 自然釉。砂 粒多。
102	" 甕		石室内	8.9 9.0	口縁部は大きく開く。 脚部に2条、体部に 1条の太めの沈線を 施す。	体部外面1/2以下不 定方向の静止へうね り。	灰色	外面オリーブ 灰釉自然 釉。体内に粘土 塊。
103	" 甕		石室内 埋土	(10.8)	頭部は外向しつつ大 きく開き、口縁部で 屈曲。		緑灰色	口縁部のみ 1/8残。
104	" 甕	N 区 表土中		(10.0)	頭部は外向、口縁部 は内側し、端部は斜 上方に肥厚。外面沈 線2条。		オリーブ 灰色	口縁部のみ 1/12残。
105	" 平甕		石室内	6.4 14.0	口縁部は直線的に外 傾し、2条1单位の 沈線2單位施す。底 部平坦。	体部外面下半以下回 転へうねり。	明青灰色	外面一部褐色 自然釉。
106	" 器台	1号 N 区表土 1号 N 区表土		脚径 (23:2)	脚下部は内窪する。 脚端部は内外にわず かに肥厚し、内側す る面をなす。		灰色	脚部のみ 1/6残。外 面青灰色自 然釉。
107	土師器 瓶		石室内	17.2 6.9	体・底部丸味をもち、 口縁部は内側気味に 屈曲してわずかに外 反する。	外面は下半を横方向 へうねり後、全面横 方向へラ磨き。内底 部らせん状暗文。体 部1段の放射状暗文。	淡赤橙色	口縁部2/3 欠。胎土精良。
108	" 甕		石室内 埋土	(11.2)	体部は内窩気味にの び、口縁部は上方を 向く。	体部外面下半へうね り後横方向へラ磨き。 上半横方向へラ磨き。 内底1段放射状暗文。	褐色	底部欠。口 縁部1/5欠。
109	" 甕		石室内 埋土	(10.0) (4.3)	体部は内窩気味にの び、口縁部は上方を 内傾。	外面横方向へラ磨き。 内底1段放射状暗文。	褐色	1/6残。 胎土精良。
110	" 甕		石室内 埋土	(11.2) (4.4)	体部は内窩気味にの び、口縁部は上方を 向く。	外面磨滅のため不明。 内底1段放射状暗文。	褐色	1/2残。 胎土精良。

No	器種	分類	出土地区	法量	形態の特徴	技法の特徴	色調	備考
111	須恵質 陶瓶		石室内	40.0 ~42.5 22.0	天井部丸味をもち口 縁部わずかに内凹す る。	外面平行叩きで、一 部ナデ消す。 内面同心円状の当て 具足。口縁部ヨコナ ド。		完形。 焼成やや軟 質。
112	須恵質 陶瓶身		石室内	33.5 ~33.3 91.9	最大径を胴部中位よ り下部にもち、頸部 でやすぼまる。 口縁部は直口する。 底丸い。	外面細かい平行叩き のち微方向のハケ メ。 内面、口縁部以下同 心円状の当て具足。 口縁部、内外面に方 向のハケメ。	オリーブ 灰褐色	焼成軟質。
113	土器皿		1号埴 石室内 擾乱坑	8.2 1.5	口縁部若干外反し、 底部との境は丸い。 底部はほぼ平坦。	外底部ナデで指頭圧 痕残。内底部は不定 方向のナデ。 口縁部ヨコナド。	淡褐色～ にぶい橙 色	手づくね。 口縁部1/4 欠。
114	* 皿		1号埴 石室内 擾乱坑	8.0 1.4	口縁部若干内弯気味、 底部との境は弱い。 底部はほぼ平坦。	外底部ナデで指頭圧 痕残。内底部は不定 方向のナデ。 口縁部ヨコナド。	淡赤褐色～ にぶい橙 色	手づくね。 2/3残。
115	* 皿		1号埴 擾乱坑	8.5 1.7	口縁部若干内弯気味 で、底部との境は丸 い。 底部やや丸味をもつ。	内外底部ナデ。 口縁部ヨコナド。	にぶい橙 色	手づくね。
116	* 皿		2号埴 日 区 表土中	(11.7) (2.0)	口縁部わずかに外反し、 体部は外傾度が 強い。 底部はほぼ平坦。	口縁部外面に指頭圧 痕残。	にぶい橙 色	手づくね。 砂粒多く含 1/2残。
117	* 皿		1号埴 N 区 表土中	(12.7) (2.3)	口縁部わずかに外反 し、体部は外傾度が 強く、底部との境は 不明瞭。 底部はほぼ平坦。	外面底部ナデ、体部 ヨコナド、口縁部に は指頭圧痕残。 内底部は磨滅で不明。	にぶい橙 色	手づくね。 口縁部1/2 残。
118	* 皿		2号埴 石室内 表土中	(12.8) (2.8)	体部は直線的に外傾 し、底部との境に後 をなす。 底部は丸味をもつ。	外底部から体部にかけてナデで指頭圧痕 残。 内底部ナデ。	にぶい橙 色	1/4残。
119	* 皿		1号埴 石室内 擾乱坑	13.6 3.3	体部は直線的に外傾 し、底部との境に後 をなす。 底部は丸味をもつ。	外底部弱いナデ、指 頭圧痕残。 内底部不定方向のナデ。 口縁部ヨコナド。	浅黄褐色	
120	* 皿		1号埴 N 区 表土中	14.4 (2.9)	体部は内弯気味。	体部外面ナデで、弱 い指頭圧痕残。 口縁部はヨコナド。	褐色～ 浅黄褐色	内面に皮膚 付着。 1/4残。
121	瓦器陶		1号埴 石室内 擾乱坑内	(14.4) 5.7	体部内弯し、口縁部 は弱い後をなす。 断面三角形の低い高 台。	器面磨滅して調整、 縞文不明。 体部外面下半に、指 頭圧痕残。	暗灰色	1/2残。 胎土稍良。
122	土器皿		1号埴 N 区 表土中	底径 (4.8)	体部若干の丸味をも つ。	外底部回転糸切り未 調整。 内底部は不整ナデ。	浅黄褐色	1/2残。 鐵砂粒多く 含む。
123	* 皿		1号埴 表土中	底径 (7.4)	体部若干の丸味をも つ。	外底部回転糸切り未 調整。 内底部は不定方向の ナデ。	浅黄褐色	1/3残。 鐵砂粒多く 含む。

No.	図 種	分類	出土地区	法 量	形 态 の 特 徴	技 法 の 特 徴	色 調	備 考
124	土鰐器 三		1号墳 表土中	(17.0) (4.1) 底径 7.4	体部は内側気味で強く外傾し、口縫はすかに外反する。	外底部回転糸切り未調整。 内底部は不定方向のナデ。 口縫部ヨコナデ。	浅黄褐色	1/2残。
125	白 鰐 鏡		2号墳 N 区 表土中	(15.4)	体部は直線的に強く外傾し、口縫端部は肥厚。	内外面に輪。	輪調浅黄色	胎土ち密。
126	須恵器 こね跡		1号墳 N 区 表土中	(30.4) 11.7 底径 (10.8)	体部は直線的に外傾し、口縫端部を上下に肥厚する。 おそらく片口跡。	外底部回転糸切り未調整。 体部下面下半ナデ。	灰色	口縫部外面に自然輪。
127	丹波燒 甕		1号墳 I-86 埴輪部 表土中	26.4 32.7				
128	須恵器 長縫甕		1号墳 N 区 埴輪部 表土中	(10.5) (23.6)	口縫部は長く外側気味。肩部が張り最大径を有す。 2本の沈縫間に刻文。 底部は平坦。	外底部不定方向の静止ヘラ削り。 内底部ナデ。	青灰色	頸部体部外面に青黑色自然輪。 口縫部1/2欠。
129	須恵器 四耳甕		1号墳 I-86 石室内 表土中	(17.8) 48.5 底径 47.0	口縫部はほぼ直口、端部は内傾する面をなす。 肩部は張り、上1/3に較大径を有する。 2対の耳。	体部外面は幾似格子目印き。 体部内面同心円文當て具痕。底部ナデ消。	灰オリーブ色～暗青灰色	外面一部に黒色自然輪。 口縫部1/2欠。

第3表 鉄錠計測表

単位はセンチメートル
()は現存長

1号錠

No.	分類	形式	全長	頭身長	頭身幅	尾被長	茎長	備考
1	短頭錠	I 柳葉式、丙丸造、重抜、尾被有。	(12.8)	6.4	2.3	2.6	(5.6)	基部に木質痕残存。
2	"	I 柳葉式、平造、重抜、尾被有。	11.9	5.9	(3.0)	3.2	(4.7)	基部に木質痕残存。
3	"	II 柳葉式、丙丸造、重抜、尾被有。	11.1	4.8	2.4	3.4	4.3	基部に木質痕残存。
4	"	II 柳葉式、丙丸造、重抜、尾被有。	11.7	5.0	2.4	3.5	(4.6)	基部に木質痕残存。
5	"	II 柳葉式、丙丸造、重抜、尾被有。	5.9	(3.2)	3.2	2.7	(1.3)	基部に木質痕残存。
6	"	III 三角形式、平或片丸造、重抜、尾被有。	(10.8)	4.6	3.1	2.3	(4.1)	基部に木質痕残存。
7	"	V 三角形式、重抜、尾被有。	12.9	5.1	2.5	2.8	5.1	基部に木質痕、糸巻き痕残存。
8	"	VI 三角形式、丙丸造、広筋、尾被有。	(11.0)	5.1	3.1	2.4	(3.5)	基部に木質痕残存。
9		無尾被有。	(11.9)	-	-	(8.1)	(3.8)	基部に木質痕、糸巻き痕、樹皮残存。先端部を欠く。
10	長頭錠	VI 鎧箭式、片丸造、無尾被有。	(17.5)	2.2	0.8		(3.7)	基部に木質痕残存。
11	"	VI 片刃箭式、重抜なし、尾被有。	(12.6)	(1.9)	0.8		-	基部先端部を欠く。

2号錠

22	短頭錠	I 柳葉式、平造、重抜、尾被有。	(9.0)	5.9	3.0	2.6	(2.2)	基部に木質痕残存。
23	"	II 三角形式、平或丙丸造、広筋、棘尾被有。	(6.8)	(3.7)	2.8	2.3	(0.9)	
24	長頭錠	III 柳葉式、丙丸造、重抜、尾被有。	(12.7)	(3.5)	1.6	6.3	(3.7)	基部に木質痕残存。
25	"	III 柳葉式、平或丙丸造、重抜、尾被有。	(10.8)	3.6	1.8	5.5	(2.5)	基部に木質痕残存。
26	"	III 柳葉式、丙丸造、広筋、重抜。	6.7	2.5	(1.5)	-	(1.4)	基部に糸巻き痕残存。

No	分類	形 式	全長	織身長	織身幅	裏被長	基長	備 考
27	長頸織	III 繩葉式、平板、腹 抉。	(2.8)	(2.8)	1.6	(0.4)	—	
28	〃	棘葉被有。	(6.3)	—	—	(4.2)	(2.1)	基部に木質痕残存。 先端部を欠く。
29	〃	IV 三角形式、両或片 丸造、広絹、腹抉、棘葉 被有。	9.7	2.6	1.4	(5.4)	(1.0)	
30	〃	IV 三角形式、腹抉、 棘葉被有。	(10.8)	(2.2)	1.3	7.2	(1.5)	
31	〃	V 繩筋式、片切刃或 片丸造、棘葉被有。	(12.8)	2.4	1.1	8.7	(1.7)	基部に木質痕残存。
32	〃	V 繩筋式、片切刃造、 棘葉被有。	(8.1)	1.8	0.9	(6.3)	—	
33	〃	棘葉被有。	(6.3)	—	—	(4.2)	(2.1)	基部に木質痕残存。 先端部を欠く。
34	〃	V 繩筋式、片切刃造、 棘葉被有。	(11.7)	(1.1)	(0.8)	(7.8)	(2.8)	基部に木質痕残存。
35	〃	棘葉被有。	(17.5)	(10.3)	—	—	(7.2)	基部に木質痕、糸 巻き痕残存。 先端部を欠く。

第4表 刀子計測表

単位はセンチメートル
()は現存長

1号填

No	分類	全長	刃部長	刃部幅	背厚	柄部長	備考
12	I	(13.6)	7.6	(1.3)	0.2	(6.0)	基部に木質痕残存。
13	I	(12.6)	(7.6)	(1.3)	0.4	(5.0)	基部に木質痕残存。 先端部を欠く。
14	II	(9.8)	5.6	1.4	0.4	(4.2)	基部に木質痕残存。
15		(5.1)	(5.1)	(1.3)	0.1	—	刃部のみ残存。
16		(4.2)	—	1.0		(4.2)	基部のみ残存。
17		(5.7)	—	1.1		(5.9)	基部のみ残存。

2号填

36		(6.2)	(0.5)	1.2	0.3	(6.2)	全面に木質、樹皮痕残存。
37	I	(9.9)	(6.3)	1.2	0.3	3.6	刃部に木質痕残存。

第5表 耳環計測表

単位はセンチメートル

No	長径	短径	断面径	開口部幅	備考
41	3.4	3.1	0.9	0.2	鍍金の痕跡残る。42と対
42	3.3	3.0	0.9	0.2	鍍金の痕跡残る。41と対
43	3.3	3.0	0.9	0.2	44と対
44	3.4	3.0	0.9	0.3	43と対
45	3.1	2.8	0.7	0.2	鍍金の痕跡残る。
46	2.8	2.6	0.7	0.2	鍍金の痕跡残る。



1. 古墳群遠景—東から



2. 古墳群遠景—北から



1. 古墳群全景—南から



2. 古墳群全景—西から



1. 1号墳全景（墳丘遺存状況）—西から



2. 1号墳全景（地山整形）—西から



1. 石室と列石 — 南東から



2. 墓丘土層断面 — 北から



3. 墓丘土層断面 — 南から



1. 石室と掘り方—南から



2. 石室—南から



1. 石室右側壁—南東から



2. 石室左側壁—南西から



1. 石室内遺物出土状況
—南から



2. 同上拡大—東から



1. 石室内遗物出土状况



1. 石室内遗物出土状况



2. 石室内遗物出土状况



2. 石室内遗物出土状况



1. 2号墳全景(埴丘遺存状況)一西から



2. 2号墳全景(地山整形)一西から



1. 石室と墳丘土層断面—南から



2. 地山整形溝土層断面—東から



3. 墳丘土層断面と石室掘り方—東から



1. 石室と掘り方一 南から



2. 石室奥壁一 南から



1. 石室右側壁—北東から



2. 石室左側壁—南西から



1. 石室内遺物出土状況
—南から



2. 同上 —南から



1. 陶棺出土状況（復原後）—東から



2. 陶棺内人骨出土状況—東から



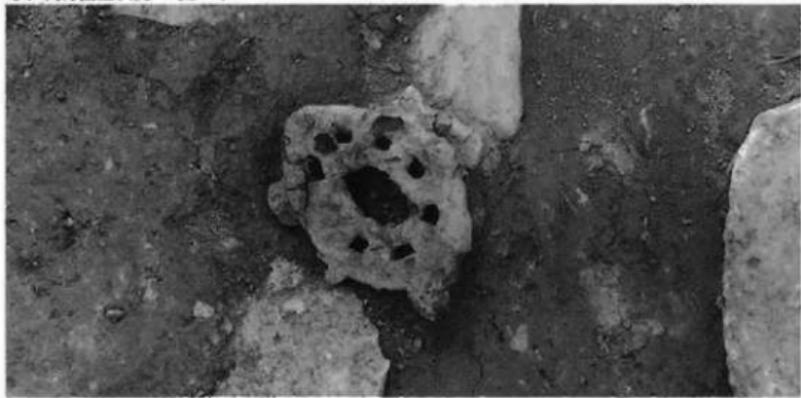
1. 石室奥部遺物出土状況
—南から



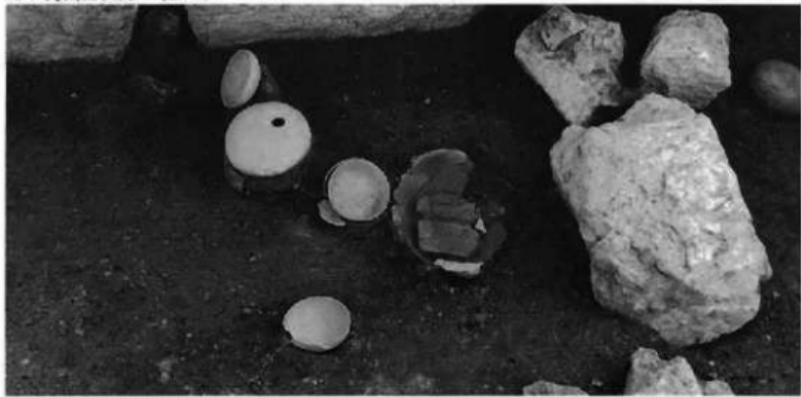
2. 同上拡大—南から



1. 大刀出土状況—西から



2. 鐘出土状況—西から



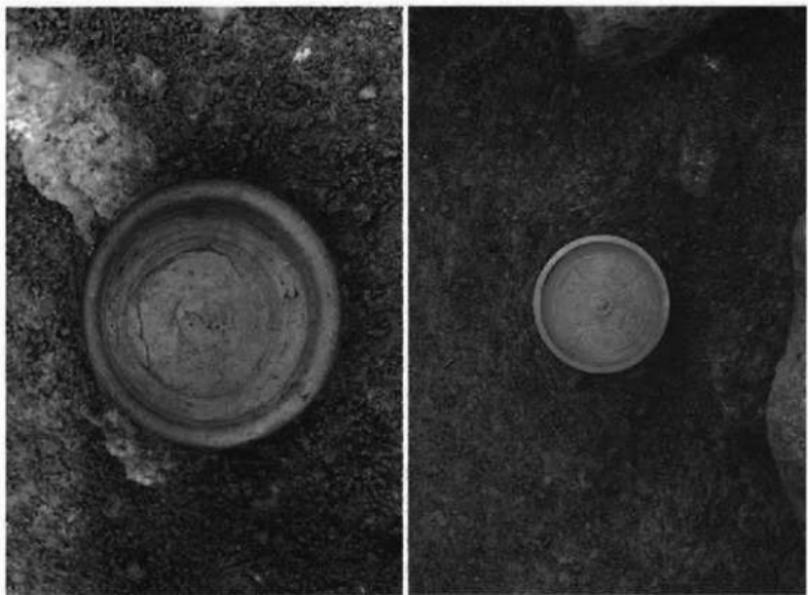
3. 石室内遺物出土状況—東から



1. 石室内遺物出土状況－東から



2. 石室内遺物出土状況－東から



1. 表土中遺物出土狀況（左—須惠器、右—伏龍蝶鳥文鏡）



2. 表土中遺物出土狀況（左—瓦器、右—土盆器）



1



4



2



6



3



15



13



7



19

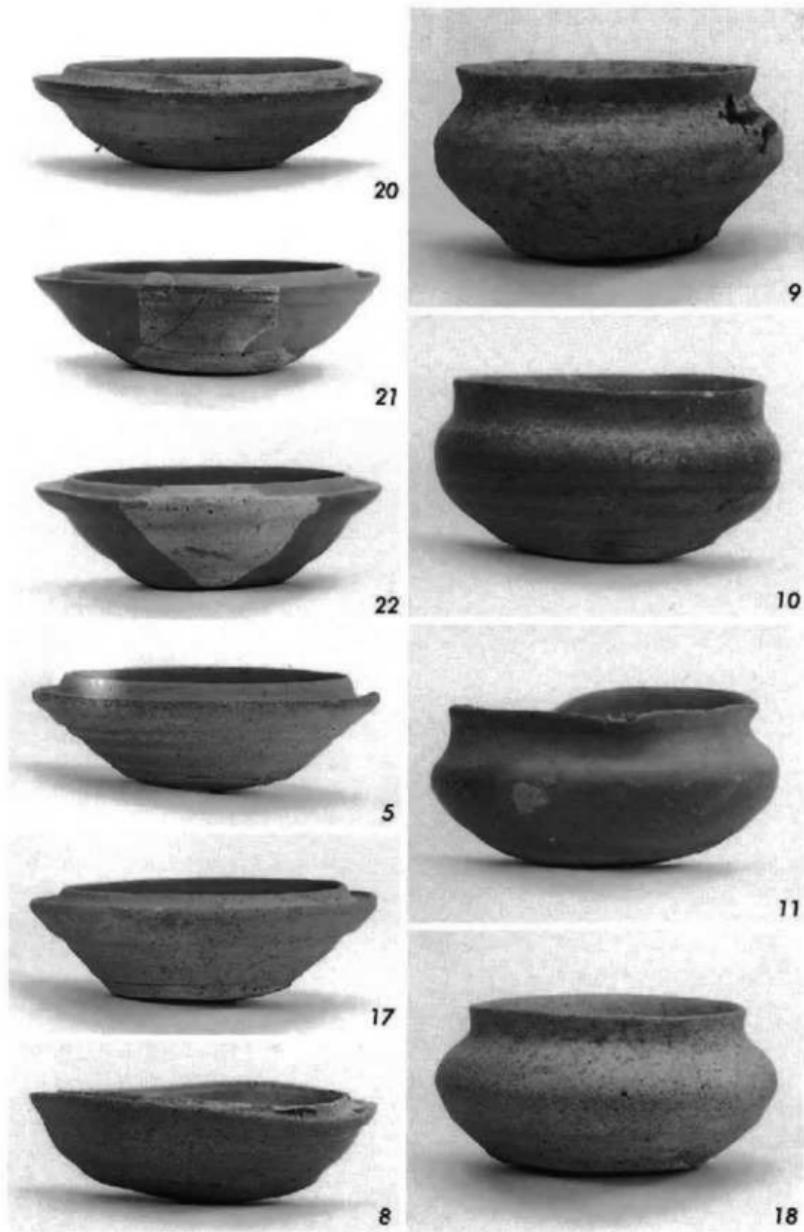


17



14

1号墳出土須恵器



1号墳出土須恵器



23

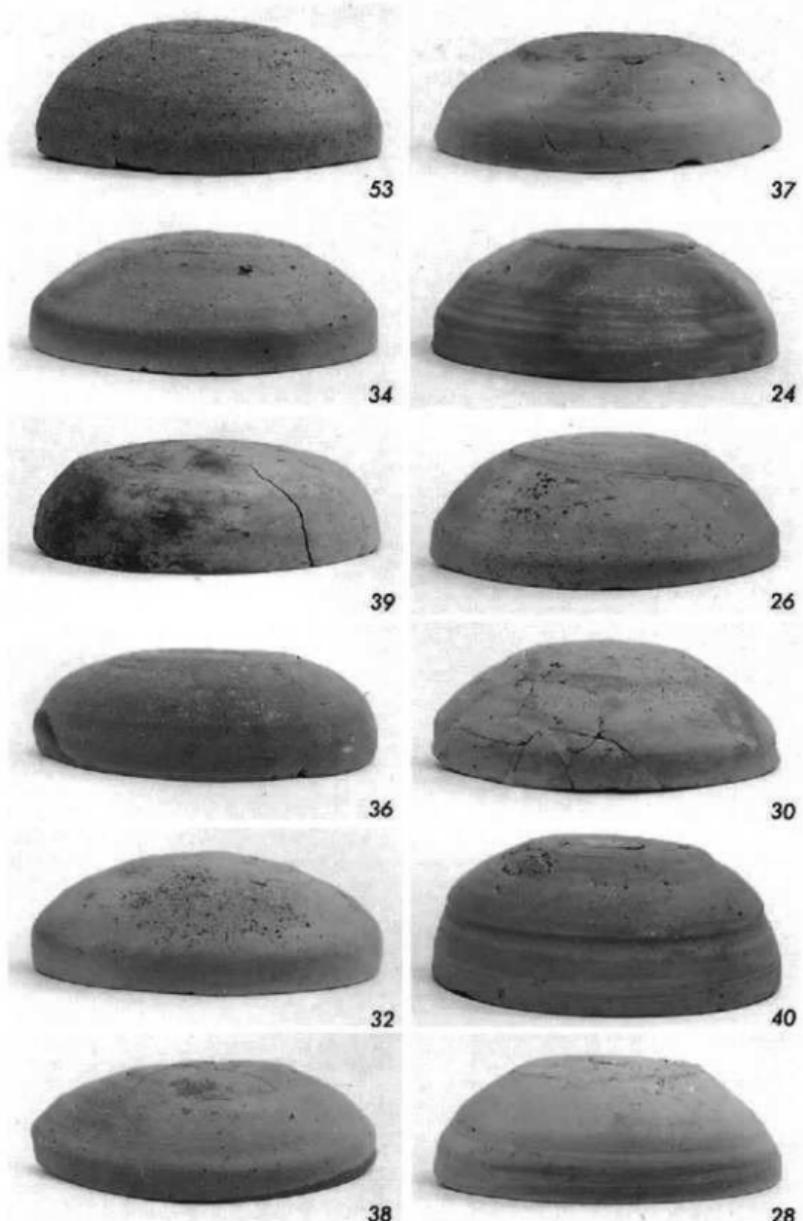


128

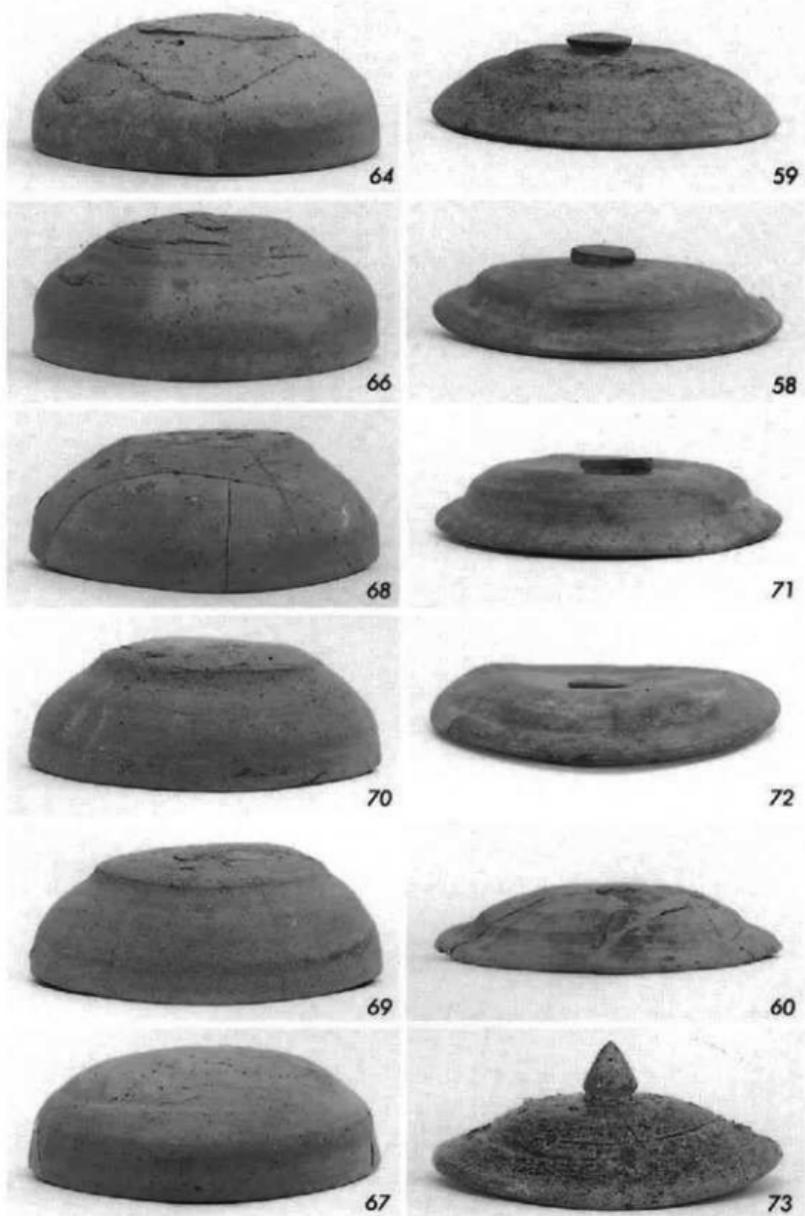


129

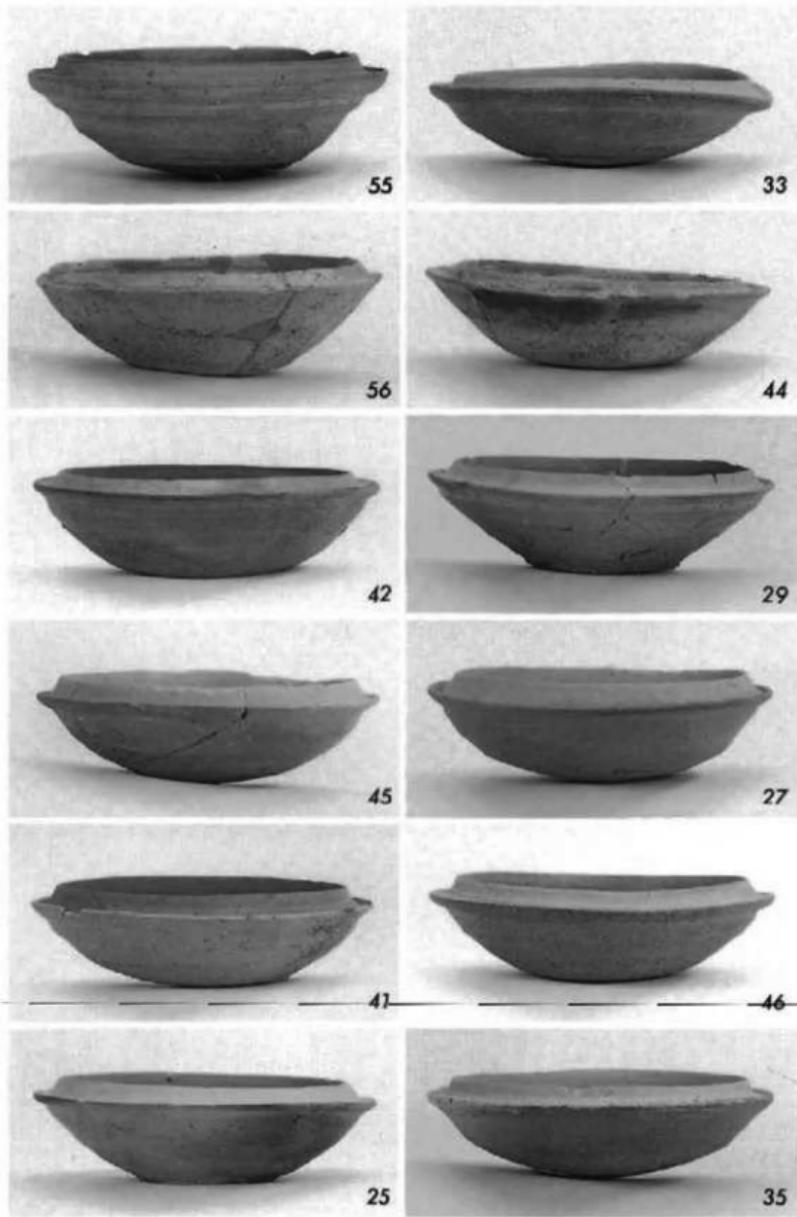
1号墳出土須恵器



2号填出土須恵器



2號填出土須器



2号墳出土須惠器



47



65



31



54



43



62



76



61



77

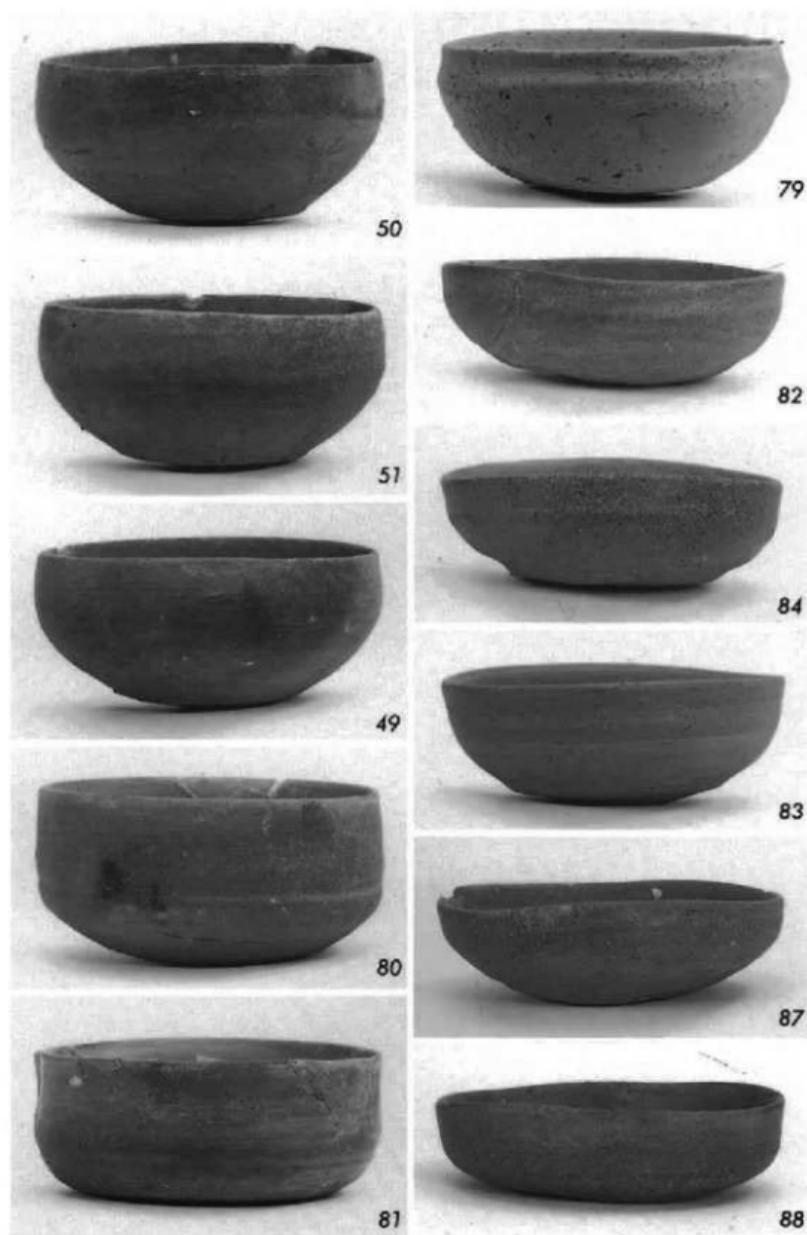


48

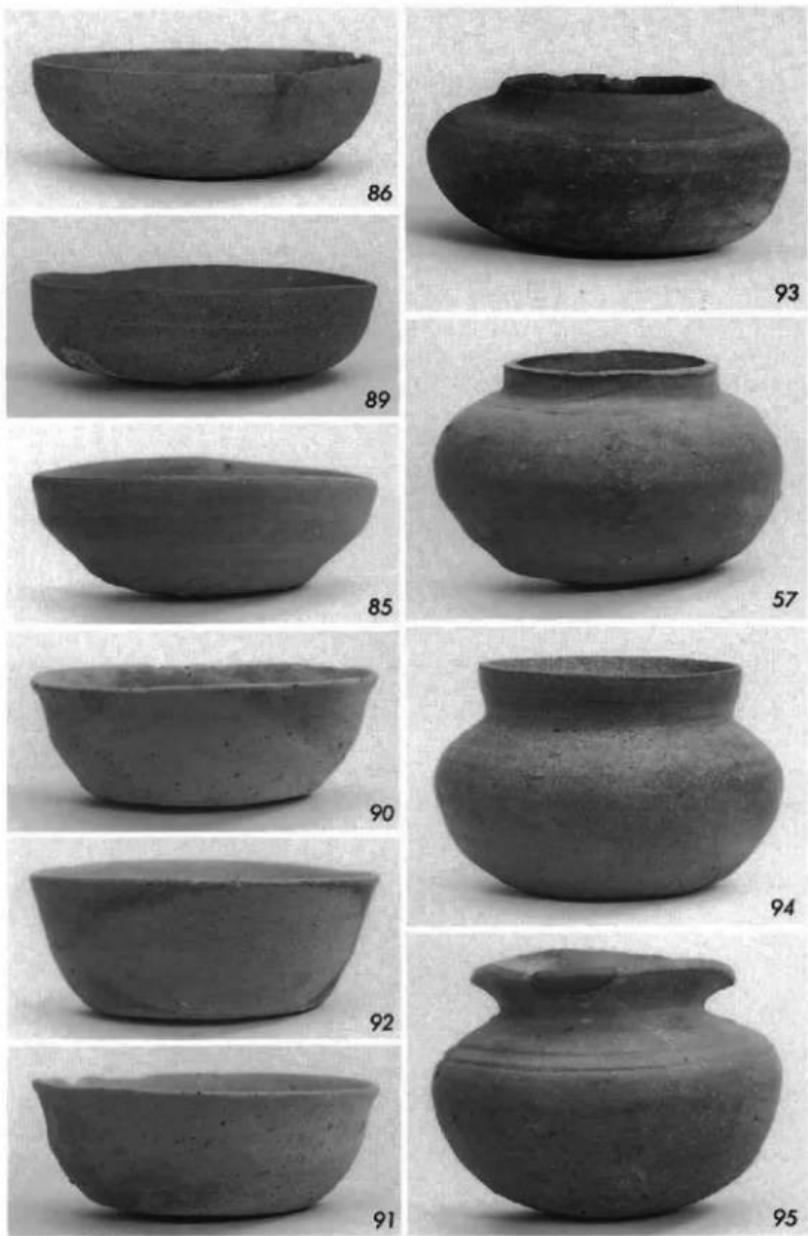


75

2号墳出土須恵器



2号墳出土須恵器



2号墳出土須恵器



96



97



100



102

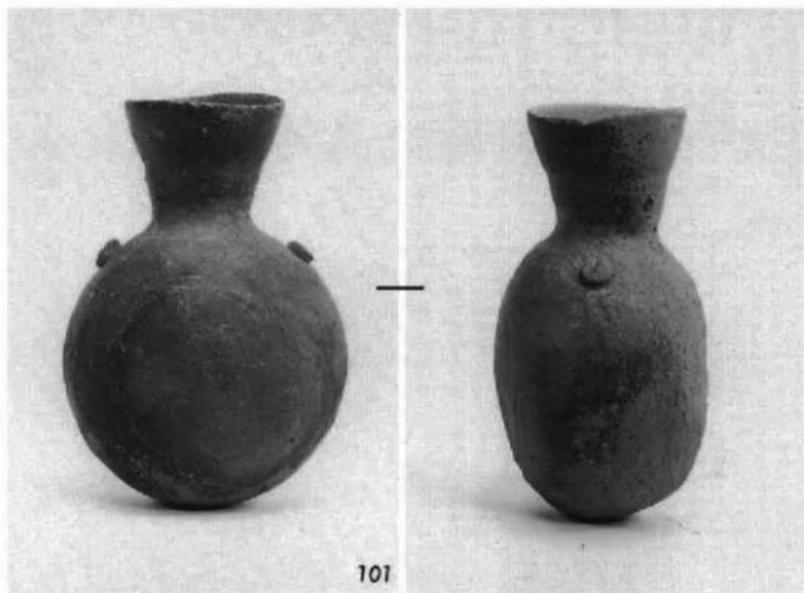


52



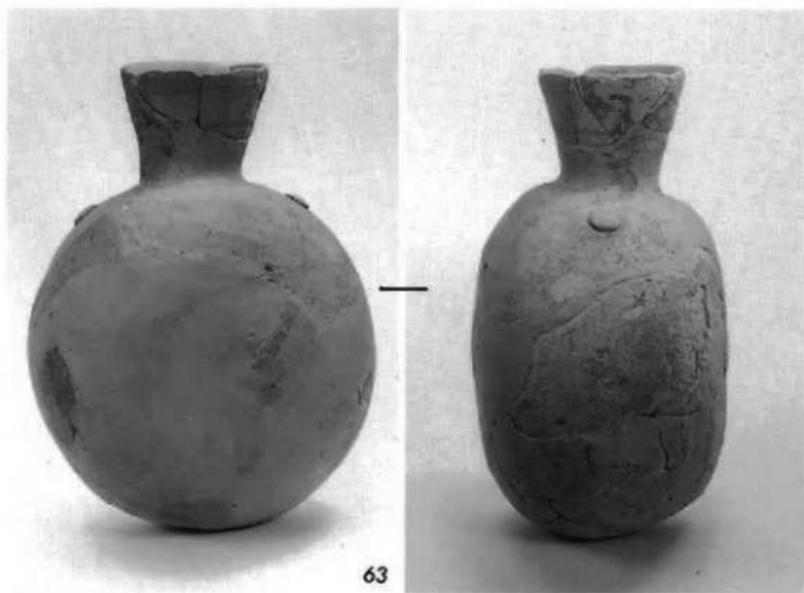
105

2号填出土須惠器



101

1. 2号墳出土須恵器



63

2. 2号墳出土須恵器

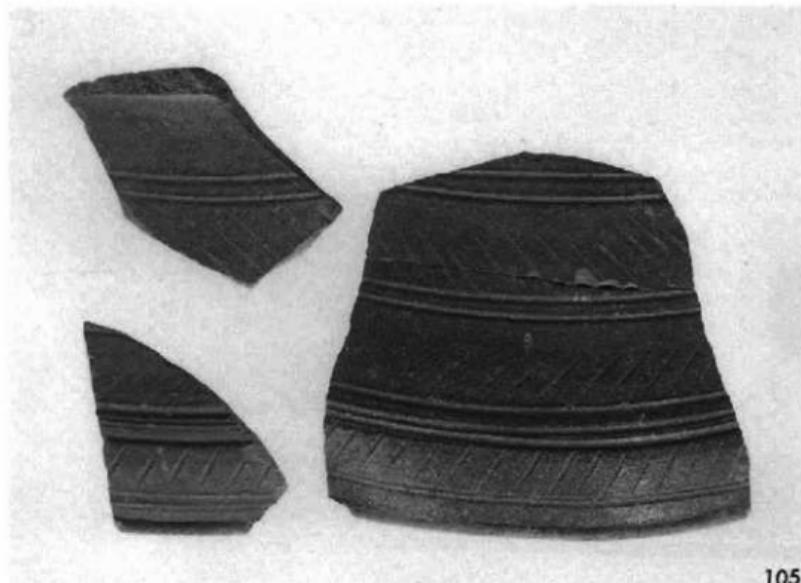


98



99

1、2号墳出土須恵器



105

2号墳出土須恵器



111



112



111
112



36



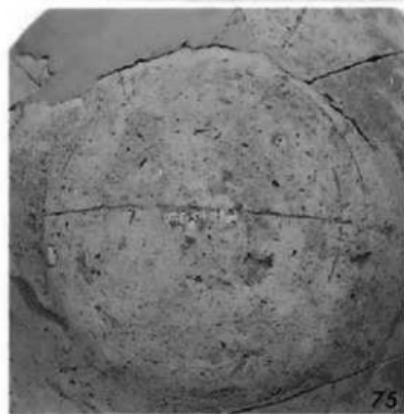
47



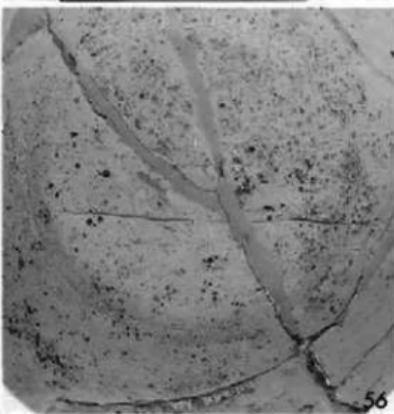
38



11

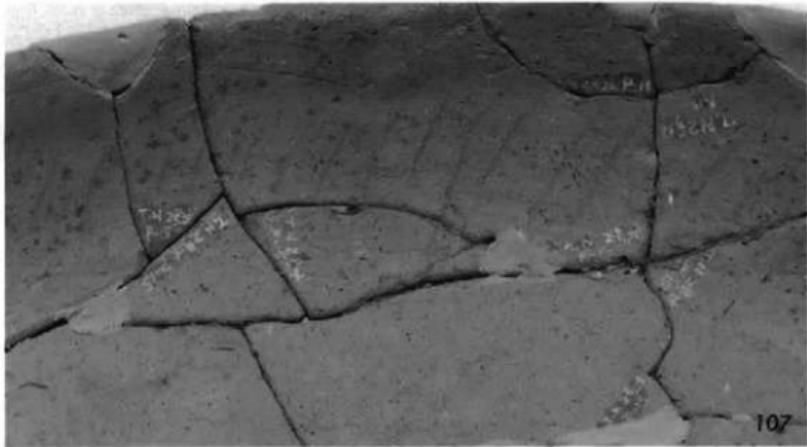


75



56

須惠器ヘラ記号



107



108

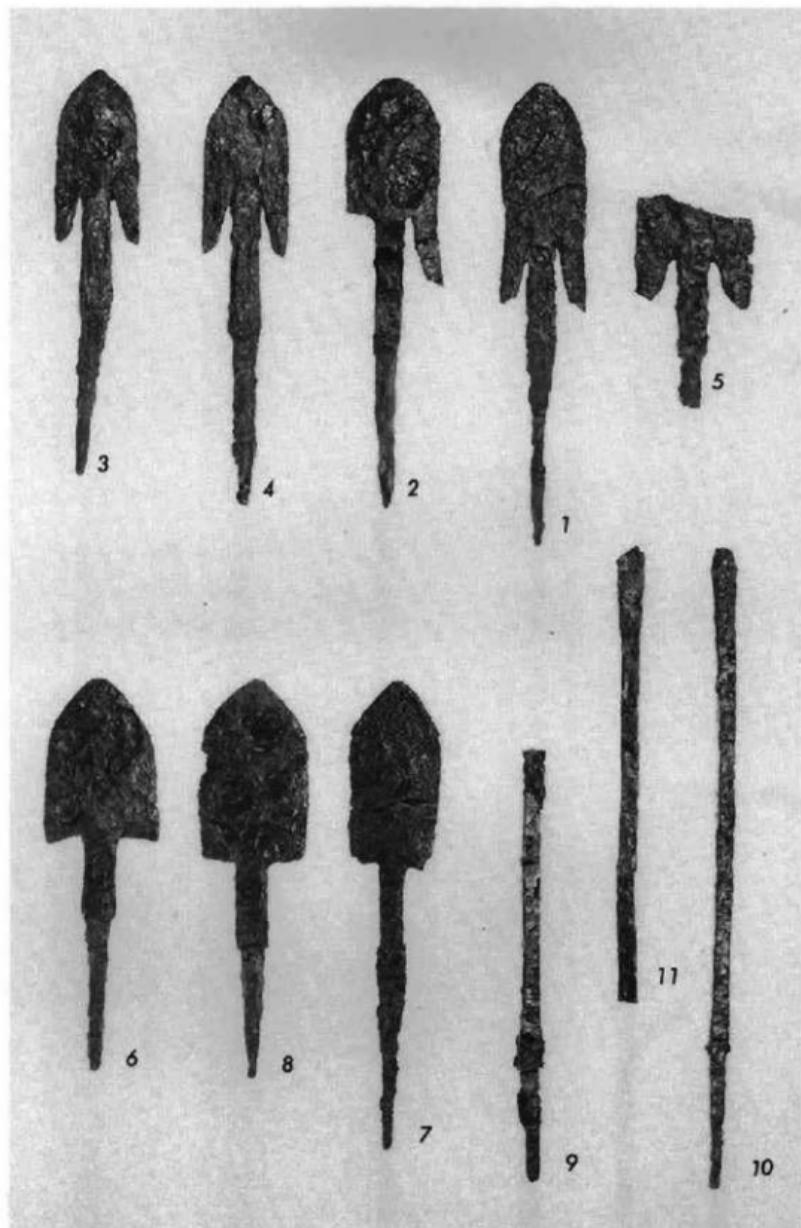


109

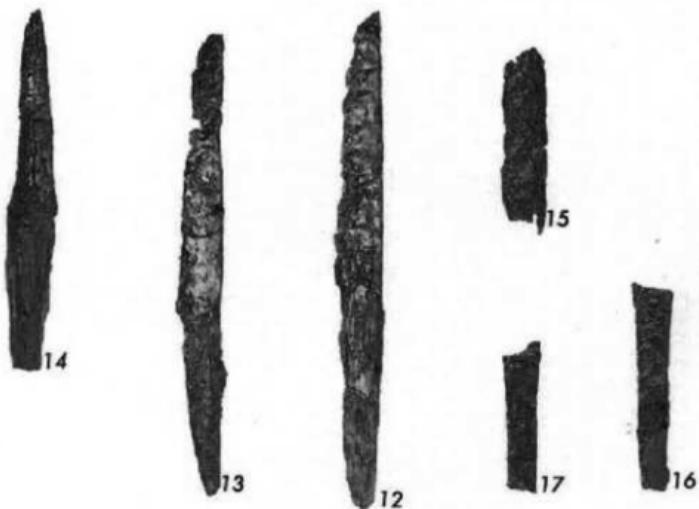


12

土師器 (12—1号墳、107~110—2号墳、上—107内面の暗文)



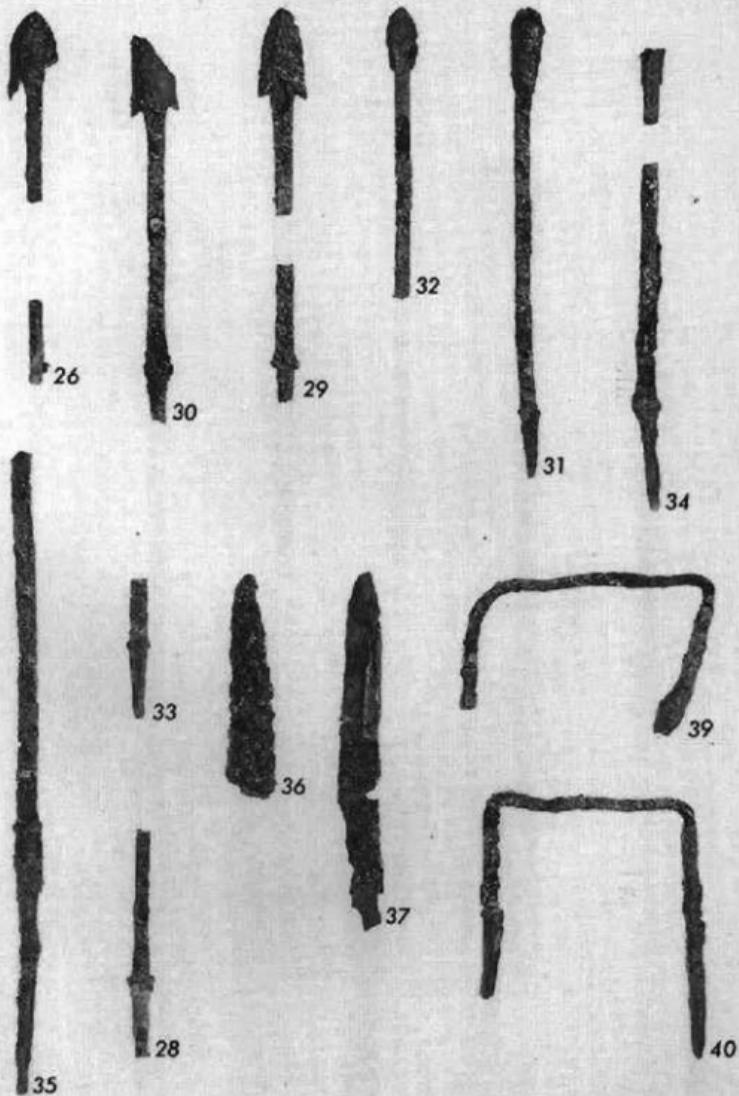
1号墳出土鉄器



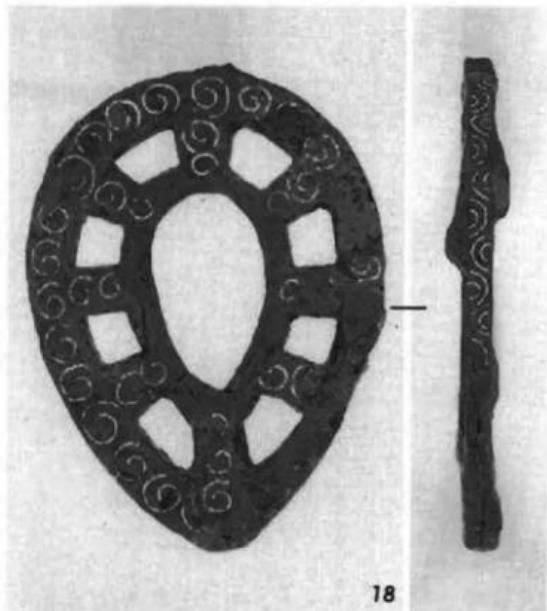
1. 1号墳出土鐵器



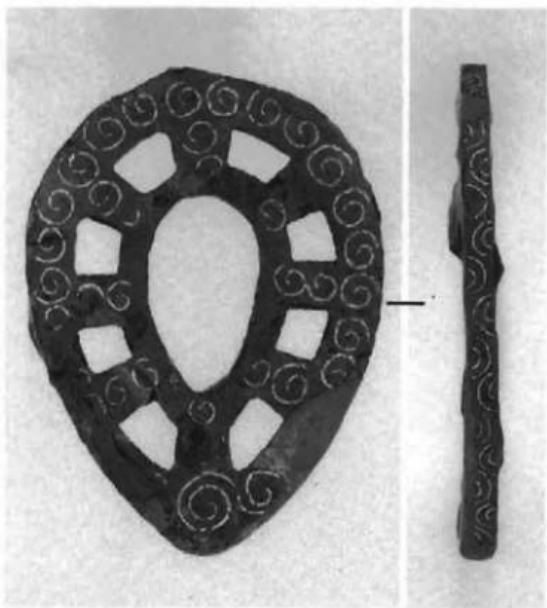
2. 2号墳出土鐵器



2号墳出土鐵器

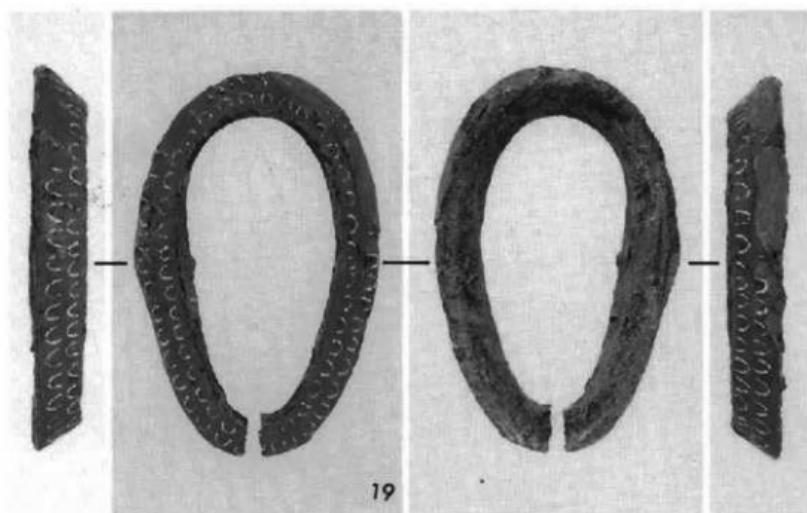


18

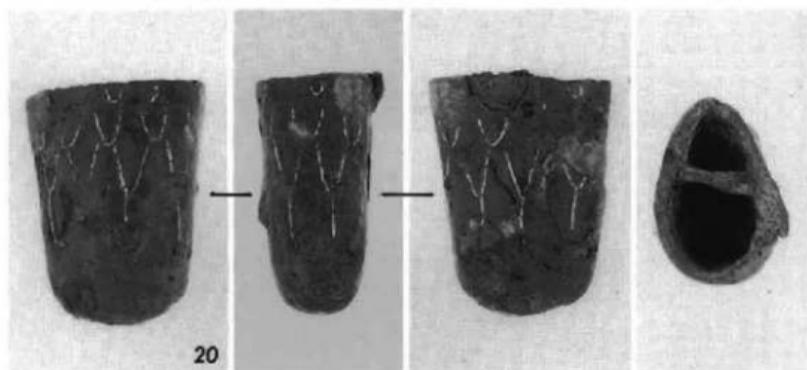


21

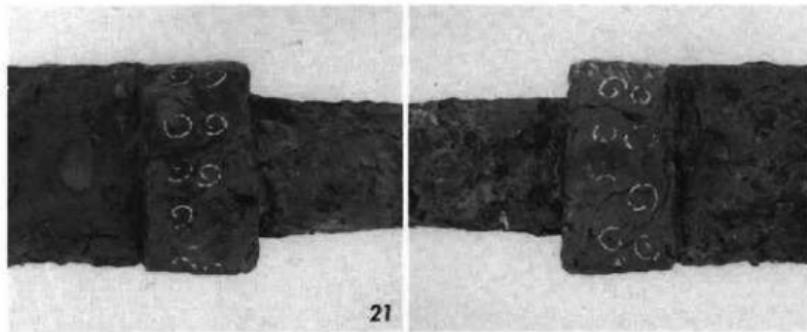
銀象嵌大刀



19

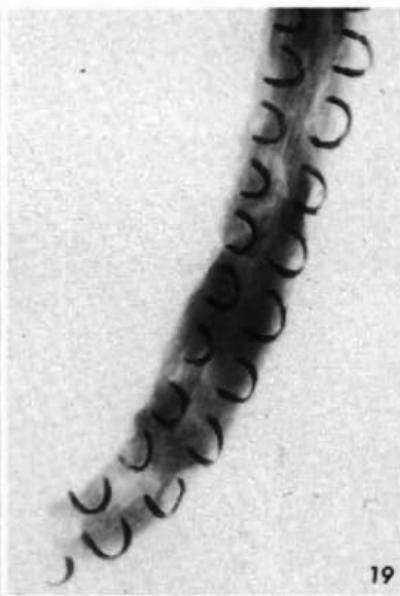
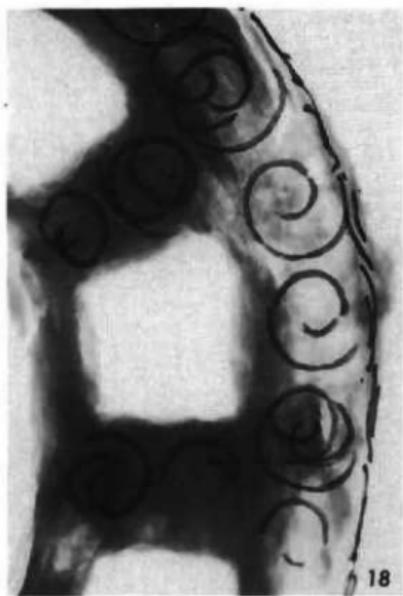


20

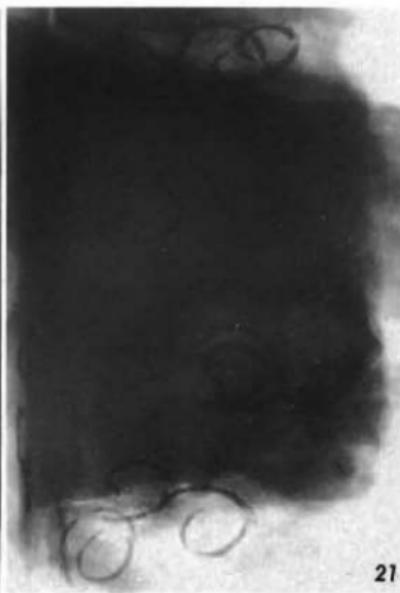


21

銀象嵌大刀



1. 銀象牙X線寫真部分拡大



2. 同上



113



119



115



124



114



118



117



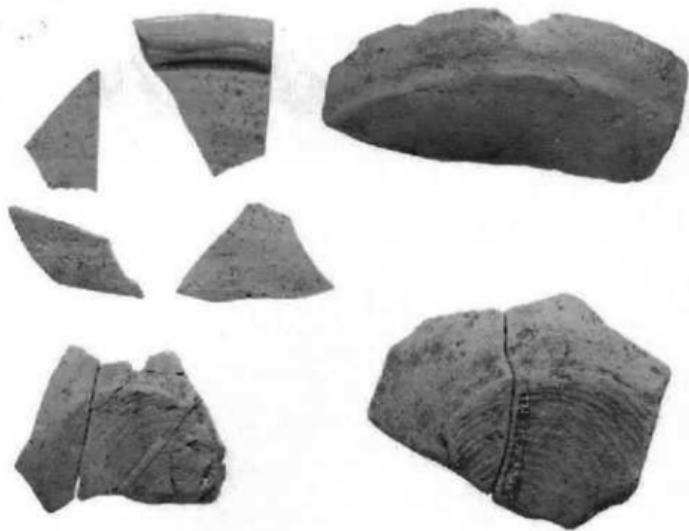
116



121



126



1. 中型遗物



2. 丹波烧罐

兵庫県文化財調査報告書 第48冊

1987年3月31日

沢の浦古墳群

編集 兵庫県埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

TEL (078) 531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

TEL (078) 341-7711

印刷 株式会社 精文舎

〒652 神戸市兵庫区下沢通6丁目2-18

TEL (078) 575-4729
